論文レポートの書き方

三浦 修著

論文・レポートの書き方

三浦修著

まえがき

論文・レポートの書き方についての本を考えてみてくれ、と『実日新書』出版部から言われたとき、私はオウムがえしに「そんなもの、いらないんじゃないか」と返事をした。私も教師として、もう十年以上学生のレポートや論文に接してきた。しかし、私の指導法は、ひとりひとりの学生の一篇一篇のレポートや論文について、その場その場で具体的な指導をすることで一貫していた。それがいちばんよい方法だと考えてきたし、いまもそう考えている。

おまけに、レポートや論文の書き方については、いままでにも何冊かの類書が出ているはずだ。そういうものを読めば、レポートや論文の書き方は十分わかるだろう。そう返事もしておいた。

数日たって、これまで出版されたレポートや論文の書き方についての本が、出版部から何冊か持ち込まれた。いままでの類書を読んで、再考の余地がないかどうか検討してみてくれ、ということだった。

それで、持ち込まれた数冊の類書を通読した。正直のところ、ビックリした。私が読んだ限りでは、レポートや論文の書き方を指導する本が、さっぱり論理的でないのである。ある本は

作文論に終始し、ある本はもったいぶった形式論をふりまわし、ある本は読んでいるうちに、頭がおかしくなってきた。スジらしいスジがなく、まじめな思考がついていけないのである。レポートや論文をほんきで考える学生が、こういう案内書を読んでは気の毒である。私自身は、レポートや論文の書き方を指導する専門家ではないけれど、学生の立場に観点をすえて、もっと親切にスジのとおった案内書があっていいはずだ。私は、そのとき、この本を書いてみようという気になった。

いわば、本書は、従来の類書に対し、学生のために私が感じた〝義憤〟に発したものである。といっても、私はなにも〝正義漢〟を気取るつもりはない。また、本書を読んだみなさんのなかには、私が類書に感じた以上に強い〝義憤〟を本書に抱く人もいるだろう。そういう人がいていいし、とうぜんいるはずだ、とも思う。知識や文化の発達は、そうした批判の積み重ねの上に成り立つ、ともいえるからだ。

が、なによりも、ここでは、本書の筆者としての、私のレポートや論文についての基本的な考え方を一言しておきたい。本書で取り扱うレポートや論文は、主として学生の問題として考えてある。しかし、レポートや論文の意味は、たかだか十数年間の学生時代に限定されるものではない。レポートや論文は科学的な修練であり、合理的な追求の試みである。レポートや論文と正しく真剣に取り組むことで、学生は冷静で公平なものの見方・考え方と、それにふさわ

しい円満な人格を育てていくはずである。いや、レポートや論文は、そのためのいちばん有効な手段だとさえ考えられる。

そう考えるのでなければ、レポートや論文をほんきで取り上げるように、学生にすすめる気にはなれないし、本書を書く気も起こらなかっただろう。レポートや論文の直接の成果は学校の成績に現われるだけかもしれない。が、合理的なものの考え方ができる人は、少なくともそうでない人よりは、はるかに健全な社会人となり、円満な家庭人ともなれるだろう。たとえ、レポートや論文を書くこと自体は学生時代に終っても、その効果はレポーターの一生にわたって継続する。現にそう考えて私は学生のレポートや論文に接しているし、その考えがまちがっているとも思っていない。

とはいうものの、本書はキチンと机で読んでいただくような固苦しい本ではない。新書という性格からも、寝っころがってでも、電車にゆられながらでも、気楽に読めるように仕立てたつもりである。ただ、レポートや論文がもつ意味の大きさをふだんから感じ、それを少しでもみなさんにわかっていただきたいという、私のささやかな願いを本書から汲みとっていただければ幸せである。

なお、こういう小さなこころみでも、私ひとりの力ではとても完成はしなかっただろう。ま

ず、参考にした文献のうち、おもなものをあげておく。

Vivian, Charles H. and Berneta M. Jackson, *English Composition, Fundamental Principles of Effective Writing*, Barnes & Noble, Inc., New York, 1963.

Cordasco, Francesco and Elliot S. M. Ganter, *Research and Report Writing*, Barnes & Noble, Inc., New York, 1963.

Perkins, George, *Writing Clear Prose*, Scott, Forsman & Co., Chicago, 1964.

Hubbell, George S., *Writing Term Papers and Reports*, Barnes & Noble, Inc., New York, 1963.

Albaugh, Ralph M., *Thesis Writing*, Littlefield, Adams & Co., Paterson, New Jersey, 1962.

アメリカの大学では、学生のレポートに対する指導がかなりゆきとどいていると聞いていたので、以上のような文献をとりよせてみた。形式上の問題については、部分的には、かなり参考になった。むろん、こういう文献にも、多くの啓蒙書にありがちな形式主義や論理の不足やはあった。が、ともかく、本書に生かすエキスはもっていた点で、ここにご紹介しておく。

いろいろな方に、お世話にもなった。友人の早稲田大学図書館館員青木枝朗氏には、とくに「図書館」の項で有益な忠告を受けた。また、同氏のレポート「ファーサリ日本写真帖」を本

書のレポートの例にさせてもらい、私が本書に合うよう自由に加筆することを許してくれた。東京工大八杉竜一教授からは、過分な推薦のことばをいただいた。『実日新書』出版部の吉戒喜義氏は、さしずめ私の牽引車の役を果してくれた。そのほか、折りにふれて快く示唆や助言をくださった少なからぬ人々に対して、心からお礼を申し上げる。

改訂にあたって

発刊以来、まったく予想もしなかったほどに、本書は多くの読者に迎えられた。私にとって、このことは、うれしいよりも、むしろ大きな責任を伴う現象であった。版を重ねるごとに、小さな改訂はつづけてきたが、第十二版の刊行にあたっては、「就職試験論文の書き方」その他に許す限りの改訂を施して、本書の〝今日性〟を保った。ここで、ひとこと読者におことわりし、あわせて、改訂に際して助力をいただいた方々に、あらためて謝意を表したい。

昭和四十三年十一月

著者

目次

第二章　論文の書き方

装幀 石岡瑛子

第一章　レポートの書き方

1　レポートとは何か

「レポート」ということば

「レポート」とは何ぞや？　あらためてこう開きなおってみても、「レポート」にかくべつむずかしい定義があるわけではない。むろん、「レポート」は英語 report が日本語化したもので、カタカナ文化全盛のおりから、「報告書」という日本語のお株をすっかりさらった、一種の現代語といえることばである。「政界レポート」「経済レポート」「芸能レポート」などなど、新聞・雑誌でいくらでも目につく見出しだろう。

英語の report は、もともとは「うわさばなし」の意味だった。「調査報告」という意味が加

わったのは十五世紀になってからで、あるいは、えらい殿様が家来に「うわさ」の真偽を「調査報告」せい、と命令するようないきさつがあったのかも知れない。

そして、十七世紀後半になって、調査報告を文書にした「調査報告書」という内容もあわせてもつようになった。さきにあげた日本語の例は、みんな「調査報告書」という性質で、このことばを使っている。

新聞・雑誌の見出しばかりではない。新聞・雑誌の記事の多くが、「調査報告書」の意味で「レポート」だし、小学生の宿題も、大学者の大論文も、おなじように「レポート」ということばで呼べる。

が、「レポート」にいちばん縁が深く、「レポート」にいちばん悩まされるのは、言わずと知れた、学生のみなさんだろう。

だから、本書で述べるレポートの書き方も、主として高校生以上の学生の問題として考えた。レポートが生成発展したかたちの「論文」についても、やはりおなじ立場で話を進めることにした。

レポートの意義

レポートとは、調査報告書のことである。そんなことは、もうわかった。しかし、学生が書

くレポートに、どれくらい深く広い内容があればいいのか？　となると、話がだいぶちがってくる。

もちろん、ズバ抜けた学生のすばらしいレポートが、その知識の分野で画期的な業績をあげることもないことはあるまい。けれど、ほとんどの学生のレポートは、とっくにわかっている問題について、とっくに出ている解釈をなぞっておしまいになるのがふつうである。と言っても、それがいちがいに悪いというのではない。失礼ながら、学生は学問というトリ小屋のなかのヒヨコである。学生のレポートにオリジナルな研究成果を強要するのは、ヒヨコに金の卵を生め、とせっつくのに近い。

だとすると、学生のレポートは、やっぱりあちこちの書物からあれこれと知識を拝借して、なんとか、かっこうのつくようにまとめればすむのか？

結論から言えば、いちおうはそのとおり。だが、「あちこちからあれこれと借りて、かっこうのつくようにまとめる」方法が、実は問題なのである。つまり、この方法を正しく追うかどうかに、レポートの意義の有無はかかっている。

正しい方法にまっとうに従ったレポーターは、レポートの作成にどんなに時間と労力とを投資しても、かならずそれに見合うだけの十分な反対給付を受ける。

というのは、よいレポートはレポーターに学問のドアを開き、彼あるいは彼女を研究の間に

招じ入れ、将来どういう課題に出会わしたときにも、それを手際よく処理するマナーを教えてくれる。
なぜか？　どんな研究にも要求される、考え方にムリがなく、スジが通っているという条件――それが、ほかならぬレポート作成の大前提でもあるからだ。
調査し、調査した結果をまとめる作業を考えてもいい。あるテーマについて調査するというからには、その問題についての知識をなるべくいっぱい集めるのに越したことはない。だが、いっぱい集めるだけで、盛りだくさんの一品料理になっては芸がない。ひとつのテーマの皿に並べる材料にも、いろとりどりの変化はもたせたい……というように、広く多角的に調査してひとそろい知識が集まったら、つぎはそれをまとめる番。
このときも、ごった煮ふうの盛り合わせではゲンナリする。見た目もよく、読者の箸がしぜんにはかどるようなものでありたい。
そこで、やぶにらみから生まれる偏見、まちぼうけに似た希望的観測、弱い犬のほえ声のような誇張などは、いっさい捨ててすっきりしたかたちにしなくてはならない。
逆に、ムりのない推論・判断は多々ますます弁ず。明快な論理は、レポートにシコシコと快い歯ごたえをもたらすものだからだ。
そのうえ、右のような調査とまとめの作業は、頭で考えておしまいになるわけではない。ま

た、口頭で発表して、あとは〝風とともに去りぬ〟とすましてもいられない。

なぜなら、レポートは、右の作業過程を文書化したものだからだ。文書の形でいったん提出した調査報告については、あとから「あ、あそこは考えちがいだった」と気がついてもまにあわないし、「さっきのは言いそこない。実はこれこれしかじか」という便利な言いかえも許されない。いやおうなしに、ムリがなくスジが通った報告をするよう、なおのこと心がけざるを得ないだろう。

レポートの調査とまとめの過程を、もう少し具体的に順序立ててみよう。すると、ひとつのレポートを完成するということには、テーマを考え、資料を選び集め、構想を練り、ムリ・ムダ・ムラのない叙述で調査の結果を文書化する、という内容が含まれる。けっして一夜漬けや、やっつけでできる仕事ではない。

じっさい、学生の頭脳をフルに回転させる作業として、レポートの右に出るレッスンはあるまい。

教師の検閲をパスすればいい、合格点がもらえれば言うことなしでは、せっかくの好機がもったいないというものである。ネコに小判、カエルの顔に水、ついでに「学生にレポート」などということわざが一般化しないように、わが身わが頭がたいせつならば、レポートにほんきで取組む心構えをもってほしい。

2　テーマの選び方

避けたいテーマ

レポートを書くばあい、最初に問題になるのは、もちろんテーマの選定である。テーマの選定は、学生にまかされるときもあろうし、教師がきめる場合もあろう。が、きまったテーマをあたえられたときでも、テーマ自体を変えることはできないにせよ、それをどう解釈して取り扱うかについて、レポーターはある程度の選択権をもつ。と言っても、森羅万象（しんらばんしょう）よりどりみどりにレポートのテーマになるわけではない。とりわけ、初心者はテーマの選定にあたって、次のような点に注意したほうがいいだろう。

1. 興味がもてないテーマ　はじめから興味を感じなくては、積極的な調査意欲が湧くはずもない。食わずぎらいで、手をつけてみたら意外におもしろいテーマだった――そういうことも、むろんあり得る。が、ほかに関心のもてるテーマがあれば、そちらに乗りかえたほうが賢明だろう。テーマの変更がきかないときは、じぶんの興味にできるだけ合うよう、テーマへの観点をいろいろずらして工夫するとよい。講義内容の復習という、わりあい単純な性質のレポ

ートを別にすれば、課題レポートのテーマには、とうぜんそうした幅があるはずである。

2. 学界で論争中のテーマ　一見、たいへん魅力的だが、論争の当事者は、自説を通すためにどうしてもある程度の偏見に走りやすい。「ああだ」「こうだ」とモメているなかに入っていっても、「独断」のコブを作るくらいがせきのやま。事実と偏見とをはっきりと見分け、大岡裁きをつけようなどという野心は、起こさないほうが安全である。

3. 大きすぎるテーマ　大きすぎるテーマは、避けるというより絞っていく。たとえば、「文学について」。こんなとてつもないテーマで大風呂敷をひろげてみても、しっかりした包みは、まあ、できっこない。さしあたり「日本文学について」と制限してみる。が、まだ大きい。日本文学の散文か韻文(いんぶん)か、どちらかにしたほうがよさそうだ。そこで「日本文学の散文について」としてみた。

だが、散文にもいろいろある。小説、評論、戯曲(ぎきょく)、随筆……どれにしよう? 小説をとって「日本文学の小説について」。時代も限ったほうがいいな、ということで、「明治・大正期の小説について」。だれを取り扱うか? 漱石(そうせき)にしてみよう――「漱石の小説について」。漱石のどの作品にするか――『坊っちゃん』。というわけで、「『坊っちゃん』について」……こんなぐあいにどんどん制限を加えていけば、さしずめ、つぎのような図ができるだろう。

文学──→日本文学（地域の限定）──→日本の散文・日本の小説（ジャンルの限定）──→明治・

大正期の小説（時間の限定）→漱石の小説（作家の限定）→『坊っちゃん』（作品の限定）→『坊っちゃん』の主人公の性格（作品の取り扱い方の限定）→……

テーマが小さくなればなるほど、調査の焦点がはっきりし、レポートはそれだけ深さとまとまりとを増すだろう。少なくとも、そうなる可能性は大きくなる。

が、山椒の小粒もほどほどである。小さければ小さいほどよい、というものでもない。

4．小さすぎるテーマ　こんどは、かりに生物学からテーマをとったとする。動物学に絞り両棲類（りょうせいるい）を選んだ。そして、前図のような制限を加えていく。

生物→動物→両棲類→現存する両棲類→日本に現存する両棲類→カエル→アマガエル→アマガエルの生態……

この辺までは、無事にいきそうだ。だが、細分化をさらに続けアマガエルの四肢の吸盤→アマガエルの四肢吸盤細胞構造の特殊性……とでもなったら、どうだろうか？　大風呂敷も扱いにくいが、郵便切手でものを包もうとするのも、それに劣らず難儀である。

つまり、テーマを縮小するというのは、問題を専門化することにつながる。専門化が進むにつれ、調査の焦点がはっきりすることは、前に述べたとおりである。

が、専門化が極端にはしると、いちど結んだ焦点もムザムザ再拡散して、もとの木阿弥（もくあみ）にな

りかねない。じぶんの守備範囲を飛び出して、スタンド・プレーをねらうのはエラーのもと。右の例の「アマガエルの四肢吸盤細胞構造の特殊性」などというテーマは、それこそ、動物学専攻の生物学者でも、とくにカエルの研究を専門としている学者がとりあげるような問題だろう。

むろん、テーマの縮小・専門化をどの辺でストップするかは、ケース・バイ・ケース、その人その人によってちがう。とりあげた問題についてレポーターがそれまでに貯えてきた知識、レポート作成に許される時間、利用できる資料の良否・多少、などなどの条件が決めることだといってもよい。が、レポートのテーマは小さいほうがいい、という原則には変わりがない。「ここまでなら、まとまったレポートになりそうだ」という、ギリギリの線まで縮小を進めてけっこう。ともかく、大きすぎるテーマよりは、小さすぎるテーマのほうが、相対的にはまさっている。

テーマの例

テーマ選定のコツをのみこんでいただいたところで、参考までに、いろいろな知識の分野におけるテーマの例をあげてみよう。標準的な例だから、問題の扱い方はかなり一般的である。まあ、洋服売場のつるしの背広くらいに考えていただきたい。なるべく身近な問題を、取り扱

いやすく仕立てたのがとりえだが、ダブダブだと思ったら縮めればいいし、窮屈だったら少し大き目に作りなおすつもりで参考にしてほしい。

〔哲学〕　J・J・ルソーの少年時代と『エミール』

〔心理〕　夢の解釈についての主な理論

〔論理〕　議会の質疑応答における論理的あやまり

〔倫理〕　大学新聞の自由、および検閲の問題

〔宗教〕　最近の教会建築

〔歴史〕　日本の第一次大戦参戦のいきさつ

〔政治〕　社会党外交政策の弱点

〔法律〕　松川事件における自供と物証との法的価値

〔経済〕　炭鉱ストに対する政府の態度

〔教育〕　大学教育におけるゼミの長所

〔数学〕　まちがいやすいグラフの実例

〔物理〕　都市ビルにおける空気調節の諸問題

〔化学〕　ラジウム処理時の危険性とその防止法

〔天文〕　本田彗星の発見について

〔地学〕　建材としての大谷石の利点
〔植物〕　ヒマワリの向日性の特色
〔動物〕　カラスの習性と飼育報告
〔医学〕　入院患者の食餌療法
〔土木〕　昭和橋建設に使われた新工法
〔建築〕　望ましい大学校舎のあり方
〔家事〕　室内装飾で配慮すべき点
〔農業〕　寒冷地における養豚の条件
〔貿易〕　過当輸出競争の弊害
〔交通〕　国鉄の現状と新五カ年計画
〔彫刻〕　塑像の方法
〔絵画〕　安井曾太郎作肖像画の特徴
〔版画〕　さし絵としての版画の長所
〔写真〕　専門誌に見る最近の傾向
〔音楽〕　交響楽の鑑賞法
〔言語〕　大阪市民の日常会話中の方言

〔文学〕『ドン・キホーテ』の諷刺の対象

右にあげたテーマの例のなかで、たとえば、〔宗教〕〔物理〕〔地学〕のテーマとなった問題は、〔建築〕に移してもおかしくない。あるいは、〔哲学〕〔建築〕〔音楽〕のテーマを〔教育〕で扱うこともできるだろう。教会そのものは〔宗教〕のテーマだが、教会建築は〔宗教〕と〔建築〕との二つの知識の分野にまたがっている。高尚に言えば、学問・知識の交流現象ということだし、チャッカリ考えれば、テーマの選定・解釈にはかなりな幅がある、ということにもなる。

レポートの題名

テーマはなるべく小さく絞り、取り扱う問題の範囲をはっきりしておくことがたいせつだが、レポートの題名は、かならずしもテーマがもつ明確さを真っ正直にあらわさなくてもいい。前項であげたテーマの例でいえば、〔地学〕の大谷石は、実際には「栃木県特産大谷石が建材として他の石材にまさる利点」という程度にまで絞って考えたほうがはっきりする。しかし、題名はもっと簡潔でよい。「長助」というなまえでも通用するのに、わざわざ「ジュゲムジュゲム……」と限定を重ねた落語もある。右のテーマの題名も、シムプルに「大谷石について」ですむ。

テーマと不即不離の関係にある限り、題名はあっさりしているほうが望ましい。そのために

テーマが多少ぼんやりしてもかまわない。英語なら、さしあたり"Some Aspects of〜"日本語にすれば「――についての一考察」というのも、題名を考えるひとつの基準になろう。アマガエルの生態を扱ったレポートでも、アマガエルのヘソの有無について調査した報告でも、どちらも「アマガエルについての一考察」でかたづく。
ずるく考えると、題名がぼんやりしていれば、レポートを読む教師に不必要に専門的な批評態度をとらせないですむ。また、題名でテーマの細部をぼかしておけば、それだけ、レポートの内容について好奇心をそそるという利点さえある。もちろん、「洋品店」と看板をかかげて、セトモノを売ったりしてはムチャクチャだが。

3　資料の利用法

資料の収集

テーマがきまった。いよいよ、広く深く調査して、レポートの資料を集める段どりになった。
資料は多ければ多いほど、変化に富めば富むほどよいことはいうまでもない。が、それも資料の品質がよければ、の話である。たくさん、いろいろと集める前に、それぞれの資料の是非・

適否を識別することがたいせつである。

なまの資料と加工した資料　野菜とおなじように、資料も新鮮ななまもののほうが栄養価が高い。まず、身近な例で考えてみる。

子供Aの遊び友だちBがとんできて、「たいへんだよ。Aちゃん、ころんで頭を打ったってさ」と、Aの親に報告した。親が驚いて立ち上るところに、一足おくれてAが帰ってきた。「ころんで頭を打ったって?」「ううん、ひざを打ったんだよ」「どれどれ、お見せ」なるほど、Aのひざに血がにじんでいる。

親は、とうぜんAの話を信用するだろう。当事者Aの話とひざの傷とは、この問題についてのなまの資料であり、Bの話は、なまの資料にたいする紹介・解説――二義的な、加工資料としての価値をもつにすぎないからである。

まったくおなじことが、学問の世界でもしょっちゅう起こる。考古学などで、学界の常識となっていた仮説が、ひとつの新らしい発掘品のためにひっくりかえる例はザラである。仮説はある事実から出発した推定にもとづく解説だが、発掘品はなまの資料として、仮説を圧倒する説得力をもつからだ。

レポートの資料でもおなじことである。かりにJ・J・ルソーの体系的な思想を調べるとしたら、彼の著作がいちばんなまの資料になる。そして、ルソーの著作についての紹介・解説の

類は、いっさい二義的な加工資料になるだろう。

たいていの場合、なまの資料よりは加工資料のほうが、手に入りやすく、わかりやすい。ある事件の当事者や、事件をじかに見聞した人の体験談は、その事件についてのなまの資料だが、時間や場所がはなれるに従い、彼らの体験談に接する機会は少なくなる。かりに接することができたとしても、彼らの体験談には矛盾(むじゅん)があったり、まとまりがなかったり、どうにもわかりにくいかも知れない。それよりは、第三者の事後の解説のほうが、ずっと手に入りやすく、わかりやすいだろう。

古い歴史や文学の調査で、古文書がなまの資料になる率はかなり高い。古文書もまた手に入りにくく、読みにくい。古文書の解説を読んだほうが、よっぽど能率的だろう。あるいは、ルソーの著作を読むよりは、ルソー関係の解説書にあたるほうが、ルソーの思想はずっとはっきりのみこめるかもわからない。

それでもなお、正確をむねとする調査では、ほとんどの場合、なまの資料は加工資料にまさる。理由はかんたん。なまの資料はそのものズバリ、それ自体について判断をあやまらせる危険がない。子供のひざのけがを見ながら、頭のけがかも知れない、などと気を回す親がいないようなものである。けれども、別の子供の報告にはまちがいがあった。なまの資料についての加工資料にも、やはりまちがいがないとは限らない。

解説には、解説者の考えがしぜんに入る。その考えが〃絶対に〃正しければさいわいだが、まちがっていたり、まちがって受けとれそうなものであれば、レポーターは不適当な資料をもとに、まちがった調査報告を書くことになりかねない。

とりわけ、科学実験・実態調査・芸術鑑賞など、レポーターの個人的体験が土台になるテーマでは、なまの資料と加工資料とはきびしく区別して扱わなければならない。なぜなら、そういうレポートでは、レポーター自身の実験結果・調査統計、もしくは作品から受けた感銘が、いちばんたいせつななまの資料になるからだ。この種のレポートで、個人的な体験からしりごみし、あるいは、個人的な体験に先立って、加工資料である解説・文献に頼ったりすることは、レポーターとしての自殺行為である。

もちろん、問題によってはなまの資料がどうしても手に入らず、はじめから加工資料を使わざるを得ない場合もあろう。しかし、レポーターの基本的な態度としては、ともかくなまの資料と加工資料とを識別し、前者を後者に優先させる心がけでありたい。

資料のよしあし

加工資料を安直にあてにせず、できるだけなまの資料を使用するように、と書いたペンキが乾かぬうちに、もうひとつ「注意」の立て札を作っておこう。

つまり、同種のなまの資料のあいだでも、資料としての適・不適が起こる、ということだ。考古学の調査で、同時に同所で同種の出土品が二つあったとしよう。どちらも、なまの資料として貴重である。が、片方がある器物のひとかけらで、もうひとつがおなじ器物の完全な形態を残したものであれば、器物資料としての価値は、とうぜん後者の方が上だろう。

また、原稿が手に入らない古典的な文献について調べるときには、印刷された書物がなまの資料の代理になる。しかし、発行された時と所とがずれると、おなじはずの原作の内容が、書物によって微妙に食いちがってきたりする。定本・決定版というのは、この種の書物のなかでいちばん信用できるものにあたえられる名称である。しかし、もし定本がなければ、レポーターはそれぞれの書物の発行の事情からおして、資料としての適・不適をじぶんで判断しなければならなくなる。

まして、加工資料では、資料としての是非・適不適について、レポーターは石橋を叩いて渡るような慎重さをもってほしい。以下、資料の良否の見分け方を、内容の面から考えてみよう。資料は文献の形をとることが多い。だから、ここでは文献に資料をとる場合に限って話を進める。他の資料は、文献に準じて考えていただければよい。

筆者の是非

まず、文献の筆者からマナイタに乗せよう。筆者自身が、取り扱っていることがらの当事者、ないし、そのことがらをじかに経験した人であれば、その文献は右

のことがらについてのなまの資料になる。
たとえば、A、B二人の人物がたがいに影響しあったとする。二人の相互影響を調べていくと、二人が友人として交際していた事実がわかった。この際、彼らの交友関係を知る資料としては、AB両人、あるいはどちらかの日記・書簡のなかで、この問題に触れた記述がいちばん信用できる資料になる。
第三者が、「×月×日、AはBに会った」と解説しても、AあるいはBの自筆の記録でアリバイが成立すれば、第三者の解説には検討の必要が起こってくる。
科学実験についての文献でいえば、筆者が実験者自身か、実験に立ち合った観察者かであれば、その実験についての資料としては、彼らの報告がいちばん確かなものだろう。たとえ、日記・書簡・実験報告などの客観的な記述のなかにまちがいがあったとしても、なまの資料におけるミスは、それ自体の意味さえもっている。
ただし、筆者が、あることがらの当事者ないし経験者であっても、取り扱うことがらとその記述とがはっきりした科学性・客観性をもつものでない限り、筆者自身の主観のありかたが問題になってくる。
Aの日記に、「Bとは絶交した」と書いてあれば、二人は仲たがいした、と解釈してよい。しかし、「Bとはもう絶交だ！」と書いてあっても、こんな感情的な文章をもとに、二人がほ

んとうに交際をやめたと早合点することはできない。右の文句から推定できるのは、Aがこれを記述したとき、少なくともそのときは、AはBに悪感情を抱いていた、ということだけである。

加工資料では、ほんらい科学的・客観的であるはずのことがらでさえ、筆者によってかなり非科学的・主観的に解説される。

極端な例をあげれば、コチコチの資本主義者である社会学者が、社会主義や共産主義の解説をしたところで、読みものにはなるだろう。あるいは、解説自体をなまの資料として扱うことはできるだろう。しかし、社会主義や共産主義を調べるための、信頼できる資料にはまずなるまい。おなじ筆者が資本主義について解説した文献も、逆の感情がはたらくという理由で、やはり資料としての役には立つまい。

また、ある学説を信奉するために、自説に反対の立場をとる学説は頭ごなしに否定するという傾向も、気の小さい研究者のあいだでは、それほど珍らしい現象ではない。

初心のレポーターが、そういうかたよった解説をウ呑みにしてはたいへんである。だから、文献――とくに紹介・解説の類――に資料を求めるときには、筆者の正体を十分に知ってとりかかることが望ましい。筆者の履歴(りれき)・現職、とりわけ筆者が扱っている分野での従来の業績などが参考になろう。

『百科事典』や『人名辞典』、あるいは、筆者の専門分野に関しての辞典類にも評価の材料はいろいろとある。病気の対策は信頼できる名医から仰ぐ。レポートの資料も、まず公平な判断ができる筆者から期待したほうが無難である。

しかし、名医に誤診が皆無とも言えないように、どんなにりっぱな執筆態度をとる筆者でもミスを絶対に犯さない、とは言いきれない。ときには、筆者の力が及ばない事情で、資料に適・不適が生まれることがある。

資料の年齢

たとえば、百年前のある月のある日、ある国のある町で大火事が起こった。子供のころ、その火事に出会ったある老人が、五十年後に回想して、「あれは、たしか二月の五日だったわい」と言ったとする。これを第一の資料と考える。老人の回想は、体験談としてはいちおうなまの資料だが、老人が超人的な記憶力の所有者でもない限り、かなりの時間がたったあとの回想では、信頼度はだいぶうすれる。

ところが、最近りっぱな学者が、いろいろな根拠をあげて、「火事は二月の七日だ」と言った。これが第二の資料である。ところが、こんどはひょんなことから、第三の資料が見つかった。当時、となりの町で出ていた新聞で、それには「火事は二月の六日に発生した」と書いてある。

もちろん、三つの資料の日付けが、三つともまちがっていることもあり得る。しかし、確率

から言えば、新聞報道の即時性という点から考えて、いちばん古い新聞の記事が、資料としてはいちばんあてになるだろう。この勝負は、当時の新聞に軍配をあげていい。
　しかし、問題によっては、新聞の即時性がかえってまちがいを残すこともある。第二次大戦末期、日本の軍隊が敗戦に敗戦を重ねていたころ、当時の日本の新聞は、ずいぶん良心的な新聞でも、こぞって戦果につぐ戦果を報道していたものだ。そうせざるを得なかった事情は別に考慮に入れるとして、戦争の経過を告げる当時の日本の新聞は、当時の古い新聞だから、かえって資料としてはあてにならない。二十年後の今日、歴史家が述べる戦争の新らしい解説のほうが、調査にはずっと役立つだろう。
　資料の新らしさ・古さが問題になるのは、即時性を生命とする新聞、あるいは雑誌だけの話ではない。
　江戸時代に伊能忠敬が測量して作った日本地図は、日本地理学の歴史を調べる上では、古いからこそ重要ななまの資料になる。けれど、日本の地理そのものを調べる場合には、おなじ古さが災いして、とんだ骨董品(こっとうひん)扱いを受け、書庫の奥にでも引退願わざるを得ないだろう。
　だから、資料は古ければいい、新らしければいい、というものではない。テーマにより、ことがらによって、古い資料が役に立つときもあれば、新らしい資料によらなければならないこともある。レポーターは、資料が生まれた時期と、資料の性格とを十分にあわせ考え、新・旧

それぞれの性質に応じて使いこなすようでありたい。

資料の戸籍　だが、筆者の人物・学識がかなり信頼できると考えられ、新らしい、古いの問題が解決しても、資料にはなお検討の余地が残る。とりわけ、資料が刊行物のかたちをとった場合、それがどういう国のどういう発行所・出版社で誕生したかという、いわば資料の戸籍を確認しておく必要がある。

ノーベル文学賞受賞ときまった詩人が、国家権力への気がねから、せっかくの栄誉を辞退した話は、われわれの記憶にまだ新らしい。しかし、〃もの言えば唇寒き〃現象は、なにも社会主義国の専売ではない。イギリスでも、醇風美俗を守るという社会道徳のたてまえから、D・H・ロレンスの『チャタレイ夫人の恋人』は完本の形で出版することを許されていない。わが国でも、高校までの社会科教科書に対する文部省検定などで、似たような問題が毎年のように新聞紙面をにぎわしている。

つまり、筆者がどんなにすぐれた人であっても、国家・社会に言論・出版を統制する権力があれば、著作のなかで筆者がほんとうに言いたいところはカットされ、国家・社会にとって有益無害と判断される部分だけが、骨抜きされたかっこうで陽の目を見るということになる。

国家・社会という、いわば地域的な生活集団についての話だけではない。政党・宗派・組合といった、特定の思想・利害関係でまとまった団体をスポンサーにする刊行物でも、筆者の意

志がどうあろうとも、著作がその団体の主張に合うよう編集されるということが、十分に考えられる。学生服専門店に背広の生地を委託したら、制服に仕立てられた、というようなものである。

だから、特定の思想をもつ国家・社会のなかで発行された書物、あるいは、特定の主張をもつ団体をバックにした文献を資料にするときには、筆者個人を問題にした場合とおなじように、叙述が公正であるかどうかについて、慎重に検討する必要がある。検討のひとつの目安としては、つぎのようなことも考えられよう。

たがいに対立する主張をもった団体A、Bがあるとする。団体Aが発行する機関誌（あるいは機関紙）の類が、Aの政策などについて讃辞を書き立て、逆にBの政策などをコキおろしたりしても、レポーターはまず眉にツバをつけて読んだほうが安全だろう。

しかし、あべこべに、団体Aの機関誌（紙）がAについて批判的であり、Bに敬意を払うような記事を掲載した場合は、記事はかなり公平で信頼できるものと判断できよう。

国家・社会・諸団体との結びつきをいちおうタナあげして、出版社・発行所（編集者が大きな権威をもつところでは、編集者も）そのものを考えてみよう。どんな出版社・発行所でも、ともかくそれぞれの出版意図をもち、なんらかの性格をもっているはずだ。刊行物を商業ベースに乗せることだけを信条とし、生命の短いベストセラーズを売りまくっている有名出版社も

あろうし、良心的な専門書をコツコツと発行している、一般には無名な出版社もあるだろう。むろん、資料の親元としては、後者をアテにしたほうがいい。

出版社の良否を見分けるには、「出版年鑑」を参照にするか、出版社にカタログを請求するとよい。「年鑑」やカタログにのっている刊行中の出版物を一覧すれば、文化・教養について無定見な商業出版社と良心的な専門書出版社との区別はすぐにつこう。

つぎの「図書館」の項で触れる、「基本文献」の出版社・発行所も、その意味で参考になると思う。

書評の是非

文献から資料を求める場合、文献のねうちを知るには、書評を参考にするのがいちばん手っ取り早い方法かも知れない。しかし、書評を読むのにも、これまで述べてきた著作そのものについての検討をそのままあてはめたほうがよい。まして、今日では商業出版が極度に発達しているため、一般の書物では、出版社あるいは著者と書評家とがなれあいになって、いいかげんなちょうちんもちが「書評」というマスクをかぶって横行している。

また、新刊書の広告などで、書評の一部が引用される例もよくある。もちろん、どちらも、そのまま信用できる書評とは言えない。

やはり、信頼できる書評は、りっぱな専門家がちゃんとした刊行物で発表した書評全文に限る。さいわい、わが国にも、読書家を対象にした特殊な新聞・雑誌（「読書新聞」「図書新聞」

てよかろう。評欄を設ける例も少なくない。そうした刊行物での責任のある書評ならば、いちおう参考にし「読書人」などなど）があり、そのほか、信用できる新聞社・出版社や研究団体が刊行物に書

信用できる資料

以上の話は、みんな、レポーターが資料を手にとるまえの心がまえだった。こんどは、いよいよレポーター自身が、資料――である書物――を手にして、資料としての適否をねぶみする段である。

まず、外堀から攻めていこう。

1. 書名・目次を読めば、取り扱っている問題とその範囲とがはっきりするだろう。取り扱っている問題の範囲が、自分の調査の資料として役立つかどうか、考えてみる。

2. 序文を読んでみよう。自分の調査に役立つような目的で書かれているかどうか。序文で資料（書物）について断ってあれば、筆者が使っている資料が自分の調査に関係があるかどうか、考えてみる。

3. 序文で資料について断ってなければ、パラパラめくってみて、引用文などの出典を求める。また、巻末の索引にあたる。出典や索引について、前条とおなじ考察を試みる。

外堀を攻めたら、つぎは内堀である。

どこでもよい、二、三ページを通読して、知識に対する筆者の誠実さ謙虚さを判断してみよう。偏見・誇張・希望的観測など、これまで触れてきたレポートを傷つける欠点を筆者はちゃんと避けているかどうか。ムリ・ムダ・ムラのない文章で叙述が一貫しているかどうかを考えてみる。また、引用は解説の身元証明であり、引用の取り扱い方ひとつで、信頼できる書物かどうかが、かなり判定できるとも言える。

もちろん、筆者がはっきりした自分の意見を言い、あるいは筆者が直接知っていることがらを述べている部分は、問題がない。また、読者がとうぜん知っていると考えられることがらについても、引用の必要はない。しかし、そのほかの第三者から得た知識、とりわけ議論の余地があるような知識に触れるときには、筆者はその知識のソースをはっきりしておかなければならない。

たとえば、柴田徳衛著『東京』(岩波新書)は、問題の性質からもとうぜんたくさんの統計を扱っているが、著者は同書の後注に、「本書全体を通じ一般的統計数字は、総理府統計局の『日本統計年鑑』都の『東京都政概要』『東京都統計年鑑』『統計東京』のそれぞれ最近版や同各局の年報・事業概要・予算決算書などによった(以下たとえば昭33・1・15は昭和三十三年一月十五日号をしめす)」というように明記している。

引用の出典が念入りにはっきり書いてある書物は、信用できる資料になる。そうでないものは「読みもの」にはなっても、調査のための資料としては、信頼度はうすれる。

資料の種類

いままでの資料の話では資料のひとつひとつについて是非・適否を考える必要があるということをお話しした。いわば、資料の「性質」を検討するのが問題だった。レポートの資料は、よい資料が多ければ多いほど、変化に富めば富むほどよい、ということまでは話が進んだ。

が、「たくさん、変化に富む」ように集めるのには、どういう「種類」のものから集めはじめたらよいのか、つぎに資料の「種類」について考えてみよう。

テーマと必要な文献　テーマはなるべく小さく絞ったほうがいい。しかし、小さく絞ったテーマで、重箱の隅をつつくような調査をするだけでは、りっぱなレポートは生まれないだろう。

たとえば「エスキモー人の生活」というテーマをとったとする。たまたま、知り合いにひとりのエスキモー人がいた。そこで彼と四六時中生活をともにして、レポートを書いた。しかし「彼は朝六時に起き、朝食にはオットセイの生肉を四百グラム食べ……寝言で『南洋に行きたい』と言った」といった調子で、どんなにこまかく報告しても、「×月×日のひとりのエスキ

モー人の生活」では、よいレポートとは言えないだろう。問題がもつ一般性をまるきり失っているからだ。問題の取り扱い方が、あまりに小さく特殊であり、問題がもつ一般性をまるきり失っている

医学実験でも、実験者はたったいっぴきだけのモルモットに試みた実験の結果で、ひとつの実験レポートを書きはしない。十ぴき、百ぴきと、おなじ実験を試みた上で、その実験結果の一般性を確認してからレポートにするだろう。それとおなじことである。

エスキモー人について調査するのならば、エスキモー人種の歴史・分布・政治・経済・文化などなど、エスキモー人種の一般的な背景をまず知っておく必要がある。その上で、ひとりのエスキモー人の生活を具体的な例として考えるのならば、意味がある。ほかのテーマでも、たとえば、「大谷石の建材としての利点」は、石材一般についての知識がなければはっきりしないだろう。

主観的な体験を土台とする芸術鑑賞のレポートでさえ、自分の観賞結果を確認する意味で、専門家のあいだでの一般的な観賞結果にあたってみることがたいせつである。

そこで、小さく限定したテーマを、あらためて大きく見なおしてみる。つまり、自分のテーマが知識のどういう分野に属しているかを考え、背景となる一般論を提供してくれる文献を求めるのである。そして、この種の文献をいつも豊富に用意してあるところは、ほかならぬ図書

館である。

図書館の利用　図書館は、文字通り〃知識の宝庫〃である。古今東西の先人のチエが、書籍・雑誌などの印刷物や、フィルム、レコードなどの形になって収められている。すこし大規模な図書館ならば、どんな個人の蔵書も及ばぬ、数と種類との資料を用意しているだろう。

日本では、大は国立国会図書館から、小は中・小学校の学校図書室にいたるまで、官・公・私立の諸図書館が、おそらく何万とあるだろう。むろん、そのなかで、レポートの資料になるような文献をたくさん集めてあるのは、国会図書館をはじめ、都道府県立および各大学付属の図書館などである。

国立国会図書館（東京都千代田区永田町一の一四）は、日本最大の図書館だけあって、蔵書数約二百四十万冊（蔵書数は昭和四十三年十月十日現在。以下同じ）を収めているが、すこし大規模な公立・大学付属図書館ならば、たいていは数十万の蔵書をもっている。蔵書の数と種類とから言えば、〃大は小を兼ねる〃ことわざは、そのまま図書館にも通用する。しかし、図書館のなかには、小規模ながらユニークな性格をもつものもかなりある。いくつか目ぼしいものをあげてみよう。

東京大学史料編纂所書庫（東京都文京区本富士町一、東京大学内）
図書館として独立してはいないが、歴史関係の専門図書館としては最大。とくに古文書の収蔵で有名である。蔵書数、約十四万。

農林省林業試験場図書館（東京都目黒区下目黒四の七七〇）
林業・林産に関する内外図書・雑誌、研究団体発行の刊行物、統計資料などが集めてある。蔵書数、約十万。

私立にも、特色のある専門図書館がある。

東京書籍KK付属東書文庫（東京都北区堀船町一の八五七）
高・中・小学校教科書を中心に収めてあり、平安末期から現在にいたるまでの日本の教科書は五十パーセント以上も集まっている。そのほか、教育学・教育史・教育制度に関する文献など。蔵書数、約十一万。

東京商工会議所図書館（東京都千代田区丸の内三の一四）
商工関係図書が重点で、蔵書数、約十万六千。

このほか、盲人を対象とした**日本点字図書館**（東京都新宿区諏訪町二一二）をはじめ、いろいろな博物館の付属図書室や、大企業が企業に関係のある文献を集めた施設など、専門図書館もなかなか多い。

レポートのテーマによっては、大規模な総合図書館といっしょに、特殊な専門図書館を利用すると好都合だろう。

ただし、専門図書館は、一般に開放しないところのほうがむしろ多い。だから、専門図書館を利用するときは、あらかじめ一般に開放しているかどうかを確かめ、公開していない図書館を利用するのならば、コネが必要になってくることも考えておいたほうがよい。

総合図書館・専門図書館の現状については、『日本図書館総覧』（日本学術会議編・自然科学者協会刊）を参照するとよい。どこの図書館にも備えつけてあるはずだ。

図書館の書物分類

図書館で文献資料を探す場合、図書館の蔵書がどういうルールで分類整理されているか、だいたいのところは知っておいたほうが便利だろう。

図書の分類法そのものは、書物ができはじめた大昔からいろいろとあったらしいが、十九世紀の末、アメリカのM・デューイが十進分類法（Decimal Classification）を唱え出し、近代分類法の第一号ホーマーを飛ばした。以後、半世紀以上もたった今日でも、デューイ十進分類法の影響は大きく、アメリカでは公共・大学・専門図書館の過半数、イギリスでは約五〇〇の図書館がデューイ十進分類法を使っている。また、現在およそ五〇〇〇をこえるヨーロッパの図書館が採用している国際十進分類法（Universal Decimal Classification）も、デューイ十進分類法をもとにしたものである。

十進法では、まず、いっさいの知識をひとつのまとまりとして考える。そして、「百科辞典」のような総合的な資料を総記として第一の「綱（こう）」におき、ほかの知識はつぎのように九つに分

類する。

000	総　記
100	哲　学
200	宗　教
300	社会学
400	語　学
500	自然科学
600	応用科学
700	芸　術
800	文　学
900	歴　史

三ケタの数字は、それぞれの「綱」をあらわす記号で、最初の数字が整数第一位、つまりあと二ケタは小数点以下ということになる。右の十の「綱」は、知識がこまかく分かれるのに従って、さらに十ずつの「目(もく)」に分類され、

000 → 010 → 012

というようにつづく。

わが国では、国情のちがいなどから、デューイの十進分類法を日本流になおした「日本十進分類法」が使われている。「日本十進分類法」では、はじめの「綱」「目」分類はつぎのようになる。

主　綱　表　（百区分表）

記号	項目
000	**総　記**
010	図書館
020	図書、書誌学
030	百科事典
040	一般論文集・講演集、雑書
050	逐次刊行物
060	学会、博物館
070	新聞、ジャーナリズム
080	双書、全集
090	
100	**哲　学**
110	哲学各論
120	東洋思想
130	西洋哲学
140	心理学
150	倫理学
160	宗教
170	神道
180	仏教
190	キリスト教
200	**歴　史**
210	日本
220	アジア
230	ヨーロッパ
240	アフリカ
250	北アメリカ
260	南アメリカ
270	オセアニア
280	伝記
290	地理
300	**社会科学**
310	政治
320	法律
330	経済
340	財政
350	統計
360	社会学、社会問題
370	教育
380	風俗習慣、民俗学
390	国防、軍事
400	**自然科学**
410	数学
420	物理学
430	化学
440	天文学
450	地学
460	生物学、博物学
470	植物学
480	動物学
490	医学、薬学
500	**工学、技術**
510	土木工学
520	建築学
530	機械工学
540	電気工学
550	海事工学
560	採鉱冶金学
570	化学工業
580	製造工業
590	家事
600	**産　業**
610	農業、農学
620	園芸、造園
630	蚕糸業
640	畜産業、獣医学
650	林業
660	水産業
670	商業
680	交通
690	通信
700	**芸　術**
710	彫刻
720	絵画、書道
730	版画
740	写真術、印刷
750	工芸
760	音楽、舞踊
770	演劇、映画
780	体育、スポーツ
790	諸芸、娯楽
800	**語　学**
810	日本語
820	中国語、東洋諸語
830	英語
840	ドイツ語
850	フランス語
860	スペイン語
870	イタリア語
880	ロシア語
890	その他諸国語
900	**文　学**
910	日本文学
920	中国文学、東洋文学
930	英米文学
940	ドイツ文学
950	フランス文学
960	スペイン文学
970	イタリア文学
980	ロシア文学
990	その他諸国文学

つぎに、たとえば、社会科学のなかの「総記」「政治」「法律」「経済」の四つの「目」を、もうひとつ小さな「目」に十進分類すると、次のようになる。

300	**社会科学総記**
301	理論および方法論
302	政治・経済・社会・文化諸事情
303	参考図書（書誌、辞書、便覧、など）
304	論集、評論、随筆、雑記
305	逐次刊行物（雑誌、紀要、年鑑）
306	学会、団体、会議
307	研究・指導法
308	双書、全集、講座
309	社会思想、社会主義
310	**政　　治**
311	政治学、政治思想
312	政治史および各国の政治、政治地理
313	国家の形態、政治体制
314	議会、選挙
315	政　　党（政治結社）
316	国家と個人・階級・民族問題
317	行　　政
318	地方自治
319	外交、国際問題
320	**法　　律**
321	法学、法哲学
322	法制史、外国法
323	憲法、行政法
324	民法、私法一般
325	商　　法
326	刑　　法
327	司法、訴訟手続法、法務
328	〔諸　　法〕
329	国際法
330	**経　　済**
331	経済学、経済思想
332	経済史、経済体制、経済事情
333	経済政策
334	人口、移植民
335	企業、経営
336	経営管理、簿記、会計
337	貨幣、通貨、為替、物価、景気、恐慌
338	金融、金融機関（銀行）
339	保　　険

日本の図書館では、この「日本十進分類法」で蔵書を整理しているところがかなり多い。とりわけ、中・小規模の公立図書館や、高校までの学校図書館は、ほとんど「日本十進分類法」を採用している。

しかし、文化が進み、学問の細分化が深まるにつれて、蔵書が何十万冊にもなるような大規模な図書館では、はじめに三ケタの数字をきめて、それをこまかく割っていく十進分類法では蔵書の整理がつけにくくなってきた。

実際、分類の第一段階を三ケタの数字で十項目に金シバリにする十進分類法には、早くから反対もあった。デューイの十進分類法が発表されてから十五年後に、やはりアメリカ人のC・カッターが、はじめからどんどん項目をふやしていく「展開分類法」(Expansive Classification)を主張したし、今世紀に入ってからも、インドのランガナータンの「コロン分類法」、ブリスの「書誌分類法」などが発表されている。「展開分類法」や「コロン分類法」「書誌分類法」などは、分類法としては〝少数派〟だが、ともかく、十進分類法だけが図書整理の決定打ではない。

現に、アメリカの国会図書館(Library of Congress)では、今世紀のはじめから同館独自の分類法を使っているし、日本でも、大規模な図書館では、これまでの分類法を検討していると ころが少なくないようだ、レディ・メイドの分類法にはそれぞれ一長一短があり、図書館にもそれぞれの事情があるので、じぶんのところの蔵書整理にいちばんつごうがよいように、適当

な折衷法がいろいろ工夫される場合があると考えたらいい。
レポーターの利用する図書館が、どういう分類法をとっているかは、図書館案内のパンフレットを見るか、館員に聞くかすれば、すぐわかろう。

資料を求める順序

小さく絞ったテーマを、あらためて大きく見なおし、テーマの背景となる一般的な知識を提供してくれる資料を求めるには、図書分類中の「総記」にあたればよい。総合「総記」には、総合的な事典・年鑑・新聞縮刷版などがあり、各綱「総記」には、それぞれの知識の分野で、同種の資料が用意されている。

「坊っちゃん」を調べる

たとえば、『坊っちゃん』をレポートのテーマにとったとする。『坊っちゃん』を調べるからには、少なくとも、漱石の人と作品とについて、ひととおりの知識はもっていなくてはならない。そこで、総合総記中の『百科辞典』などで「夏目漱石」の項を引く。『百科辞典』の解説だけでも、おおまかながらもまとまった、漱石の人と作品とについての知識は得られるだろう。

しかし、漱石の人と作品とについて、おおまかでも、もうすこしくわしく知っておきたい——そう思ったら、こんどは綱目別総記中の辞典類にあたる。文学からとったテーマだから、文学

「綱」の総記から『文学辞典』――ただし、漱石はまだ世界的な作家ではないから、いまの場合は日本文学関係の『文学辞典』――を選んだらよい。『日本文学大辞典』(新潮社)、『日本文学史辞典』(日本評論新社)、『現代日本文学辞典』(河出書房)などのほか、毛色の変わった『近代名作モデル事典』(至文堂)というものもある。『日本文学史辞典』の「夏目漱石」は十二ページにわたり、『坊っちゃん』は漱石文学の系譜のなかでみごとにとらえられている。また、『現代日本文学辞典』では、「夏目漱石」のほかに『坊っちゃん』の別項もある。『坊っちゃん』を考えるために必要な、漱石の人と作品とについての予備知識は、以上のような辞典類の解説が十分に提供してくれるだろう。

総合辞典・綱目別辞典などで、レポートのテーマにつながる一般的な知識を獲得した上で、こんどは、テーマに直接関係のある個々の資料にあたる作業に移る。

まず、信頼できる総合辞典・綱目別辞典では、解説のあとに、その問題についての参考資料がかならずあげてある。『日本文学史辞典』では、漱石についての十一の文献が紹介され、『現代日本文学辞典』の『坊っちゃん』の項でも、解説者は『坊っちゃん』に関する四つの資料に言及している。

また、総合総記中には『学術雑誌綜合目録』(日本学術振興会)というような文献もあるし、綱目別総記には、『国語国文学研究史大成』(三省堂)、『国文学研究書目解題』(至文堂)といった

書物も含まれる。辞典が推薦する資料にしろ、研究目録にのっている資料にしろ、漱石と『坊っちゃん』とについてのものであれば、ひとつひとつ図書館の目録カードで在庫かどうかを調べるとよい。少なくとも、そのうちのいくつかは借り出せるだろう。

また、既刊の辞典・研究目録にのっていない、あたらしい漱石研究・『坊っちゃん』文献が、その後、単行本で出たり、文学研究雑誌に発表されていたりするかも知れない。そういうものを調べるときも、目録カードで探せばよい。

図書館の目録カードには三つの種類がある。著書名でひく「著者名目録カード」、書名で見る「書名目録カード」、ことがらを見出しにした「件名目録カード」である。

たとえば、時実利彦著『脳の話』という書物は、「著者名目録カード」では「ト」の項をひけばよいし、「書名目録カード」なら、書名をそのまま探せばよい。「件名目録カード」にあたるときは、カードが五十音順に配列してあれば、「ノウ」で見ればよい。「件名目録カード」が分野別になっていれば、「生理学」の「脳」のセクションをあたる。

つまり、ひとつの文献には三つの探し方がある。「だれ」が「なんという書物」で「なに」を書いたかが、それぞれポイントになる。漱石や『坊っちゃん』について、書名がはっきりしないままに資料を求めるときは、「漱石」や『坊っちゃん』を「件名目録カード」で調べる、というのがひとつの要領である。

雑誌・新聞などについては、逐次刊行物用の別の目録カードがある。ただし、逐次刊行物の目録カードでわかるのは、誌・紙名と、その雑誌・新聞のいつからいつまでの号が図書館にあるかということぐらいである。それぞれの号の記事がわかるような記事目録カードといったものはない。だから、年刊・月刊の研究目録・記事索引にまとめられるまえの雑誌・新聞の記事は、それぞれの号についてひとつひとつあたるよりしかたがない。

ところで、『坊っちゃん』についての資料を集めようとして、単行本・雑誌・新聞を総あたりしても、あるいは、『坊っちゃん』だけを取り扱った資料は、案外少ないかもわからない。けれど、漱石についての総合的な資料ならば、多かれ少かれ『坊っちゃん』には触れているだろう。レポーターは、漱石についての資料から、『坊っちゃん』に直接関係がある部分だけを抜き読みするつもりで資料収集を進めればよい。

基礎資料

レポートの資料を集めるプロセスは、ちょうど登山の過程に似ている。小さく絞ったテーマは、ひとつの頂上である。頂上に行きつくためには、まず、広い知識の山すそに立たなければならない。山すそは総合辞典・綱目別辞典などが提供する基本的な予備知識にあたる。山すそに立てば、いろいろの角度から頂上が眺められるだろう。

レポーターは、適当な登山道を探し、山すそから頂上へと、資料収集の歩を進めていく。その場合、危険予防のために、しっかりした岩場第一を心がけることは、すでに述べたとおりである。

「図書館には、ほしい本がひとつもない」学生さんのこういう嘆きがちょくちょく耳に入る。しかし、どんな図書館でも、古今東西の全刊行物を収めるなんて芸当はできっこない。図書館の充実を望むのはよい。が、さしあたっては、あるだけの蔵書をフルに利用するほうが賢明である。頂上が山すそにつながる事実を再認識し、山すそから資料を探すようにすれば、テーマに「直接」関係する資料は乏しくても、テーマに多少ともつながる資料はかなり見つかるはずである。

だから、総合辞典・綱目別辞典の類は、資料収集のための基礎資料といってもいい。すこし大規模な図書館では、辞典類などの総記中の文献はひとまとめになって、「参考室」という特別な閲覧室に置かれている。「参考室」の図書はたいてい開架式である。開架式というのは、閲覧者が自由に書棚から書物をとりだせるシステムをいう。だから、ひとつのテーマについて資料を集めようとするときには、まず図書館の「参考室」にいき、基礎資料に目を通すのがよい。

では、「参考室」の基礎資料にはどんなものがあるか？　また、どんなものを使ったらよい

のか？「参考室」の基礎資料へのガイドという意味で、主な基礎資料をここで紹介するのがほんらいのたてまえである。が、本書の〝読みもの〟としての流れがとぎれるのを避けるために、主な基礎資料はひとまとめにして巻末に回した。むろん、この問題にかくべつ関心のある読者は、巻末の基礎資料にさっそく目をとおすようおすすめする。

資料の整理

さて、不案内な土地を旅行しようとするときには、まず地図でコースをきめてかかるだろう。レポートの基礎資料は、その地図に似ている。そして、地図が指示するコースを歩きながら、途中で手に入れるいろいろの資料は、さしずめ土地土地の絵ハガキにでもあたるだろう。しかし、レポート作成の目的地に着いたとき、せっかく集めた絵ハガキが紛失していたり、ゴチャゴチャになっていたりしては、ずいぶんやっかいなことになる。

資料は多ければ多いほどよい、しかし、きちんと整理をしながら集めなくては、「この文章はAの文献からとったのかな？　いや、Bからだったらしい。待てよ、Cからだったかも知れない……」などと、あやふやな記憶を探ってたいへんな時間と労力とのロスができる。

だから、ひとつの資料を手に入れたら、まず「何から」得たか、つぎに「何を」得たかを、そのたびごとにはっきりさせておくほうがいい。つまり「何から」「何を」得たかについて、

そのつどしっかりメモをとっておくことだ。

メモは、ありあわせの紙、たとえば封筒の裏に書いてもまにあいそうだ。しかし、ふぞろいな紙きれを使ったメモは、整理しにくいし、なくなりやすい。

ノートはどうだろう？　ノートなら文句はないだろう……が、実は、ノートにも欠点がある。ノート用紙のへりにラベルを張って、見よく引きよいように工夫する。けれど、それでもあとで書き入れたり、事項の順序を変えたりするには、ページの固定したノートでは、なかなか融通がつけにくい。ルース・リーフでも、紙面にムダができ、いれかえに手間がとれる。

カードの長所　というわけで、最後に残るのはカードだけになる。実際、カードのメモには、ふぞろいな紙切れやノートのメモの欠点がない。おまけに、ひとつのレポートを完成して提出したあとでも、カードは貴重な資料として、整然としたかたちで手元に残る。

かりに大学四年間に、二十のレポートを書いたとすれば、何百枚かのカードは、そのまま、レポーターの研究の記念碑になる。かりに、レポーターが、将来おなじ分野か関係のある分野かで、またレポートを書いたり論文をまとめたりすることにでもなれば、過去のカードはあたらしいレーゾン・デートルでよみがえるだろう。資料収集には、なるべく、整理につごうのよいカードを使うよう、おすすめする。

文献カードと資料カード　カードは二種類できる。ひとつは、資料を「何から」得たか、を記録するものを「文献カード」と呼んでおこう。もうひとつは、ズバリ「何を」得たかをメモしておくもので、「資料カード」というなまえにしておく。

「文献カード」は、どういう文献にあたったかという、過去の思い出のよすがにするだけではない。レポートのなかで触れたり、引用したりすることがらについて、出典をしっかりしておくためと、レポートに参考文献のリストを付けるためとに、いずれ、なくてはならないものである。

カードはそろってさえすれば、大きさはレポーターの好みによって自由である。とはいっても、大きすぎると、スペースには余裕があるものの、紙面にムダが出やすく、かさばって扱いにくい。小さすぎると、その逆の欠点が出る。

標準の大きさは、官製ハガキか、それをひとまわり大きくした、本書のような新書判の大きさくらいが適当だろう。もっとも、「文献カード」のほうは、記入することがらがわりあいに少ないから、もっと小さめで十分まにあう。市販の抄録カード・整理カードもあるが、心もち厚手の画用紙をじぶんで切ればかんたんにできよう。

すくないカードならば、ゴム輪でとめておけばすむ。けれど、何十枚、何百枚にもなるとカード・ケースが必要になってくる。市販の整理カード用には、規格がきまったケースができて

いるが、木製でもなかなか値が高い。これも、空箱の厚紙を利用して、じぶんで作ればよい。
「文献カード」「資料カード」のどちらについても、カードにことがらを記入する際には、ひとつの共通の鉄則がある。
それは、一枚のカードでは、ひとつの事項だけを取り扱う、ということである。
一枚のカードにいくつもの事項があったのでは、カードの意味はなくなる。逆に、一枚のカードにひとつの事項が書ききれないときは、同じカードの裏面を使ってもよいし、連続番号をつけてカードの枚数をふやせばよい。

文献カード　図書館の目録カードには、整理番号・筆者名・書名・発行日時・発行所・発行地のほか、目次、さし絵の有無などが書いてある。しかし、レポートの文献カードでは、

1. 筆者名
2. 書名
3. 発行地（発行所）および、発行年。新聞・雑誌記事などのときは掲載誌（紙）、発行年月・日についてはっきりしていればよい。

カードに記入するときも、右の1・2・3の順序に上から下へと書く。

（書物の例）

和　書

1．貝塚茂樹

2．『史記―中国古代の人びと』

3．中央公論社、昭 38.

洋　書

1．Bayne, William

2．James Thomson

3．Edinburgh, 1910.

〔注〕番号の数字は説明のためにつけたもので、実際のカードに記入する必要はない。以下の例でも同じ。

（雑誌・新聞記事の例）

和　文

1. 小沼　勇

2. 「西ドイツの農業構造改善」

3. 『朝日ジャーナル』5/24/64
pp. 20–25

欧　文

1. Anon.

2. " Studying … by
Looking in at
Television "

3. *Weekly Scotsman*,
2/25/65

カードに記入するときは次のことに注意する。

1. 筆者名　日本語ならば、ふつうに姓・名の順に書けばよい。が、名・姓と逆になってい

る外国語のときは、姓・名と日本語流になおす。「ショーン・コネリー」なら、「コネリー、ショーン」となる。また、そういう外国語で、二人以上の筆者を並べるときは、はじめのひとりは姓・名の順にし、二人目からは名・姓のままで続ける。つまり、

Sinatra, Frank, Danny Kaye and Mitch Miller

というようになる。

新聞・雑誌記事などで筆者がわからないものは、その分だけ、つぎの記事題名・掲載誌名などの位置を順に上にずらす。あるいは、筆者名欄に「不明」、英語ならばAnon. (anonymous「不明」の略)と書いておく。

2. **書名・記事題名**　洋書の書名は、活字ならイタリック(斜字体)を使うのがふつう。タイプや手書きのときは、イタリックのかわりに書名の部分に下線を引いておく。和書にはそういうルールがないが、本書では、かりに『　』でくくっておくことにする。

書物の編・章、雑誌・新聞の記事などの題名は、欧文のときは引用符" "であらわす。和文ならば「　」でよかろう。

(例)　"Faith's New Forms," *Life.*

「明日の鉄鋼業界」——『実業の日本』

また、特定の編者あるいは訳者による編書・訳書では、書名のつぎに編者名・訳者名を加え

ておくほうがよい。

（例） Pope, A. Works, ed. (trans.) W. Elwin.

『詩経国風』吉川幸次郎注

3. **発行地（発行所）、発行年（月・日）** 発行地（発行所）を先に、コンマ（読点）をふって、発行年（月・日）を後につづける。出版社の規模が大きく、二カ所以上で同時に発行されたような書物は、

東京・大阪、一九六〇

London and New York, 1965

ということになる。全集もののように何年もかかって刊行された書物の発行年は、

東京、一九六〇――一九六五

London, 1950 – 1960

と書く。刊行物が月刊・週刊・日刊ならば、それに応じて、発行月・日を加えるというルールは、前に述べたとおりである。

発行年・発行地がわからないときは「不明」と書く。英語では、つぎのようになる。

n. d. (no date) … 発行年月不明

n. p. (no place) … 発行地不明

ついでに、発行地と発行所の問題について触れておこう。書物にいちいち発行地・発行年月をつけるのは、アクセサリーの意味ではない。「資料のよしあし」のところで述べたように、古典とか名作とかいわれる書物は、あちこちの場所で、いろいろな時代に出版される。そういう書物では、どこでいつ出版されたかをはっきりさせて、身元をたしかにする必要がある。それ以外の場合でも、書物の身分証明として、発行地・発行年月はしっかり記録しておかなければならない。新聞記事に出る人物が、かならず住所と年齢とを書かれることと似たようなリクツである。

洋書では、発行所を省略しても、発行地は書いておくのがふつうである。なにも、出版社にうらみがあってのことではない。出版社名よりも地名のほうがかんたんだし、欧米の出版社には、とりわけ歴史の長い会社が少なくない。だから、書名と発行地とがわかれば、ほとんどの場合、出版社はしぜんに限定されてくる。出版社名はあってもなくてもいい、というわけである。

ただし、発行地・発行年月が不明な書物で、出版社名だけがわかっているときには、もちろん出版社名を発行地のかわりに書いておく。

また、日本では、たいていの出版社が東京に集中しているという特殊な事情があるので、和書では発行地よりも発行所・出版社名を書いておくほうがわかりよいかも知れない。

文献カードに書名・題名をあげた書物・記事のなかで、とくに一部だけを資料にしたときはそ

れぞれの事項に続けて pp. 100~150 というように参照した部分を明記しておくほうがいい。

以上述べたような記載ルールは、もちろん基本的なもので、広く資料を探していけば、ルールに合わない例もたくさん出てくるだろう。そういうときは、適当な統一ルールをじぶんで考え、基本ルールに準じて処理してほしい。

資料カード

資料カードの記事は、レポートの内容にじかに関係するメモである。しかし、カードの性質はちがっても、文献カードと資料カードとは、二卵性双生児みたいな結びつきをもっている。というのは、レポーターは、じぶんのレポートに役立ちそうな文献を調べ、それを調べていくうちにレポートに直接役に立つ資料を見つけるだろう。だから、文献カードと資料カードとは、実際には、相前後しておなじ文献から誕生することが多い。資料カードに書くことがらは、

1. 取り扱う事項。
2. それについてのメモ。
3. 出典・参考文献をメモの最後につける。
4. カードの右肩に、文献カードと照合しやすいように、筆者・文献を略記しておくとよい。この見出しを筆者にするか、文献にするかは、文献カードとの照合に便利なように選べばよい。資料カードの体裁はつぎのようになる。

1. 取り扱う事項	4. 筆者・文献の略記

…………………………………………………

………………　2. メ　モ　………………

…………………………………………………

…………………………………………………

3. 出典・参考文献

（例）

日・西独農業構造改善政策の差	『ジャーナル』

西独では、集団化・移住をとおして経営の拡大化をはかりながら、専業自立農家の大型化をめざしている。日本では、協同作業によって零細企業の弱点克服を考え、自立経営を助けようとしている。　『朝日ジャーナル』

5/24/64

資料カードのメモは、内容からいって、要約メモ・引用メモ・感想メモの三つに大別できる。

1. 要約メモ　要約には、一冊の文献ぜんぶの要旨をまとめることもあろうし、文章の一部だけをかいつまんで述べることもあろう。が、いずれにせよ、要約は「かんたんな言いかえ」である。

文章で考えてみよう。「かんたんな」というからには、原文を適当にちぢめなければならない。また、「言いかえ」るためには原文とはちがったことばで、原文の内容をまちがいなくあらわさなければいけない。つまり、他人の文章を、自分のことばにすっかり消化して、簡潔に再表現するのである。

もし、要約中に、原文のなかの特定の表現や叙述をとりいれるようなときには、引用符（" "あるいは「　」）をつけて、原文のことばと自分のことばとを、はっきりくべつしておくことがたいせつである。要約の練習については、「レポートの文章」のところで、もういちどお話しよう。

2. 引用メモ　原文の一部を文献から引き出して、そのままメモする。引用文の前後には引用符をつけ、一字一句もいいかげんにしないで、原文を正確に転写しなければならない。原文にまちがいがあっても、気をきかしてなおしたりしてはダメ。そういうときは、まちがった部分のすぐあとに（ママ）英語なら（sic）という符号を入れておく。原文のまちがいをそのまま

残した、というしるしである。

また、原文のなかで省略した部分は……であらわす。転写した原文に、自分の意見を加えたければ、自分のことばは〔　〕のなかにでも入れて、原文とくべつする。要約でも引用でも、あとになって、どこからどこまでが原文のことばで、どの部分が自分の考えだったのか、ゴチャゴチャになってはしまつがわるい。

引用メモを作るとき、とりわけ気をつけなければならないことは、引用した原文と、その前後の原文との関係である。たとえば、３４５……とつづく数字は、±1 の前後関係をもっている。この４をとりだして、２４６……という数列のなかに入れると、４そのものには変わりがなくても、４が前後の数字に対してもつ意味は変わってくるだろう。ちょうど、そんなぐあいである。別な例をあげてみよう。

つぎの対話は、Ｅ・ヘミングウェイ『誰がために鐘は鳴る』からとったものである。かりに会話の主をＡ、Ｂとする。

Ａ「狩猟が好きなの？」

Ｂ「ああ。何よりもな。村の連中はみんな狩りをするよ。おまえさんはきらいかね？」

Ａ「うん。動物は殺したくないな」

Ｂ「わしは逆だよ。わしは人間を殺したくない」

A「頭が狂ってなけりゃ、だれだってそうさ。しかし、必要ならば何ともないな。正義のためならね」

この対話からは、AもBも、もともとは平和を愛する人間で、他人を傷つけるようなことを進んで肯定していないことがわかる。しかし、Aは「正義のための」殺人は是認する。Aは〃勇ましい〃軍人になれる人物である。

右の会話の前後に、他の文をつけるとすれば、こんなことにでもなろう。

(前) AとBとは、おたがいの勇気と人間味とにすっかり意気投合した。Aが話しだした……。

(後) Bは黙っていた。Bには、やはり殺人が正しいことだとは思えなかった……。

しかし、かりに、右の会話から〃一部を引用〃して、それに別の前後をつけると、こうもなる。

AはBの勇猛さにすっかり恐れをなした。Aがおびえたように「狩猟が好きか」ときくと、Bは言った。

B「ああ。何よりもな。村の連中はみんな狩りをするよ。おまえさんはきらいかね?」

A「うん。動物は殺したくないな」

Bは、気の弱いAをゲラゲラ笑った。動物愛護協会々員のAは、とんだ野蛮な土地に来たものだ、とショゲかえった……。

これは、けっしてバカバカしい例ではない。会話であれ、説明文であれ、前後の文章におか

まいなしに好きかってな引用をすると、多かれ少かれ、こういうトンチンカンなことが起こる。だから、引用をするときには、かならず前後の文章との関係を見きわめて原文から引き出さなければならない。

また、レポートに使うときにも、原文中での意味とちぐはぐにならないように、前後関係に十分注意してレポートの文中に挿入しなければならない。

3. 感想メモ

どんなことでもよい、レポートに取り上げた問題に関係がある思いつきを書いておく。文献を読みながら思いつくときもあろうし、散歩しながら、あるいは食事をとりながら、ひょいと思いつくこともあるだろう。

ひょいと思いついたことは、ほうっておくとすぐ忘れる。ポケットには手帳かメモ用紙かをいつも入れておき、思いついたことはすぐメモし、あとで感想メモ・カードに整理して記入するように心がけたほうがよい。

むろん、そういう思いつきが、レポートに役立つかどうかはわからない。役立たないこともあるだろう。しかし、役立つときには、レポートにたいへん大きな価値を与える場合が多い。大発見や大発明が、ひょいとした思いつきから生まれた例はいくらでもあるし、数学者岡潔博士の随筆にも、そういう話がよく出てくる。たとえ、そうたいしたことにはならなくても、学問研究の独創性は、結局思いつきから始まるのである。

とりわけ、実態調査・科学実験・芸術鑑賞など、個人的体験から出発するレポートでは、思いつきはひとつのなまの資料である。いろいろの角度から、できるだけたくさんのことを思いつくようにしたほうがよい。

ついでながら、要約メモと感想メモとは、はじめからレポーター自身のことばで書けばいいのだし、レポーター自身があとで読んでわかればよい。だから、一から十まで普通の文字できちょうめんに書く必要はない。あとで読むときにはっきり意味がわかりさえすれば、符号・略号・暗号（！）なんでも自由に使ってかまわない。

たとえば「関係」ということばは「×」であらわし、「影響」という文字を「↕」であらわすとする。「AとBとの×では、AはBから↕」とカードには書いておいて、あとでレポートに使うときには、「AとBとの関係では、AはBから影響を受けた」とちゃんとした文字になおせばよい。

また、要約メモ・引用メモ・感想メモ、どのメモを作るのにも、骨惜しみや紙惜しみをしてはいけない。「こんなことは、メモするまでもないだろう」いっぺんはそう思ってやりすごしたことが、あとになってどうしても必要になり、あらためてまた文献をひっくりかえしてみたりするのはずいぶんと非能率である。

といっても、ムチャクチャにメモをとればいいというわけでもない。さしあたっては、当面

のレポートに必要と考えられるものに限ってメモをとるようにする。ひとつのことがらについて、メモが必要かどうかを考え、さらに、要約メモにするか引用メモにするかをきめていくだけでも、レポーターの頭はかなり効果的に鍛えられるだろう。

4　アウトラインの立て方

標準的なアウトライン

テーマがきまり、テーマについての資料収集が一段落し、必要な資料がきちんと整理されて手元にそろった。いよいよレポートを書く段取りである。が、ちょっと待ってほしい。レポートは感想文でもなく、随筆でもない。気の向くままに資料をとり、ペンが進むままに書き流してよいものではない。レポートは、スカッとすじの通った報告でなければいけない。レポートのテンポが、ときによって早くなり、ところによって遅くなるのはかまわないが、全体としてひとつのリズムをもつことがたいせつである。

だから、レポートを書きはじめるまえに、レポートの長短とは関係なく、スジのとおったリズミカルな展開と構成とをとっくりと考えておく必要がある。つまり、レポートのアウトライ

ン構築である。

科学実験のレポートのアウトラインは、わりあいらくにひとつの型にはめこむことができる。標準的アウトラインは、つぎのようになる。

1. 実験をおこなう科学の分野で実験がもつ意味、あるいは実験目的の説明。
2. 仮説。
3. 何に実験したか、実験材料の説明。
4. 使った道具・装置の説明。必要ならば写真・図など。
5. 実験の経過。
6. 実験の結果。
7. 一般理論との照合。

もっとも、かんたんなレポートなら、1、2、7は省略してもよい。

科学実験のほかにも、時間的な経過をとっている問題なら、時間の経過を追って問題を考え、できるならば因果関係でとらえるという基本パターンがなりたつ。つまり、ごくおおざっぱに言うと、ことがらを、

1. 原因
2. 経過

3. 結果

の三段階に分けて考えるのである。これは、歴史的な観点から見ることができるテーマならばもってこいの方法だろう。たとえば、「幕末の尊王攘夷思想」というテーマをとると、さしずめ、こういうアウトラインができるだろう。

Ⅰ. 尊王攘夷思想が発達した原因
　A. 国内の原因
　　a. 幕政への不満
　　b. 儒学の影響
　　c. 国学の影響
　B. 国外からの影響（外国勢力の圧迫への反撥）
Ⅱ. 尊王攘夷思想の推移
　A. 上昇期
　　a. 徳川斉昭らの封建支配再建案
　　b. 公家・大藩・下級武士による反幕的色彩の増大
　　c. 安政の大獄

d. 幕府への攘夷勅命

B. 停滞期

a. 公武合体による尊攘勢力の衰退

b. イギリス艦隊の鹿児島(薩藩)攻撃

c. 四国連合艦隊の下関(長州藩)攻撃

C. 尊王倒幕思想への転回

a. 薩・長両藩尊攘派のイギリスへの接近

b. 幕府の第二回長州征伐失敗

c. 薩・長両藩の倒幕派同盟結成

III: 結果

A. 大政奉還

B. 開国

アウトラインの構成法

むろん、レポートのテーマは科学実験や歴史的に考えられる問題ばかりではない。もっと別のテーマなら、どんなふうにアウトラインを画いたらよいのか?

その疑問を解いて、アウトラインの一般的な作り方を考えるのには、さしあたり、右の例を再検討してみるのが手っ取り早い。

「幕末の尊王攘夷思想」というテーマは、まず、「原因」「経過」「結果」という三つの項目に分けられた。そして、第一の項目「原因」は、さらにA、B二つの原因に分けられた。つぎに、「A．国内の原因」は、a・b・cという要素に分けられた。第二の項目も、おなじように分けてある。第三の項目も、A、Bを細分化すれば、やはりおなじことになる……。

テーマ全体を説明するのにⅠ・Ⅱ・Ⅲの項目があり、Ⅰを説明するのにA・Bがあり、Aを説明するのにa・b・cがある——全体は、こういう構成になっている。

さて、ここで順序を逆にして考えてみよう。そうすると、a・b・cがAを説明し、A・BがⅠを説明し、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲがテーマを説明しているということになる。この関係を数学的にあらわせば、

a＋b＋c＝A（B、Cでもおなじ）

A＋B＋C＝Ⅰ　（Ⅱ、Ⅲでもおなじ）

Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ＝レポート

ということになるだろう。そして、このタシ算全体の基礎は、a＋b＋c…の計算である。

ａとｂとｃとは、右のタシ算でのいちばん小さな単位であり、また、たがいにおなじ種類の記号である。「記号」ということばを、そのまま「資料」と置きかえてみるとよい。つまり、ａ・ｂ・ｃ……は、いろいろと集めた資料のなかで、いちばんはじめに、たがいに関係をもつと考えられる資料グループである。アウトラインは、この点から構成していく。

まず、資料カードを、扱っていることがらの内容に従って分類する。最初におなじような内容をもつ資料どうしを集め、つぎに、できた資料グループのあいだの関係を考える。関係の深い資料グループどうしを合わせれば、まえよりも一段階大きな資料グループができあがるだろう。このプロセスをくりかえして行きついたかたちが、ほかでもない、レポートのアウトラインである。

もちろん、小さな資料グループから大きな資料グループへと、総合化を進めていくアウトライン作りも、一口に言うほどかんたんではないかも知れない。ａｂｃｄと資料がある。ａｂｃを一グループとして、ｄは他のグループへ回すか？　あるいは、ａｂを一グループとし、ｃｄでもうひとつ別のグループを作るか？　総合化のそれぞれの段階で、こういう問題がなにかと起こるだろう。

しかし、これもレポーターのひとつの頭の訓練である。ああでもない、こうでもないと、構成をいろいろに工夫して、山あり、谷あり、野原あり、リズミカルな展開をしながらもスカッ

と展望のきくアウトラインを作るように努力してほしい。

ともあれ、アウトラインは、テーマについての資料を十分に収集した上で、収集した資料を十分生かして構成することだ。資料の種類と性質とに従って、資料を分類し総合する。この過程をくりかえすうちに、〃しぜん〃とアウトラインができあがる。どんなテーマにも、このアウトライン製造法は応用できるだろう。あべこべに、テーマをきめて、テーマからアウトラインを考えたりすると、資料収集の範囲がせまくなるだけでなく、レポート自体にもムリが起きやすい。

だが、〃収集した資料を十分に生かして〃アウトラインを作るといっても、収集した資料をのこらず使わなければいけない、ということではない。

資料を分類・総合していく過程は、ちょうど因数分解に似ている。

資料の種類と性質とによって因数分解をしようとするとき、素因数のように、どの資料グループにも属さない〃一匹オオカミ〃の資料がひょっこり出てくるかもわからない。一対多数というかたちで、どれかの資料グループと関係をもつことができればいいが、どのグループともどうにも結びつかない場合だってあるだろう。そういうときには、思いきってその資料を使うのはやめる。アウトラインにうまくおさまらない資料を、いつまでも愛惜していては、かえってレポートに見放される。

もし、アウトラインには入らないが、どうしても触れておきたいという資料があれば、レポートの終りに「補遺」として加えるという手もある。

財産をためこむことに熱中して、きれいに手放すことを知らなければ、〝にぎり屋〟と笑われるくらいがオチである。

見出しのつけ方　篇・章・節・項を立てる場合、四百字詰原稿用紙で十枚二十枚程度のレポートならわざわざ篇・章・節・項と区切りをことわらなくてもいい。短いレポートにもりだくさんな見出しをつけたりすると、いろいろな羽でじぶんを飾りたてたために、かえってなかまの鳥にからかわれた『イソップ物語』のカラスの親戚になってしまう。

五十枚、百枚というレポートなら、篇・章・節・項はいくらかは使っていいだろう。何枚くらいを篇としてまとめ、何枚くらいまでを章といい、節・項というのか、はっきりした規則はない。

けれど、『広辞苑』によると、篇は「書籍の一部分」だが、「一綴(とじ)になった書物」の意味もある。章は「文章中の大きな段落」、節は「小段落」、項は「法律・文章などの個条、項目」ということで、いちおう大小の順序はついている。また、篇の上には巻という区分けもあるが、これは完全に一冊の書物を呼ぶいいかたで、まず、レポートには縁がないだろう。

そこで、まえの「幕末の尊王攘夷思想」に篇・章・節・項をあてはめてみると、さしあたり

Ⅰ・Ⅱ・Ⅲが篇にあたり、A・B・Cが章に、a・b・c・dが節ということになる。むろん、Ⅰ・Ⅱ……を章にし、A・B……を節と呼んでもかまわない。

英語だと、volume が巻、book が巻または篇、chapter が章、section が節、item が項にあたる。しかし、volume と chapter のほかは、実際にはほとんど使われていない。volume や chapter も、むしろ使わない例のほうが多いくらいだ。

日本語のレポートでも、篇・章・節・項はあってもいいが、たいていは、ないほうがぎょうぎょうしくなく、体裁もさっぱりしそうである。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、1・2・3、A・B・C、のように、一字の数字や文字で区別してもすむだろう。友人の結婚披露に招かれても、シムプルな背広で出席するのが、近ごろではふつうになっている。

また、ふつうのレポートなら、「序論」「本論」「結論」という、くべつや見出しは考えなくていい。また、「論文の構成」でもお話しするように、「結論」は〃むすび〃であって、〃まとめ〃ではない。が、かくべつ「まとめ」という見出しはなくても、レポートのおわりに、レポートの内容をかんたんにまとめておくのはよいことである。さらに、レポートで取り扱ったテーマについて、将来の調査・研究の計画や、計画を実行するときに考えられるいろいろな条件について書いておくことも意味がある。

5 用紙と書くルール

どんな用紙を使うか

ことわざというものは、まことにつごうよくできている。「弘法筆を選ばず」と言ったかと思うと、「サルも木から落ちる」というあべこべの警句がちゃんと用意してある。たぶん、このサルは、まちがってサルスベリにでも登ったのだろう。

しかし、「よいレポーター、用紙を選ばず」という文句には、逆説も成り立たない。よいレポーター、用紙を選ばずにはいられないからである。

原稿用紙 日本語でレポートを書くときの用紙としては、市販の原稿用紙かレポート用紙かが、いちばんふつうに使われる。二つのうちどちらを使うかは、それぞれの大学あるいは教師の指定できまることもあるだろう。

が、少なくとも人文科学関係のレポートで、用紙として二者択一を考えれば、原稿用紙のほうがよい。

原稿用紙は、もともと、印刷出版を目的とする原稿のための用紙である。執筆者が、ただの

白紙に、字数にも行数にもとんちゃくせず、原稿を書き散らしたりしては、出版物の編集者は生命がいくつあってもたりなくなる。

それに、印刷所で、文選工が原稿を一字一字追いながら活字をひろい、植字工がそれを一字一字組んでいく手間は、見ているだけでもしんどくなる根仕事である。原稿用紙は、編集者や文選工・植字工の人権（？）を守り、仕事のスピードをあげるために発明された出版・印刷文化の利器だ、とも言えるだろう。達筆も悪筆も、一マスに一字ずつおさまっていれば、見にくさ読みにくさはずっと少なくなる。

見よさ読みよさのおかげで、とりたてて印刷出版の予定がない文章にも、原稿用紙は広く使われるようになった。手紙の類を別にすると、他人に読ませる文章のための用紙としては、原稿用紙は今日の用箋のスターである。

原稿用紙の紙質は、かくべつ問題とするにはあたるまい。戦後しばらくは、ペン先〝紙背に徹する〟おそまつな品質のものがさかんに出回っていた。しかし、いまでは、インクの一点がにわかにかきくもったり、婦人靴下なみに〝伝染〟する原稿用紙には、とんとお目にかからない。適切な値段のものであれば、品質にことさら神経質になる必要はない。

ただし、原稿用紙にはいろいろな種類がある。まず大きさとマスの数。市販の原稿用紙にも西洋紙大のものから、その約半分のものに至るまで、大きさの種類がいくつかある。そのほか

出版社によっては、自社の刊行物の字数・行数にあわせた、オーダー・メイドの原稿用紙を執筆者に使わせるところも少なくない。

また、著述家が、じぶんの好みで、独特の原稿用紙を作ることもあるだろう。大きさと同様、一枚の原稿用紙のマス目の数も一律にきまってはいない。

が、もちろん、いちばんふつうに使われる用紙は、A4判（約二一〇ミリ×二九七ミリ）四百字詰のものか、B5判（約一八二ミリ×二五七ミリ）二百字詰めのものかである。

書きよく読みよい字の大きさとか、ハンディだとかいう長所から、この二種類が常用されることになったのだろう。特別の指定がない限り、このどちらかを使えば無難である。

用紙のタテ・ヨコ

原稿用紙のマス目は、だいたい正方形になっている。が、マス目が正方形だからといって、用紙をタテに使おうがヨコに使おうが〝お気に召すまま〟というわけにはいかない。用紙の上下の空欄に大小があれば、大きな空欄を上にして用紙の天地はしぜんにきまる。たいていの原稿用紙には、こういう区別がついている。だから、タテ書き用であれヨコ書き用であれ、用紙の上下をやたらに変えるのは感心できない。

また、原稿用紙には、ノンブル（枚数・ページ数番号）を書き込む位置が、たいてい印刷されてきまっている。タテ・ヨコをとりちがえ、わざわざ別の場所にノンブルを打っては、なおのこと体裁がわるい。口元にチャーミングなホクロがあるのに、おでこにもうひとつつけボク

ロをするような無用な重複をおかすことになる。

いまでは、横書きの原稿用紙も、文具店にはかなり出回っているはずだ。タテ書き原稿はタテ書き用紙に、ヨコ書きはヨコ書き用紙に書くように、けじめはしっかりつけるほうがいい。

原稿用紙の紙とケイとの色は、好みもあろうし、ほとんどが淡色を使っているから、何色でもよかろう。

インクも、青・黒の系統なら、どんな色を使ってもいい。赤は禁物。交通信号でおわかりのように、赤はたいへん刺戟が強い。訂正のときにだけ効果的に使う。

マス目のうめ方　妙な見出しだが、原稿用紙に字を書くルールということである。

なるほど、原則的には用紙の一マスに一個ずつ字を入れていけばいいのだが、やはり見よく読みよい原稿にするために、原稿の書き方にはひととおりの約束がある。学生さんには、この約束を知らない人、あるいは、知っていても守らない人が多すぎる。歩いて道路を横断するのなら、横断歩道のあることは知っておいたほうがいいし、知っていたら、ちゃんと横断歩道をわたったほうがよい。

1. 書き出しはかならず一字さげ、二マス目から書き出す。改行して書き出すときも同様である。

2. 句読点（、。・）かっこ「　」（　）などの符号も一字分にかぞえる。ただし、印刷し

ない原稿で、符号がつぎの行の一マス目にまわるときは、前の行のおわりのマス目に、文字と符号とが同居する。

3. タテ書き原稿でも欧文はヨコ書きにして入れる。happyなどと書いては、たいへんsorryになる。連続数字は、タテ書き原稿なら漢数字でタテ書きにし、1966などとは書かない。もっとも、一字のときは洋数字もタテに使う。また、外国語で書名をあげて、それに続けて発行年を書くようなときは、*The Works* (1966) のように、ヨコ書きにするほうがよい。

4. 編・章・節・項などのことばを使い、あるいは、I・II・III、A・B・Cなどと文字を使って、原稿の段落に見出しをつけるときは、見出しに一行をあてる。また、見出しの意味の大小によって、見出しの位置にも上下をつける。たとえば、こんなぐあいになる。

第一編（I）　宇　宙

第一章（1）　地　球

第一節（A）　東　洋

第一項（a）　日　本

第一篇の「第」は上から何マス目で、「A. 東洋」のAは何マス目でなければいけない、などというめんどうな規則はない。見出しの意味の大小がわかりさえすればよい。また、ときによっては、見出しの前後を一、二行あける書き方もある。

5. 文章や文字をおなじ字数で訂正するときは、インク消しを使うのがいちばんよい。しかし、訂正して字数がかなり増減するときは、訂正する字句を×や‖印で消し、タテ書きなら右側、ヨコ書きなら上部の空間に訂正字句を書く。

字句を抜かしたときは、その場所に＜印（ヨコ書きなら∨になる）をつけ、符号の右（ヨコ書きなら上）に追加する字句を書く。

原稿用紙を使うときは、少なくともこれくらいの約束は守りたい。約束というより、これはむしろ常識に近い。

レポート用紙　マス目のないレポート用紙は、ふつうのノートブックをバラバラにしたものと考えてよかろう。もちろん、レポート用紙にも、それなりのりっぱな存在理由がある。まず、数字・数学を多用する、理・工学関係のレポート。たとえ、日本語の説明文が入ったとしても、原稿用紙では使いようがない。黒板で計算しようというのに、障子をもち出されたようなもので、とうぜん、レポート用紙に声がかかろう。

そのうえ、能率の問題もある。マス目のきまった原稿用紙にくらべると、おなじ紙面のレポート用紙にはらくに倍くらいの字数が入る。だんぜん能率的、おまけに経済的でもある。

が、書くほうと読むほうとの利害は、かならずしも一致しない。ペン習字の手本のようにきれいなレポートなら、原稿用紙でもレポート用紙でも問題はない。けれど、悪筆を自認するレ

ポーターが、文章を主にした人文科学系のレポートを書くときには、なるべく原稿用紙を使うようにおすすめする。むろん、教師からレポート用紙と指定されれば、話はまったく別である。

レポート用紙にレポートを書くときの注意は、原稿用紙の場合のルールをそのまま準用すればよい。

欧文レポートのフォーム　最近、とくに外国語・外国文学専攻の学生さんのあいだでは、教師が外人のときとは限らず、専攻している外国語でレポートを書く機会が多くなっているようだ。

欧文のレポートは、タイプ用紙にタイプライターで打つのが理想である。むろん、認められれば手書きでもよい。実際には、よほどタイプの腕がよくないと、タイプでレポートをあざやかに仕上げるのはなかなかむずかしい。

アメリカの大学には、レポート指導がかなり徹底しているところが多いらしく、タイプでレポートを作ることに触れた手引き書もちゃんとある。そのなかの一冊を見たら、十数ページにわたって、タイプで打ったレポートの実例が各ページにあげられ、こまかな部分についていろいろと解説や注意がついている。手先の器用でない人が読んだら、神経衰弱になるくらい念が入っている。そのせいかどうか、同書の筆者も、結局「ふつうの学生が、タイプで大部のレポ

ートをみごとに仕上げるのはとてもムリだ。専門のタイピストに頼んだほうがよい」と手をあげてしまっている。

外国の学生にむずかしいからといって、日本の学生にもむずかしいという理屈は成り立たないにせよ、タイプのレポートが原稿用紙のレポートみたいなわけにいかないことはたしかである。

しかし、幸か不幸か、欧文レポートを出題する教師のほうでは、「どうせ日本の学生だ。欧文でレポートを書くことにさえハンディがあるのに、ましてタイプで打つにおいておや」ぐらいのタカはくくっていると思われる。

だから、レポートをタイプで書くときにはミスに気をつけ、全体として統一したフォームで打てば、それでよかろう。仕上げをきれいに〝見せる〟には、本文はダブル・スペースで打ち、本文周囲の空白は少し大きめにとるとよい。

ただ、ひとつだけたいせつなことがある。タイプで打てば、左端はそろうが右端はなかなか一線にならない。が、右端がそろわないのを気にやんで、やたらに単語を切りハイフンをつけるのは、かえって体裁がわるいし、読みにくい。右端で単語を切るのはなるべく慎しむこと。そのため、右端が多少デコボコしても気にしなくていい。

欧文でレポートを手書きするときは、タイプで打つときの要領を、そのまま生かせばよい。

タイプにせよ手書きにせよ、欧文でレポートを書くほどのレポーターなら、欧文の形式・作法に慣れる機会はかなり多いだろう。わからない点は、欧文のテクストや文献を参考にすればよかろう。

6 レポートの文章

文章を書く態度

テーマをきめ、資料を集め、集めた資料でアウトラインを考え、そして、いまはペンを手にとり、机の上にひろげた用紙に向かうことになった。いよいよ、レポートをじぶんの文章で書きはじめる段取りである。

あるいは、読者のなかには、それにしてもいままでの〃準備〃が長すぎる、と思うお方がいるかも知れない。もしそう感じたら、その人がこれまでもっていたレポートへの見方のほうがむしろおかしい。しかし、レポートは調査報告書のことである。十分に調査をし、十分な資料がそろい、すじの通ったアウトラインができた、ということは、実は、レポートの〃準備〃がとのったということではない。もう、レポートは半分以上〃完成〃した、ということである。

料理でいえば、これまでの段階は調理室での仕事。レポーターの頭のなかで、献立てはすっかりできあがっている。食べるだけならいつでも食べられる。あとは手際よく食器に盛って、読者の味覚をたのしませればいい。

とはいっても、〃食べものは器〃といわれるように、どんなに栄養のあるごちそうでも、ふちの欠けたドンブリにダラシなく盛り合わせたりしては、調理士の腕前が疑われる。内容のあるレポートでも、スッキリした文章にのせなければ、ほんとうによいレポートとはいえないだろう。レポートの文章は、とりたてて名文でなくてもいい。ムリがなくムラがなくムダがなくすじがとおっていれば、それで足りる。

レポートの文章を書くには、どういう態度をとればよいか。まずそれから考えてみよう。

さしあたり、ふつうの作文と比較してみる。作文は、つまるところ主観の表現である。筆者の個性が表面に出れば出るほどおもしろい。多かれ少かれ、作文の筆者は、チャップリンのように自作・自演・自監督をする。しかし、レポートではそうはいかない。脚本家はたいてい古今東西の先人か第三者であり、演者は資料であり、レポーターは監督の椅子に座ることになる。

むろん、監督にだって主観はある。監督の主観が、冷静な推理や判断となって発揮されれば名画・名舞台が生まれるだろう。が、監督が役者といっしょになって、泣いたり笑ったりしたのでは、芝居がブチこわしになってしまう。監督は、情緒的な主観は慎しまなければならな

い。ひとりよがりや思いあがりも、ピッタリおさえていなければ、役者は逃げ出してしまうだろう。
レポーターは監督である。それなのに、字幕に顔を出したがる監督がちょくちょくいる。

その日の夕方、わたしは池の岸に腰を下ろし、たそがれの静寂をたのしんでいた。ふと、水面に鳥影が走った。瞬間、わたしは鷗外の『雁』を連想した。わたしが『雁』をレポートのテーマにしようと思ったのは、このときである……。

そんなこと、どうだっていい。ズバリと、

鷗外の『雁』は……

と書き出したほうが、ずっとスッキリしている。右の例ほど露骨ではないが、実際の創作から文章をひいて、レポートの文章とのちがいを考えてみよう。大正期の社会主義者についての伝記風な小説の、ある章の書き出しである。伝記の要素が入っているから、客観と主観とがミックスした文章だと判断してよい。

辻潤が伊藤野枝を初めて見たのは、明治四十四年春四月のことだった。
幸徳秋水たちの大逆事件の処刑が一月二十五日に行なわれ、まだ二カ月しか経たず、折からの万朶の花の色にも、春風にも、死臭と血腥さを感じるような、かつてない不気味な底冷い春だった。

名文かどうかは、いまは問題にしない。創作なら、これでもいい。しかし、レポートの文章としては、情緒的な主観のアクセサリーが多すぎて、とても及第はできそうにない。文章のポイントは「辻潤が伊藤野枝をはじめて見た時期と当時の世情と」である。

それなのに、たとえば「春四月」。調子でこうなったのだろうが、四月は春にしかありっこない。ただ「四月」でたくさん。「折からの万朶の花の色にも……」から「底冷い春だった」までは、〃講釈師見てきたようなウソを言う〃ことのできる、創作家の特権を利用した叙述である。かりに、筆者がそのときその場にいたとしても、「万朶の花」と使いふるした表現を借り、「花の色にも、春風にも」「死臭と血腥さを感じる」と、クドクドと陰惨な印象をおしつけ、それでも足りずに「かつてない」と最上級の限定をして、「不気味な」「底冷い」と、また陰惨な印象を押し売りする。ここで印象というのは、情緒的な主観である。この文章は、情緒的な主観があそびまわった、レポートの文章としてはかなりな〃悪文〃といえるだろう。

右の例文をレポートの文章になおせば、さしずめこんなふうになるだろう。

辻潤が伊藤野枝にはじめて会ったのは、明治四十四年四月である。

幸徳秋水たちの大逆事件の処刑は、一月二十五日に行なわれていたので、まだ二カ月しか経っていない。そのため、季節の明るさとは逆に、一般市民は政情に強い不安を感じていたようだ。

そして、文末の推定には、推定の根拠(こんきょ)となる資料がとうぜん用意されていなければならない。

レポートの文章に自分で酔い、人も酔わせようなどとは考えないこと。作品に対する個人的感銘を土台にする芸術鑑賞のレポートでも、「よかった」「すばらしい」「最高だ」と感嘆や賞讃をいくら連発したところで、レポートにはならない。感嘆や賞讃を、どうもうまく表現したって、よいレポートの文章とはいえない。むろん、感嘆や賞讃はたいせつである。けれど「なにに」「どう」感銘を受けたのか、冷静な主観で推理し判断して、はじめてレポートの文章が生まれる。

レポートの文章を書くときは、情緒的な、甘ったれた〝自分〟はおさえつける。が、ことのついでに、冷静に推理し判断する〝自分〟まで引っこめてはいけない。それでは、だれの文章

だかわからなくなる。推理し判断する〃自分〃は、必要があれば、いつでも責任をもつ姿勢をとっていなければいけない。

「わたくしは……と思う」と書くところを、「われわれは……と思う」とか「ひとは……と言う」とか表現を変えるのは、しゃれたつもりかも知れないが、レポーターとして正しい態度ではない。責任を回避し、第三者の背中に隠れる行為は、政治家にまかせておけばよい。レポーターは、もっと堂々としていたい。

キザっぽいような、ダラシがないような表現は、ほかにもある。「この分野の初心者として……」（そんなこと、はじめからわかっている）「……と書いても、だれも反対はしないだろう」（そんなこと、わかりはしない。〃反対！〃という声が、どこから飛んで来るかわからない）「ということは、だれもまだ言っていない」（〃なに、じぶんがそう言えないだけだ。わしには、そう言えるがな〃）どれもこれも、とたんに反撥を呼びそうな〃自己喪失〃の表現である。妙なあげあしをとられるまえに、「わたくしは……と考える」「わたくしには、まだ……と言いきれない」と書いたほうが、レポーターとして謙虚だし、誠実だし、りっぱである。

しかし、いくら堂々としていても、「わたくしは……と信ずる」という表現は慎しむこと。知識は相対的なものであり、学問は信仰や宣伝とはちがう。「わしは……と断言する！」とか

という「オネガイしまーす」「わしは……と確信する！」とかいうオーバーな表現は、選挙のときの「オネガイしまーす」ということばとおなじくらいの比重しかもたない。

レポーターは〝考える〟人である。「少なくとも現在の自分は、こう思う」それが、レポーター自身の考察から期待できる、最大限の断定的表現だと言えるだろう。

文章を書く技術

しかし、心がまえがどんなにりっぱにできたところで、実際に書く文章が読みにくく、わかりにくくては、片手落ちな結果になる。情緒的なことばはひかえ、推理や判断の責任はとった。けれど、あとの文章はチンプンカンプン、さっぱりスジが通らない、ということではこまるだろう。

生来口べたのゴンベエがいた。「寒いねえ」と言われても、「おいらのせいじゃない」「お早う」と言われれば、「もう十時だがね」という調子。見かねた人の忠告で、他人の挨拶にあいづちをうつ心構えを教えられた。ゴンベエ氏、謙虚に誠実に真剣にあいづちをうちつづけた。「寒いねえ」「はあ、お山は雪だんべえ」「寒いねえ」「はあ、お山は雪だんべえ」ある日、暖冬異変とやらで、「今日はあったかいねえ」「はあ、お山は火事だんべえ」

実際的な技術をもたず、心がまえだけでは、とかくトンチンカンなことになる、というお笑い

である。

悪文の例　ところが、日本語ということばは、ともすればトンチンカンな非論理を招きやすい曲者（くせもの）である。こころみに手近な新聞を見てみよう。（傍点筆者）

糸と糸との編み目にユニークな化学処理。この樹脂の力がランに数倍の強さを保証します。（婦人靴下の広告文）

ネコをなんども繰り返えし怒らせたあと、構わずにほっておくと不思議なほどすぐ寝てしまうのをごぞんじですか？（薬品の広告文）

青空に響くデッカイ感動も再び前作の黄金トリオが放つ最新傑作。（映画の広告文）

目につきやすい大きな活字で堂々と印刷された文章でさえ、右のような例はザラである。どれほどトンチンカンか、ひとつ検討してみよう。

婦人靴下の広告文の場合、「この樹脂」の「この」は何をさしているのか？　化学処理と樹脂との関係に説明がまったくない以上、「この」は宙に浮いている。「この」始末をどうして

くれる?「ランに強さを保証する」というのは、「ランに対する強さを保証する」意味だが、「ランに強さをあたえることを保証する」とも解釈できる。ラン文である。

薬品の広告文の「ほっておく」ということは、ある時間放置するという意味で、時間の経過が必要である。しかし、「不思議なほどすぐ」というのは、時間の経過を否定することばである。この薬品会社は、タイム・マシンでももっているのかも知れない。正しい文章は、「……繰り返えし怒らせたあと、急に構うのをやめると、不思議なほどすぐ寝てしまう」と書かなければいけない。

三番目の映画の広告文はまるでムチャクチャである。デッカイ感動が青空に響くのも変な話だが、この宣伝文の作者は経済学士なのだろう。「再び」というひとつのことばを「感動も再び」「再び……放つ」と、再びの役に立てているらしい。再び読んでもわからない文章で、再び考えるとアホらしくなる。

広告文だからスジが通らなくてもいい、という逃げ口上は許されない。りっぱな広告文だってたくさんある。

お手ごろの大きさで、とても使いやすく、注ぎ口がよごれず、いつもきれいです。中味がなくなったら、一リットルか二リットルびんから、お手軽につめかえができます。(調味料の広告文)

やかましく言えば、「一リットルか二リットルびん」という表現は不正確である。「一リットルか二リットルのびん」あるいは「一リットルびんか二リットルびん」と書くのが正しい。しかし、この文章には、読みちがえの心配はほとんどない。

問題は、まえにあげた三つの悪文を、おそらくは大学卒の宣伝マンたちが本気で書いている、ということである。さらに、読者のみなさんが、こういう非論理的な文章を、さしたる抵抗を覚えずに読んではいないか、ということである。気分で書き、気分で読まれる日本語の曲者たる所以（ゆえん）がここにある。

三つの広告文例は、ことばの意味をとりちがえ、スジを通しそこねたために、トンチンカンな文章になった。しかし、一見スジのとおった文章でも、検討の必要が起こる例が少なくない。

　美しい山の白雪にこだまする、合唱の声が心にしみた。

なんの変哲もなさそうな文章である。省略された主人公が、前後の文章でしぜんにわかると仮定すれば、ひとつも問題はないように思われるかも知れない。が、それなら、「美しい」のは「山」か？「白雪」か？「合唱の声」か？　書くほうでは、このうちどれかを「美しい」と感

じて書いているのだろう。しかし、読むほうには、筆者がどれを「美しい」といっているのかさっぱりわからない。

こういう抒情的な文ならば、「美しい」のがどれかはっきりわからなくても、なんとなく「美しい」雰囲気を想像して読みすごしてもすむかも知れない。筆者のほうでも、たぶん、それくらいのことしか期待していないだろう。しかし、内容のある文章のスジが、おなじようにわかりにくいと、こんどはフワッと読みすごすわけにはいかなくなる。気分ならともかく、知識そのものが、読者にしっかりと伝わらなくてはおおごとである。

たとえば、つぎの文章は、ヨーロッパの政治についての、ある文章の書き出しだが――

東西両体制間の冷戦を緩和し、平和共存の方向に踏み出す場合の条件をヨーロッパの舞台で考えるとき、外交面では前記の通り現存する各種中立国の網の目をつなぐ中立緩衝ベルトの設定から非核武装地帯など軍事管理地域を設ける兵力引離し案、またそのものずばりに全面的軍縮協定のひな型またはその一環として西方のNATOおよび東方のワルシャワ同盟間の局地的不戦ならびに兵力削減案などが企図されまた提案されてきた。

いっぺん読んだだけで、文章の内容が頭に入るだろうか? よほど頭のいい人か、よほど頭

のひねくれている人か、あるいは、この問題について、筆者と少なくともおなじくらいの知識をもった人でなければ、いっぺん読んで内容がのみこめはしないだろう。むろん、筆者の態度はまじめである、しかし、表現技術が十分だとは言いにくい。

どこがいけないのか？　使っていることばに、それほどわるいところはない。文体と内容から考えると、「舞台」とか「網の目」とか、よけいな連想のはたらくことばはないほうがよかったが、そのほかには、とりたてて不適切なことばはない。ことばの選択はまちがっていない。やはり、文章のスジに問題がある。

たとえば、後半の「そのものずばりに」は「……の一環として」を形容するのか、「……企図されまた提案され」にかかるのか、わからない。また、「西方の……」から「……ならびに兵力削減案」までが長すぎて、「……その一環として」「企図されまた提案され」となるはずのつづきぐあいにじゃまが入った。右の文章の読みにくさは、あちこちに読点、をはさみこんだぐらいでは、そんなに変わらない。こんなふうに、書きなおしてみよう。

東西両体制間の冷戦を緩和し、平和共存の方向に踏み出すための条件を、ヨーロッパの問題として考え、つぎのような案が企図されまた提案されてきた。外交の面でいうと、前に記した通り、現存する各種中立国のあいだに中立緩衝ベルトを設定し、非核武装地帯など軍事管理地域を設ける――つまり、第一は

兵力引離し案である。第二は、西方のNATO、および東方のワルシャワ同盟間の、局地的不戦案ならびに兵力削減案などである。第二案は、そのものずばりに全面的軍縮協定のひな型、またはその一環として考えられた。

まだ、あいまいな点が多少残るが、それは、この文章の前後の文章で判断できることがらである。引用文に関する限り、内容はかなりはっきりしてきたと言えないだろうか。

右の例文は、今日のわが国での一流の知識人が、一流の出版社から出した書物から抜き出したものである。一流の知識人が、こういう文章を書く。まして、一流でない知識人が、どんなにスジのわかりにくい文章を書くかは、官庁の公文書やおかしな学者の論文などで、みなさんはとっくにごぞんじだろう。実際、日本語のへたな翻訳者の翻訳書は、原文よりよっぽどわかりにくい。思想的な内容をもったカタい書物は、訳書よりは原書のほうがたいていやさしい。

むろん、日本語そのものに罪はない。日本語がいけない、というのなら、日本の文化全体がいけない、ということになる。日本語は、それだけデリケートなのである。デリケートだからまずい論理を情緒でまぶして甘くもできるし、論理にかかずらって、かえってスジがわからなくなったりもするのである。

もっとも、こういう問題は、いままでにもかなりとりあげられてきた。啓蒙的な「作文論」

で、日本語の情緒性・非論理性を扱わない書物は、まずないだろう。だから、本書では、この問題にこれ以上深入りすることはやめる。そして、デリケートな日本語で、内容のあるスジのとおった文章を〝書く〟実地訓練を考えてみよう。

文章の訓練

ほんとうにりっぱな筆者が書いた難文なら、その難文以外に筆者の考えはあらわしようがなかったのかも知れない。りっぱな筆者のりっぱな書物なら、読者は難文にも同情と敬意とをもつべきだろう。すぐれた文学作品には、そういう例がいくらもある。

しかし、学生がレポートを書く場合、ムリ・ムラ・ムダのない、スジの通った文章で書くということは、前とは立場を逆にした、知識に対する礼儀である。

が、それなら、ムリ・ムラ・ムダのない、スジの通ったわかりやすい文章を書くには、実際にはどうすればよいのか？

模範になる文章　創造は模倣からはじまる、とよく言われる。名文を書くのには、名文を転写してまねるのがいちばんいい。これも、多くの「作文論」が指摘することである。レポートでよい文章を書くのにも、やはり、それにふさわしい既製の文章を見習うことは、たしかによい。

レポートの文章の手ごろな見本としては、内外一流新聞の「論説」が、いちばん手に入りやすく、無難だろう。とりわけ、日本の一流紙の「論説」には、かたよった主義・主張がない。たいていは、常識的な内容を穏健な調子で説くだけである。見方によっては生ぬるいかも知れないが、それだけ公平で問題が起こらない。「天声人語」などのカコミ記事も、「論説」となじに、エキスパートの文章家の筆になる。

原子力潜水艦の入港を前にして、阻止団体では「実力をもって阻止する」と言い、警備側も「実力行使」を口にした。この問題ばかりでなく、大がかりなデモが行なわれるたびに、〝実力をもって〟という語が必ず双方で使用される。

この場合の実力行使とはなにか。結局は力ずく、腕力くらべになってしまう。〝実力〟を行使してすわりこんだ反対派に対して、賛成派は〝実力〟をもって排除する。あばれ回わるのも実力であり、数人がかりで手とり足とり、小突き回して列外に押しやるのも実力である。結局は警官隊が加勢した実力の方が勝つ。

「実力行使」といういやな言葉は終戦後の労働争議の中から生まれたらしい。社長をカンヅメにしたり、すわりこむ時に使われた。非合法スレスレの労組戦術だが、それが国会に及んで、社会党議員が赤ジュウタンの上にすわりこみ、議長の入場を阻止したりする。政府の方でも警官隊を導入、これまた実力行使と称したことがしばしばである。

原潜寄港に反対の立場も当然あろう。だが佐世保での入港・上陸阻止の実力行使はいささかマト外れではないかといいたい。日本政府の寄港承諾にもとづいてはいってくる艦だ。その方をかえないでおいて、このフネは許さぬと力んでも話のスジは通るまい。

革新陣営のおもわくの中には、佐世保での実力行使によって、大衆への影響力を強め、安保破棄への動きを盛りあげようという戦術があろうが、それならば日本政府を相手に抗議すべきことだ。急な入港で、政府の手続きに納得できず、時期としてよくないというのなら、それも日本政府に対してやるべきだろう。

佐世保での〝実力による阻止〟はひっこめた方がよい。やり得る限界は「われわれは原潜寄港に反対である」との意志表示までである。そのプラカードに「人間としてのあなた方は別だが」くらいの言葉はあってもよいだろう。

（朝日新聞「天声人語」から。一部を省略加筆）

文章のスジが通っているばかりでなく、筆者のものの考え方が、そのままレポーターの知識への態度の参考になりそうなので、あえて原文の六分の五をひいた。

レポートの文章の見本には、右の例のように、筆者の書くことが、トントン順序立ってスムーズにのみこめるものを選べばよい。レポーターひとりひとりの能力に応じて、読みながら「フムフム」「なるほど」「フムフム」と合点（がてん）が連発するような文章が、そのレポーターにと

っての標準的な模範文例である。

「作文論」では、起承転結だとか、三段論法だとかをよくうるさく言うが、そんなルールをいちいち他人の文章に求めたり、自分の文章にあてはめたりすることはない。ひとつのセンテンスからつぎのセンテンスへ、ひとつの節からつぎの節へと、ムリなく、わかりやすい文章ではこんでいる文例に親しむことが先決である。

自分の文章を育てる　レポートの文章のサンプルは、レポーターが、背伸びしないでついていける、内容のある「論説」ふうな文章であればよい。が、さて、そういうサンプルを見習って、自分の文章を育てるのにはどういう練習をしたらよいのか?

〃創造は模倣からはじまる〃を金科玉条にして、ある長さの文章を、一字一句写していくのも一法であろう。名文を書くようになるのには、そういう方法がいちばんいい、とされている。実際、多くの作家たちが、そうした文章修行に彼らの青春の一時期を過してきているらしい。しかし、レポーターは、〃名文家〃である必要はない。まして、〃作家〃をねらうわけではない。文学青年が特定の作家の文章を転写することは、作家の表現に慣れ、作家の文体を吸収し〃文は人なり〃のことばどおり、つまりは作家その人の人生観・世界観に迫ることを意味している。

レポーターの文章修行では、目標がかなりちがってくる。早い話が、いまの場合、サンプル

の筆者の人生観・世界観などは、どうでもいい。個性的な文体や表現もどうでもいい。どうでもよくないのは、わかりやすくスジが通った文章であるか、ないか、ということである。創作は、むろん芸術の領域に入る。しかし、レポートは科学の分野での作業である。

だから、初心のレポーターに、特定の個人の文章をまるまる転写するという方法は、おすすめする気にはならない。部分的な表現のうまさ、洗練された文体に気をとられて、全体としてスジの通った考え方・書き方を見落しては、なんにもならないからである。

要約による練習　むしろおすすめしたいのは、資料カードのところで触れた、「要約」による練習である。要約ということばの意味は、あらためてくりかえすまでもない。ここでは、要約の方法について考えてみる。

1. サンプルの文章をまず選ぶ。長さは字数で考えない。ひとつのまとまった内容を述べていると思われる部分を、ひとつの要約単位として考える。

2. 原文を精読する。わからないことばやことばづかいがないか、念を入れて確認する。もし、そういう個所があれば、辞書ではっきりさせておく。注意深く、なんどでも読んで、文章のテーマが何かを判断し、原文の筆者の意図を考える。

3. テーマをささえ、解説していることがらを、重要なものの順に抜き出していく。原文が長く、要約も長くなるものならば、メモをとっておくとよかろう。

4. 要約を書く。説明は、原文の表現にとらわれず、なるべく自分のことばで言いかえる。テーマを中心に、原文に含まれたことがらを、過不足なく一定の長さにまとめる。3でメモをとってあれば、メモが参考になるだろう。

5. 検討。これがたいせつである。原文にあっただいじなことがらが要約で抜けてはいないだろうか。逆に、原文になかったよけいなことがらが要約にまぎれこんではいないだろうか。原文としっかり照らし合わせる。

以上が要約のコツである。とりあげた原文がかなり長く、いくつもの段落に分かれていれば、それぞれの段落について要約を作るようにする。

また、この場合の要約は、部分としても、全体としても、ちゃんとした文章になっていなければ意味がない。そうでなければ、文章の練習にならない。だから、要約文の長さは、ふつうは原文の三分の二か二分の一。いくら短くても原文の三分の一くらはあったほうがよかろう。

まず、さっきの「天声人語」の前半を、約二分の一の長さに要約してみよう。

原子力潜水艦の入港をめぐり阻止団体と警備側とが対立、「実力行使」を言い合っている。デモといえば、「実力行使」になる。

「実力行使」とは肉体的な力くらべのことである。暴力さえもが実力という名で通る。そして、勝負は警

官隊の出動できまる。
「実力行使」は、戦後の労働争議が生んだことばらしく、非合法に近い労組戦術を意味する。それが国会にも及び、与党と野党とのやりあいにもなんどか使われた。

おなじ原文を、べつの比率で縮める練習は、みなさんが自分で試みてみるとよい。
もうひとつ要約例をあげておこう。

ケネディはその悲劇的な暗殺以後、にわかに「理想主義者」として画き出されている。これは、痛ましい最期をとげた若い大統領に対する人情と礼節とからは、まことに自然なことである。しかしわれわれは、同時に、かつて故ルーズヴェルト夫人が、ケネディはマッカーシィズムに対する態度があいまいであったという理由で、彼を大統領候補として推さなかったという事実をも、忘れてはならないであろう。実際、彼が大統領に立候補した頃には、例えばスティヴンスンと比べ「ヴィジョンの乏しい現実主義者」という批評も決して少なくなかった。
彼が「現実主義者」であったと言ったからとて、彼が「理想主義者」でなかったということではない。彼は内政外交それぞれの面で、理想をいだいていたであろうし、ことに、彼がソ連との平和共存の問題に真剣に取組んだことは、誰の眼にも明らかである。あるいは、ケネディは、大統領になることによって「理想主義者」になったと言うべきなのかもしれない。つまり、およそ正常な理性と良心との持主であれ

ば、アメリカ大統領に負わされている全人類への重い責任が何であるかを自ら体験した時には、もはや「理想主義者」以外にはなりえないかもしれない。

（坂本義和『ケネディ外交の遺産と矛盾』から）

まず、約二分の一に縮めてみる。

ケネディがたいへん悲劇的な死をとげたため、人々は急に彼を「理想主義者」として敬慕しだした。しかし、ルーズヴェルト夫人はマッカーシズムに対する彼のあいまいさをきびしく批判していた。また、スティヴンスンにくらべると理想の低い現実主義者だという批評もかなりあった。

しかし、対ソ平和外交でもあきらかなように、大統領としてのケネディは、彼なりの政治理想はもっていたようだ。ケネディは大統領に就任して理想主義者になった、とも思える。アメリカ大統領の全人類に対する責任を自覚すれば、どうしても理想主義者になるのではないか。

おなじ文章を、ためしに約四分の一に要約してみよう。かなり〃大意〃に近くなってくる。

ケネディは死後、理想主義者として追憶されているが、大統領就任以前の彼は、むしろ、現実主義的な政治家だった。

大統領就任後の彼の政策には、たしかに理想主義的な面があらわれた。しかし、現代の大国の指導者としてはそれも当然のありかただったろう。

要約の効果　要約する原文は、ひとりひとりの理解力に応じて、ムリがなくトントンと読んでいける、スジの通った文章であればよい。それを要約するためには、まず原文を〝分析〟し、つぎに原文とおなじ意味になるよう気をくばりながら、自分の文章で短く〝総合〟しなければならない。つまり、この作業では、分析力と総合力とが、ふたつながらはたらくことになる。

スジの通った文章のスジをバラバラにし、短くしたスジを、もういちどもとのようにつなぎあわせる。しかも、つなぎあわせるときには、なるべく自分のことばを使う。ということは、自分のことばを使ってスジを作り、スジにピッタリ合うような自分のことばを選ぶということになる。要約者がムリ・ムダ・ムラのないことばを使う力、そのことばを生かしてスジを考える力、どちらも要約練習でかなり伸びるのではないか？

あるいは、サンプルに選んだ文章が、読んでみるとトントンと調子がよいくせに、実はことばのあやでカムフラージュしただけの、内容の乏しいマヤカシものであるかも知れない。が、その文章の正体も、要約してみればすぐにわかる。原文を短く表現しなおしてみれば、原文の

ムリ・ムダ・ムラは、とうぜんふるい落とされずにはいないからである。レポートの文章としての、よい、わるいについての判断力も、要約でしぜんに養われて来るだろう。

だまされたと思って、練習してごらんなさい。要約は、それほどらくではない。文章を読んで、「なに」について書いてあるかは、わりあいかんたんにわかるだろう。けれど、それが「どう」書かれているかを、一定の制限のなかで見きわめることは、案外めんどうなことである。が、めんどうだからこそ、頭のための訓練になる。原文と要約文との長さの比率をいろいろに変えて、要約練習を試みるよう、おすすめする。

引用の仕方　文章を要約する力がつけば、引用の問題はかなり解決がつくはずである。が、ともかく、レポートの文章技術のひとつとして、引用を考えてみることにする。

レポートがほんとうにレポーター自身の調査報告であるためには、レポートの文章はレポーター自身の文章で統一するのが原則である。たとえ、レポートにいろいろな資料をとり入れるにしても、なるべくレポーター自身のことばで資料をこなして解説するのがほんとうである。それなのに、初心者のレポートでは、引用につぐ引用で、レポーター自身の影がうすくなる例がよくある。

牝馬クローバーはつぎのように描写されている。

「クローバーは中年近い、がっしりした母親らしい牝馬だった。四度目のお産をしたあとでは、昔のおもかげはほとんどなかった」（引用）

すべての動物は彼女を母のようにしたっている。彼女には大きな抱擁力があるのだ。弾圧後のショックの時も、「動物たちは、口もきかずに、クローバーのまわりにむらがった」（引用）

また、あたらしい仲間も、「彼らは、ほとんど親に対するような尊敬を彼女にもった」（引用）

彼女は最後まで長生きする。私はクローバーの姿に作者の母親の姿を見るのだ。

「幼年時代のあと、少年時代を回顧すると、ぼくは母親以外の大人に愛情を感じたことはなさそうだ。ぼくは、母親さえもすっかり信頼してはいなかった。内気なために、ぼくは母親に対する本当の感情をほとんど隠していたから」（引用）……（A）

と描かれている所からみても、オーウエルの理想とする女性像は彼の母の像であったと思われる。彼の最初の妻は簡単な手術の後に死んだが、このことについて、「オーウエルの話では、戦時中、彼女の抵抗力が減退していたためにちがいない、ということだった。彼等夫妻は、ほかの人たちに配給食料がよけいに回るよう、自分たちの分はいつも減らしていた。彼らは男の子を養子にしていた」（引用）……（B）

と書かれてあるように、彼の妻にもクローバー的、つまり母親的性格が存在していたと思うのである。

こういうレポートがザラである。右の一節が、文学鑑賞レポートというよりは、〝感傷〟レポートになりそうな困った例のひとつであることは、いまは二のつぎにする。

とにかく、引用文が多すぎる。全体の半分以上が引用である。筆者は、自分の読書の収穫をほんきで披露したつもりかも知れない。しかし、レポートがほんとうのレポートになるためには、なるべくレポーター自身のことばで構成するのがほんとうである。

つまり、引用は、ほんらい少なければ少ないほどよい。レポートのなかで引用が占める比率は、すしのワサビ、ビールのツマミぐらいのところでストップしたほうがいい。

右の例文は、コップ一杯のビールに枝豆を鍋ごと出したようなものだ。おまけに、どの枝豆もカラか、ほとんど実が入っていない。なくてはこまる引用ではない。前半は、

きびしい弾圧に動物たちがショックを受けたとき、彼らは口もきかずに、クローバーのまわりにむらがった。また、あたらしい動物なかまも、ほとんど親に対するような尊敬を彼女にもった。―作品には、このように書いてある。こういう叙述を読むと、作者はクローバーをかなりの愛情をこめて描いているように思われる。

これでよい。もし、自分の文章に消化して述べた二つのことがらが、作品から忠実にとったものであることをとくにことわりたければ、あとでお話しするように、注をつけたらよかろう。

第三者の解説を借りるときにも、

Aの説では……ということである。

というように、なるべく原文を自分のことばでほぐしてしまうほうがよい。

右の例文の引用のなかで、（A）（B）とマークした、わりあい長い二つの引用は、どちらも最低な引用例である。（A）の引用では、せいぜい母親にしか愛情は持てなかった、といっているのに、つぎのレポーターの説明では「理想とする女性像は母親であった」と思ったりしている。（B）の引用から、どうして「彼の妻がクローバー的である」ということになるのか、まるでわからない。

しかし、引用をやたらと使い、引用中毒にかかった患者には、この非論理性に気がつかない。原作者本人のことばだ、あるいは信頼できる資料だ、というだけで、むやみとありがたがって、こういうトンチンカンな引用をしたがる。

まえの二つの引用のときとおなじように、引用（A）（B）を自分のことばで言いかえて使っていたら、このレポートの筆者も、まさか例文ほどムチャなことは書かなかっただろう。〝引用恐るべし〟である。

引用したほうがいい、あるいは、引用しなければならない文章はきまっている。つまり、その意見または叙述が、

a.　たいへん個性的なとき

b.　議論の余地がありそうなとき

c.　意味がはっきりしないとき

の三つの場合に限る。こういうときは、原文をそのまま引用したほうがいい。むしろ、そうしなければならないだろう。右の三つの場合のような意見や叙述は、なまじレポーターのことばになおすと、信頼度がうすくなるからである。

引用するときは、一、二行以下の長さなら、引用符（“ ”、‘ ’、「 」）をつけて文章のなかにそのまま挿入してよい。長い引用は、引用符でくくるかわりに、改行する。和文では、引用文の頭を本文より一字さげたレベルにそろえるのがふつう。欧文なら、本文よりも長さを左右でちぢめ、また行間もいくぶん詰めるのがならわしになつている。

注のつけ方

「資料の使い方」のところで述べたように、筆者が直接手に入れた、なまの資料なら問題がないが、第三者から得た資料については、筆者は、資料の出どころを読者にはっきりと説明する義務がある。

しかし、そういう資料が文章のなかに出てくるたびに、いちいちながながと出所を説明していたのでは、本文そのものがたいへん読みにくくなる。そこで、たいてい、説明は説明だけでひとところにまとめ、本文から隔離する。この説明が「注」である。

注がなければならない資料に注がないのは困る。が、逆に、注がなくてもいい資料に注があ

ってはうるさい。第三者から手に入れた資料だといっても、だれでも知っているようなことがらなら、注はないほうがいい。

たとえば「光は一秒間に地球を七回り半する」。現在では、いちばん基本的な科学常識のひとつである。だれが計算したか、などと注をつける必要はない。「レオナルド・ダビンチはイタリアのルネッサンス期芸術家・科学者、『モナ・リザ』の作者である」これも、文化史・美術史の常識で、小学生でも気のきいたこどもなら知っている。あらためて説明するにはおよばない。引用とおなじで、注をつけることがらにも、リミットがある。

1. 原則として、引用には注をつける。書名のはっきりした特定の文献から引用をするときには、引用した文章に続けて（十一ページ、p. 11）というふうにかんたんな注をつけてもまにあう。

2. レポーターは知っているが、レポーター以外の人、とくにレポートの読者が知らないと思われることがら。これには注が必要。

3. レポートに書くほどではないが、レポーターとして触れておきたいことがら。これも注で説明したほうがよい。注をつける場合、まず、本文のなかで、注をつける語句には、説明を注にまわした、というマークをつける。マークは、和文では、その語句の右下、欧文では、語句の右肩に（ ）に入れて注の番号を書く例が多い。マークの大きさは、本文の字よりも小さ

めにする。

（例）　山野太郎氏の著書によると[1]……

in his essay, that acquired much popularity[1] in the country[2]……

注の書き方にもいろいろある。そのなかで、いちばんよく使われるのは後注と脚注だろう。後注は、わりあいに大きな段落（篇・章など）ごとに、それぞれの段落のおわりにつけてもよく、レポートの本文ぜんぶの直後にひとまとめにしてつけてもよい。脚注は、横書きレポートだけに使い、ページごとに、ページの下のほうにつける。

もちろん、本文につけた注のマークの番号と、注自体の番号とは、一致しなければならない。また、段落ごとの後注以外は、注の番号は、レポートを一貫した通し番号にする。注は、読みよいように箇条書きのかたちをとる。出典として文献をあげるときは、筆者（編者）名・書名、およびその文献のどの部分に関係があるか、ということだけを書けばよい。

もっとも、ひとつのレポートのなかで、おなじ筆（編）者のおなじ書名の書物を二冊以上扱うとき、または雑誌・新聞などおなじ誌（紙）名で連続して発行されるものについては、版・発行年月日などでくべつをつける必要がある。ふつうの書物なら

渡辺照宏『日本の仏教』八〇ページ

Huxley, *Crome Yellow*, pp. 23-25.

のように書けばよい。発行地（所）・発行年など、文献をはっきりさせるために必要なほかのことがらは、あとで述べる「参考文献目録」で文献をあげるときに書けばよい。

注を、できるだけかんたんに見やすくするため、欧文では、いろいろな略記のしかたがある。欧文レポートはいうまでもなく、和文レポートでも、横書きのものや、洋書をおもな資料にしたレポートならかなり応用がきくだろう。

たとえば、注で、

9. Roget, *Thesaurus of English Words and Phrases*, p. 30.
10. Roget, *Thesaurus of English Words and Phrases*, p. 30.
11. Roget, *Thesaurus of English Words and Phrases*, p. 42.

というように、おなじ筆者名、おなじ書名がなんどもくりかえし出てくるのでは、書くほうも、読むほうもわずらわしい。それで、右の例では、はじめて出てきた筆者名・書名はちゃんと書き、あとはつぎのように略す。

9. Roget, *Thesaurus of English Words and Phrases*, p. 30.
10. Ibid.
11. Ibid., p. 42.

Ibid. というのは、「おなじ場所に」という意味のラテン語の省略で、ここでは「すぐ前の書物とおなじ書物」という意味になる。10. は、「すぐ前の書物のおなじページ」ということである。もし、この書物がもっとあとで、また引用されたときは、

18. Roget, op cit., p. 36.

と、op. cit.（または loc. cit.）を使う。Roget の「前にあげた書物」の意味である。

このほか、おもな略号にはつぎのようなものがある。（ ）内は複数形である。

c.「約……の頃」例、c. 1420「1420 年ごろ」
cf.「比較せよ」
chap.（chaps.）「章」
ed.（eds.）「編」「編者」
et al.「その他」
et seq.「以下」
infra.「下記」
fig.（figs.）「図」

f. (ff.)「ことがらが一ページ、または数ページにわたってつづいている」

l. (ll.)「行」例 ll. 3〜8.

p. (pp.)「ページ」例 pp. 101〜104.

(sic)「このとおりに（原文では書いてある）」

tr.「訳」「訳書」「訳者」

vol. (vols.)「巻」欧文で巻の数字をあらわすのには、ローマ数字Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを使う。

統計・表・図

レポートの資料として、統計が果す役わりは、たいへん大きい。自然科学の分野では、いうまでもない。社会科学の面でも、経済の動向、人口の推移、生産高の増減など、どれも統計がなくては調査にならないだろう。

芸術といえば、統計とはいちばん縁が遠そうだが、けっしてそんなことはない。たとえば、ある作家のある作品の制作年代が不明だったとする。たまたま、制作年代のわかっている、おなじ作家のいくつかの作品があった。もし、ほかによい資料がなければ、作品の不明な制作年代を推定するには、統計を使うよりしようがない。つまり、いろいろな作品のテーマ・文体・用語などを分析し、分析結果に統計的な操作をほどこして、いちばん強い可能性をひき出すこ

とになる。レントゲンや赤外線写真が発達するまでは、古美術品の鑑定でも、鑑定家はみんなおなじような統計をとっていたわけである。

小範囲の社会活動について実態調査をしたり、アンケートをとったりする以外には、レポーターが実際に数えたり、計ったりして、自分で統計を作るという機会はそれほどないかも知れない。たいていは、年表・地図・辞典・年鑑・政府統計などから、レデイ・メイドの統計を借りてくる場合が多いだろう。統計をのせた文献には、掲載した統計の見方がとうぜん書いてある。というと、できあいの統計を利用するのはいかにもかんたんなようだが、そうでもない。

統計

統計は、数学的産物である。ときには、かなり複雑な計算から生まれている。だから、統計がどういう計算の結果なのか、統計の数字の意味をちゃんとわきまえておく必要がある。

たとえば、知能指数を取り扱った統計を利用しようとする。そのときには、まず「知能指数」の意味をしっかり知らなければならない。そのうえで、どういう対象から出た統計で、どれくらいの信頼度があり、どういう調査に応用できるか、などについて十分知っておくことがたいせつである。さもないと、生兵法は大ケガのもと、ということになりかねない。

レポーターが自分で統計を作ろうとして、実態調査やアンケートを試みるときのことを考えてみよう。レポーターが自分でじかに見聞したものを資料にする実態調査には、それほどの問

題はない。が、アンケートはどうだろう？
　あることがらについての知識を、広くちらばった、あるいは遠いあちこちの地域から集めようというときには、アンケートはたいへん能率的な方法である。しかし、実際には、アンケート用紙を受けとっても、回答するのは半分以下というのがふつうである。また、回答そのものの信頼度も、そう高いものではない。だから、アンケートは、よほど大がかりにやらなければ意味がなくなる。初心のレポーターは、アンケート方式はとらないほうが無事だろう。

表・図　統計の結果は、数表やグラフにまとめる。数表やグラフにすれば、統計結果がずっと簡単ではっきりしたものになる。よくできた数表やグラフなら、読者は、一目でかなりやっかいな問題の分析ができる。〝百読は一見にしかず〟という利点がある。
　まず、数表。数表は数値を表にしたものだ、と言えば、それ以上説明しなくてもすみそうである。新聞の株式欄にのっている株価表も数表だし、受験雑誌がのせる大学志願者・受験者・合格者・競争率などという数表を、ウンザリしながら眺めたみなさんも多いだろう。
　数値を図にしたものがグラフである。グラフにはいろいろな種類がある。棒グラフ・線グラフ・扇形グラフ・画グラフなどなど。棒グラフは、棒の長さのくらべっこ。線グラフは、病気のときの体温表のように、時間の経過とともに数値が変わることがらに使う。扇形グラフは、円を全体と考えて、数値の比率に従って分割、数値の割合を面積比であらわす。画グラフは、

人口の大小を人間の形の大小で示すように、数値の比率を画の面積比であらわす。どのグラフも、みなさんが高校までの勉強でとっくにごぞんじだろう。

ついでながら、「表」(table) というときは、数表に限るが、「図」(figure, fig.) というときは、グラフだけでなく、絵・地図・写真なども含めるのがふつう、ということも復習しておこう。

ところで、統計結果は文献から借りるにしても、表や図は自分で作るか、作りなおすかして使うことが多い。それで、表・図の作り方・使い方について、一、二リハーサルをしておきたい。

1. 表のナンバーはⅠ・Ⅱ・Ⅲとローマ数字、図のナンバーには1・2・3とアラビア数字を使い、それぞれくべつする。

2. 表・図には、内容を正確にあらわす題名をつける。題名をどの位置につけるかは自由だが、ふつうは表・図の上か下。欧文の題名は、ぜんぶ大文字にする。

3. 引用した表・図は、出典を明記すること。出典は、題名とまぎらわしくならない位置に書くようにしたい。

4. 表・図は、むろん正確でなければいけないが、視覚的な資料だから、きれいに見よく仕上げることもたいせつである。グラフで、どのグラフを使うかは、この点からも考えるほうがよい。

7　レポートの仕上げ

補　遺

「補遺」は、文字どおり、本文で書き残したことがらをおぎなうところである。が、本文のなかでうっかり書き忘れたことをまとめるというのでは、〃遺失物置場〃みたいなかっこうになる。また、本文でふれておけばおけるのに、わざわざ「補遺」に回すのも感心しない。本文にはどうしてもうまくおりこめず、そうかといって、それがないとレポートがなんだかものたりない。そういうものを「補遺」にまわす。

たとえば、ある町の交通事情を実態調査した。レポートの本文でも十分な報告はできたが、ある一日の交通状態を何枚かの写真にとってあれば、かなりよい参考になるだろう。本文のなかでは〃さし絵〃の役にしかならないかも知れない。しかし、あったほうが調査の〃実態〃ははっきりする。写真は「補遺」につけたらよい。

科学実験のレポートで、本文にはおさまりにくい、実験装置の説明や写真を「補遺」につけるのも意味がある。あまり有名でない作家のひとつの作品をとりあげたレポートで、作家の作

品目録を「補遺」で紹介するのも適切である。あるいは、「注」にすると説明が長くなりすぎるようなことがらも、「補遺」に向くだろう。レポートぜんたいから考えると、つぎに述べる「参考文献目録」よりも、「補遺」のほうが、本文と関係が深い。それで、ふつうは「補遺」「参考文献目録」という順序で「補遺」が前にくる。が、知識の分野によっては、あべこべにすることもあり、かならずしも一定していない。どちらにしても、読む人の参照に便利であればよい。

本文中の特定のことがらに「補遺」をつけたときには、やはりいちど「注」をつけ、「注」で「補遺」があることをことわっておかなければいけない。残りものをまとめた場所だからといって、「ホイ、こんなところに補遺があった」なんてことにはならないようにする。レポートの体裁が大げさになるのがいやなら、「補遺」ということばをわざわざ使わなくてもよい。本文や注とはちがう説明だ、ということさえわかれば、本文や注のあとに一行あけるか改行するかして、はっきりくべつして加えればよい。

参考文献目録

レポートを作るのに参考にした文献は、レポートの本文・注のつぎに、リストにまとめて書く。レポートに〝タネもしかけも〟ありません、という意味ばかりではない。かりに、レポー

トが公開される機会でもあれば、おなじテーマに関心をもつ人々の参考にもなる。
参考文献目録を作るときに、資料収集のときに作った「文献カード」が役に立つ。つまり、「文献カード」のなかから、実際に使った文献のカードだけを抜き出し、リストにまとめればよいのである。参考文献目録に書くことがらは、文献カードとおなじに、筆者名・書名・発行地・発行年月など。ここで、レポートにつかった文献の身元をはっきりさせるわけである。
目録に文献を並べる方法にもいろいろある。いちばん簡単な配列法は、筆者の姓を和書ならば五十音順、洋書ならばアルファベット順にならべる方法である。筆者や編者がわからない文献は、書名を五十音順・アルファベット順のなかに組み入れる。たいへん機械的なならべかただが、ふつうの索引にいちばん近い、かんたんで有効な配列法である。
文献を発行順にならべる方法もある。文献を歴史的に考えるようなレポートでは、適切な配列法だろう。しかし、文献があまりたくさんになると、別に索引がほしくなる。
このほか、文献を種類や性質にもとずいて分類し、そのあとで配列するというならべ方もある。
たとえば、いろいろな国の文献があるときは、国別に分類する。学校教育についての文献を小・中・高校・大学というような基準で分類する。原作と解説書、単行本と雑誌、著者のはっきりした文献とそうでないものとを分類する、などなど。そして、分類した文献を、まえにの

べた二つの配列法のどちらかに従ってならべる。
しかし、分類配列法には、図書分類そのものにつきまとう問題がたいてい起こってくる。というのは、文献が取り扱う分野はダブリがちで、小学校教育についての文献が中学校教育についてもかなりな解説をしていたら、その文献をどう分類したものか話がややこしくなる。だから、レポートによっては分類配列法にも意味があるが、文献があまり多いようなときは、避けたほうが無事である。
参考文献目録の見出しは「参考文献」でも「文献」でもよい。英語なら"Bibliography"となる。

推敲（すいこう）

書き終えたレポートは、かならず念を入れてなんどか読み返し、必要があればどんどん手を入れていく。これが推敲である。よく推敲したものと、そうでないものとでは、レポートの出来がずいぶんちがってくる。
〝画竜点睛〟ということばがある。竜を描いてから、目にヒトミを入れて仕上げる、ということである。推敲は、ちょうどレポートの〝点睛〟にあたる。目がない竜の絵も、推敲していないレポートも、どちらもまだほんとうに〝出来上がった〟とは言いきれない。

しかし、竜に目をかきいれるには、そのまえに、竜ぜんたいのポーズをしっかりと把握しておかなければならない。昇天する竜が下を見ていてはこまるし、水を飲む竜が上目づかいでもぐあいがわるい。画家は、ある程度の距離をおいて竜をながめ、目の入れ方を考えるだろう。

推敲でもおなじこと。まず、レポートとの距離をとらなければいけない。そのために、一日でも二日でも、あるいは一週間でも、書いたレポートは机のひきだしにでもしまっておく。逆に、書いたレポートをすぐ推敲したりすると、こまかな点はともかく、レポートの構成上のミスが見つかりにくい。〝推敲は忘れたころにやってみる〟。

まず、レポートを通読してみる。はじめに考えたアウトラインとおなじか、またはそれ以上に、それぞれのパートがうまくつりあい、全体としてしっかりまとまっているかどうか。すじがちゃんと通っているかどうか、引用・注などの扱い方が、まえにお話した原則をはずれていないかどうか。レポーター自身がしんらつな批評家になったつもりで、自分のレポートのアラさがしをする。

文章も検討してみる。ソバとおなじで、長すぎても短かすぎてもおいしくない。ツルツルと一息にのみこめる長さが標準になる。長すぎたら分け、短かすぎたらつなぎあわせて、読みよくわかりやすい文章に仕立てよう。

句読点もバカにならない。「カネオクレタノム」が、句読点の打ち方ひとつで、意味がまる

で変わってしまうのも、ただの笑い話ではない。句読点の打ちすぎや省略で、文章の内容がボヤけたり、まちがいやすくなっていないか、調べておきたい。

清書のつもりで書いたレポートでも、読みなおしてみると、また手を入れたいところがあちこちに出てくるかもわからない。そのときは、また手を加える。レポートをきれいに書くこともたいせつだが、正確に書くことのほうが、ずっとたいせつである。

掃除をして顔を洗い、手を洗った。そのあとで、もういちど見回したら、意外なところにゴミがあった。せっかく洗った顔や手を惜しんで、ゴミにほおかむりをしていては、衛生にわるい。もういちどその場所を掃除しなおすよりしかたがなかろう。顔や手がまた汚れたら、また洗うつもりでいればよい。とにかく、レポートのミスや欠点をなおすことをおっくうがらないようにしたい。

ノンブル・とじこみ

レポートを書くこと自体は、以上で終った。あとは、ノンブル（ページ・枚数番号）を打ち、とじて、形をととのえればよい。

ノンブル

ノンブルは、ノンブルの場所がきまっている原稿用紙なら、その欄に打つ。レポート用紙、タイプ用紙を使った横書きレポートなら、用紙の下端のまんなかに打てば

見やすいだろう。

もちろん、レポートを書きながら、一枚ごと一ページごとに、ノンブルはいちおうつけていかなければならない。が、レポートは推敲が終るまでは未完成である。推敲するまえのノンブルは、かりのノンブルだと考えて、最終的なノンブルは推敲しながらつけるくらいでよい。

ノンブルは、レポートを一貫した順序数字でなければいけない。本文第一ページからはじまって、注・補遺・参考文献まで、通し番号で打つのがルールである。

ノンブルを打ったあとで、追加原稿を途中にはさみこむ必要が起きることもあるだろう。そのときは、三十ページのつぎに追加する原稿に、三十—一、三十—二のようにノンブルをつける。そして、三十ページのノンブルのわきに、赤インクで「二枚追加」と書いておく。

とじこみ

Ａ４判四百字詰の原稿用紙にタテ書きにしたレポートならば、まんなかから二つ折りにして二ページずつに数え、右側をとじるのがふつう。横書きレポートなら、上側をとじるほうがよい。二、三十枚のレポートであれば、ホッチキスでとめるのが簡便だろう。とれやすいクリップ、用紙がずれやすいひもとじは、やめたほうがよい。百枚をこすレポートをきれいにとじるのは、しろうとではムリ。大部のものは、製本屋に頼むほうがよかろう。

レポートの表紙には、すこし厚手の紙を使うのが望ましいが、とくに指定がなければ、レポートのなかみとおなじ紙を一枚表紙にあてればよい。表紙には、レポートの題名・提出年月

日・レポーター氏名など、必要なことがらを明記する。

8　レポートの例

学生の「レポートの書き方」については、これで要点はつくしたつもりだが、しめくくりに、標準例をあげておこう。四百字詰原稿用紙で二十枚足らずの短いレポートだが、テーマも一般的だし、レポートらしいレポートといえるだろう。

A・ファーサリ日本写真帖

『ファーサリ日本写真帖』というのは、A・ファーサリ商会発行の四冊のアルバムに私がつけた仮題である。

四冊のアルバムは、どれも黒ウルシの地に金蒔絵をほどこした、りっぱな装丁のもので、ひろげると、白い厚紙の両面に、一見して明治のものと思われる日本の風景写真が一枚ずつ張りつけてある。写真はどれも着色してあるが、色はだいぶくすんでいる。

私にはどれもこれもめずらしい写真だったが、とくに宿場風景に興味をひかれた。

たとえば、中山道の追分宿、脇本陣油屋の写真がある。古い宿場などによく見かける格子造りの構えに

大きな掛看板をかけ、人力車や馬車が引き寄せてある。とりわけ目立つのは、二階の軒にも階下の軒にも、講社の旗がびっしりとつながってたれているようすである。旗は、信仰登山の行者団体が宿泊したことを示すもので、あとから来るおなじ講社の連中に宿を推薦する目印である。赤・青・白、いろんな色の旗にそれぞれの講社のなまえが書いてある。行者の旅姿は、今日の中山道ではほとんど見当らなくなっているので、講社の旗の飾られた宿屋の光景も、まったく昔のものである。

東海道でおもしろいのは、元箱根の茶店だ。道の両側にひしひしとならんだ茶店は、そろってそまつな縁台を一つずつ、店の前につき出している。どの店にも大きな看板がかけてあり、どれにもよく似た肉太の大きな平仮名で「めし八りん」と書いてある。あるいは、当時の〝組合協定価格〟といったものか。

宿場風景のほかに、全国の有名な神社・仏閣・名勝古蹟があり、田園風景・街道の雲助・物売り・花見の人出・遊女・婦人の居室・結髪・いれずみ・武者装束などもある。

写真帖は、こういう写真がぜんぶで二百枚あるのを五十枚ずつにわけて、四冊に仕立てている。風景はほとんど日本全国にわたっているので、これだけ変化と枚数とがあるものを一時に撮りあげたとは思えない。つまり、写されたもののあいだには、多少の年月のずれがあると考えられる。また、風景写真はほとんど実写だが、人物が中心になると、はっきりと作為の跡が見える例もある。駕籠（かご）にのった婦人を写したもので、遠景に富士を配した写真があるが、富士が絵であることはすぐわかる。たぶん、こういう写真は、昔から外国人の頭に植えつけられている日本と日本人とのイメージに迎合しようとする、営業上の配慮から生まれたものだろう。現に、今年八月十六日の朝日新聞によると、これに似た日本紹介の写真を教

科書に使っている国が、ヨーロッパにはいまでもあるという。

写真は、まえに述べたとおり着色してあり、写真の大きさは約21×27cm（写真帖の外形は32×40cm）、約19×24cm（外形は29×35cm）の二種類で、大小二冊ずつある。小型の方は、それぞれから抜き出して組合わせた写真を縮写して表題紙にし、それに A. Farsari とだけ名前を入れてある。大型の方は表題紙がなく、かわりに一枚の薄紙がはさんである。薄紙には薄墨の群竹の絵と、それに、中央やや右寄りに三行に縦書きした「横浜海岸通拾六番地／ファーサリ商会／写真店」、その下に横組みで A. Farsari & Co., Photographers, Painters, Surveyors, Publishers & Commission Agents. /no. 16 Bund, Yokohama, Japan. と日・英両語での発行所の住所・名称が、それぞれ印刷してある。

写真帖の発行主A・ファーサリと当時の横浜の写真業とについては、まとまった文献が見つからなかった。しかし、この写真帖に関心をもっている在京の知日家 Don Brown 氏を知り、同氏に照会したところ、たいへん親切で参考になる返事をいただいた。

氏によると、ファーサリは名前から考えてイタリア人らしい。もっとも、そう断定する証拠があるわけではない。明治初期には、多数の外国人が横浜に来住、日本の風俗や景観を写して有名になった。いちばん早く名をあげたのは、一八六一年に来日した Felix Beato というギリシア人である。つぎに有名になった人物は Baron Stillfried で、ドイツ人である。

ファーサリが来日した時期ははっきりしないが、「一八八四年よりは前である」。というのは、一八八四年に出版された Murray 編の *Hand Book For Japan* に、旅行用の地図・案内書の横浜での専門店として

「本町通り（Honchō-dōri）の Sargent & Farsari 商会」という店名がのっているからである。

そして、おなじマレーの一八九九年版になると、「極東における最高の写真室」として、グランド・ホテルから徒歩三分、Bluff (Creekside) 一八四番地の A. Farsari & Co.」という広告がのっている。その広告には、A・ファーサリ商会は「日本の衣裳をつけた人物写真・写真引伸ばし・蒔絵の色付日本写真アルバム・色付幻燈写真・額縁・素人写真家の作品など」を扱う、と書いてある。

さらに、それから一四年後の一九一三年版のおなじマレーの *Hand Book* によると、ファーサリ商会の広告に、開店は一八八五年だと書いてある。また、その広告では、A. Farsari Co. という以前の店名が Farsari & Co. に変わっている。住所も Waterstreet 三二番館になっている。それ以後、関東大震災が起こった一九二三年まで、商会は営業を続けていたらしい。同年以後の *Japan Directory* には、ファーサリのなまえがない。また、ファーサリ自身が一九二三年まで横浜にいたかどうかはわからない。生死もはっきりしない。商会のなまえが変わったところには死んでいて、商会名だけが後継者に使われていたのかも知れない。

ブラウン氏は、主としてマレーの *Hand Book* を資料に、一八八四年から一九二三年までのファーサリ写真商会の歴史をだいたい以上のように教えてくださった。

ブラウン氏の手紙にある *Japan Directory* という書物は、調べてみると、日本各地の居留地に住む外人の名簿だった。居留地の番地の順に居住者のなまえをあげ、職業が書いてある。外人の編集で年刊の書物だが、類書は同書の創刊前からいくつもあったらしい。

ジャパン・ガゼット社の *Yokohama Directory*、ジャパン・ヘラルド社の *Japan Herald Directory* がそれぞれ発行されていたほかに、日本人が編集したらしい *Yokohama City Directory*、『日本絵入商人録』というのもあった。横浜以外でも、函館・新潟・東京・兵庫（神戸）・長崎など、居留地ごとに土地土地の Directory が出ていた。その後、一八八〇年、ジャパン・ガゼット社が、これら各地の Directory をひとつにまとめて、*Japan Directory* を刊行するようになった。どの Directory にしても、もともとは年刊居留地人名簿だが、記事や広告やを年度別にくらべてみると、当時の居留地の人々の動きがかなりわかり、なかなか有益な資料のように思われる。

ブラウン氏はマレーの *Hand Book* によって、ファーサリの来日を一八八四年以前と考えた。たしかに、そのとおりだった。*Japan Directory* の前身のひとつである、ジャパン・ヘラルド社発行の *Japan Herald Directory* を見ると、一八七九年版のものに、A・ファーサリの名前がはじめて現れる。そのころから、彼はE・A・サージェントと合名で文房具商を営業している。店は居留地六〇番館にあり、ファーサリ自身の私宅は六八番館だった。

サージェントという人物は、それより三年前のおなじ *Japan Herald Directory* では、五九番館のタバコ輸入商兼外国新聞取次店のケリー商会で働いていた。一八七七・七八の二年間の同書は見つからないので、そのあいだの彼の動静はわからないが、とにかくサージェントは七九年までにファーサリを共同経営者として自分で事業に乗り出した。

一八八〇年の *Japan Directory* 創刊号の記事によると、二人の店は八〇番館に移り、書籍・文房具を売

っている。が、同書巻末の広告では、ほかに新聞・タバコを扱うほか、印刷・製本の仕事の取り次ぎもしている。

Japan Directory を追っていくと、一八八三年、サージェントは二八番館の時計商会に入る。それでも八三・八四の二年は、ブラウン氏がマレーの *Hand Book* で見たとおりに、二人の共同経営はつづいている。それが八五年になると、サージェントはファーサリとの共同事業をやめてしまい、二人の商会はファーサリひとりのものになる。

が、ちょうどそのころ、ブラウン氏の手紙にもあるドイツ人の写真師シュティルフリート経営の写真館のあとが空いた。ファーサリは、シュティルフリートの事業をつぎ、おなじ場所で写真店を開くことになる。一八八六年の *Japan Directory* には、ファーサリ写真商会の名乗りをあげる大きな広告が出た。和訳すると、つぎのようになる。

「A・ファーサリ商会。日本唯一の外人写真スタジオ。日本の風俗・景観を写した写真ストックは、最上・最大を誇る。住所・居留地十七番館」

もっとも、これは誇大広告で、おなじ *Japan Directory* によると、ファーサリ商会の隣りの一六番館も、前にシュティルフリートの助手をしていた外人が経営する写真館である。

写真の技術がめずらしかった当時としては、写真の需要はかなりのものだったにちがいない。ファーサリの新商売も、まずは成功だったと考えられる。そのせいかどうか、一八八七年の *Japan Directory* では、彼は結婚し、索引にもファーサリ夫人の名前が出ている。

Japan Directory でその後のファーサリ商会を調べると、一八八八年には、海岸通り一六番地に引っ越している。一八九八年になると、こんどは山手一八四番地に移転する。そして、九八年の *Directory* では、経営者ファーサリは「不在」（absent）と書いてある。一八九九年、一九〇〇年も「不在」である。ファーサリは帰国したか、長い旅行に出ていたのかしたのだろう。

一九〇一年から一九〇三年まで、ファーサリはふたたび経営者の地位に戻っている。けれど、〇四年になると、商会は三二番館に移り、フカガワという日本人が商会主になり、ファーサリの名前は商会から消える。以後、ファーサリは二度と経営陣に復帰していない。事業をやめたのはたしかだが、帰国したのか死んだのかは、ブラウン氏が言うとおりわからない。ただし、写真館そのものは、あいかわらず「ファーサリ商会」という看板をかけ、フカガワの経営で震災までつづいている。

以上の記録からみると、『ファーサリ日本写真帖』は、発行所の住所が「海岸通拾六番館」とあるところから、一八八八年から一八九八年までの十年間に作られたものと推定できる。

しかし、『写真帖』に収録された写真が、おなじ十年間に写されたものかどうかは疑問である。ファーサリの経歴を見ると、彼は根っからの写真師ではないようだし、写真技術をどれほど知っていたかも問題である。また、一八八六年、開業時の広告を見ると、シュティルフリート商会が写した作品をかなり譲り受けてもいたらしい。従って、二百枚の写真のうち、ファーサリ商会製のものがどれくらいあり、ほかの写真店製のものをどれくらい利用しているかはわからない。
が、写真のかなり多くは、日本人写真師の手になるもののように思われる。

というのは、当時の日本には、すでに相当数の日本人写真家がいた。『写真の今昔』にのっている一八七六年の「写真師番付」によると、そのころの東京には少なくとも一五〇人以上の写真師がいた。また、一八八一年の『横浜商人録』には、下岡蓮杖の弟子、臼井秀三郎が経営する写真館の大きな広告がのっている。そして、記事には、臼井のほか八人の自営写真師の名前が出ている シュティルフリート商会が一八八一年の *Japan Directory* に見返し全面広告をのせたとき、同商会は「日本のどんな写真屋とも関係がない」とことわり書きをつけた。これも、考えようでは、当時の横浜の日本人写真師の実力がなかなかのものであったことを暗示しているようだ。

一八八五年の *Japan Directory* を見ると、ファーサリ商会の隣りの写真商会では、ウスイという日本人写真師を主任技師にしていた。翌年のファーサリ商会の開業広告にも、ミズノ以下十五人の日本人写真技師の名前がならんでいる。外人の写真店に働いていた日本人写真技師も、少なくなかったのであろう。

そして、一九〇四年、ファーサリ商会の経営者はフカガワになり、商会の二十五人の全従業員は、のこらず日本人になった。

一九〇四年といえば、明治三十七年にあたる。日清戦争と日露戦争と、二つの戦勝にまたがる時期で、日本の国威が急上昇をはじめたころである。横浜居留地のひとつの外人写真商会の経営者が、外国人のファーサリから日本人のフカガワに交替したのも、ただの偶然ではなさそうである。

実際、こういう移り変わりは、*Japan Directory* の広告にもあらわれている。一八八〇年のころには、ほとんどが外人小企業の広告である。シュティルフリート商会が、いちばん広告効果の高い見返しを独占

したのは、そのよい例である。一八八五年の広告欄でも、外人企業の広告は日本人の広告の倍である。しかし、一九〇四年になると、この比率が逆になる。

その上、海運・貿易・銀行など、日本人広告主の企業が急激に大規模になっていくのがわかる。似たような環境で、もっと多くの資料からこまかな統計をとることができれば、後進国の開港と企業とについて、いってみれば「歴史の形態学」のようなものを考えることができるかも知れない。

注および参考文献は省略させていただく。

9　社員レポートの書き方

経営にプラスするレポート

学校を卒業して、実社会に出たからといっても、レポートとの縁がすっかり切れるとは限らない。みなさんが就職する企業によっては、いろいろな問題について社員にレポート提出を求めるところが少なくない。むろん、この場合は、勤務先の上長がレポートのテーマを指定する。典型的なテーマは、就職先の企業と関係がある各種マーケッティングの実態や今後の予想

など、であろう。
社員のレポートも学生のレポートも、レポートとしての前提には変わりがない。どちらも、広く深く知識を求め、集まった調査結果をスジの通った文章で報告するのがポイントである。が、目的と扱う資料とがちがう。
というのは、学生のレポートでは、調査報告の正しい方法を身につけることがねらいだった。しかし、社員のレポートは、学生レポートの復習ではない。社員は、学生時代に調査報告の正しい作り方をマスターした、レポートの方法論の〝卒業生〟でもなければならない。企業は、社員のレポートに、方法論の再確認以上のものを期待するだろう。
企業の直接の目的は利益の追求と企業の発展とである。とすれば、企業が社員のレポートに望むものは、企業の経営にプラスする知識の提供だろう。企業が経営方針を決定する際に、社員のレポートが貴重な資料として検討されることは、十分に考えられる。学生のレポートの出来不出来は、さしあたりレポーター自身の損得ですむ。しかし、社員のレポートは、レポーター自身の得失をこえて、企業の将来と企業に関係する多くの人々の生活とに響くかも知れない。
また、現実の損得のソロバンから生まれた意見などというものは、学生のレポートでは、盲腸ほどの値打ちもないしろものである。しかし、企業の盛衰につながるレポートでは、社員としてのレポーターは、取り扱ったことがらについての現実的な判断を求められることが多い。

もちろん、どちらのレポートでも、レポーターの判断や意見は、積み上げた事実からムリなく生まれるものでなければいけない。が、二つのレポートのレポーターの考察は、はっきりとちがう次元でそれぞれおこなわれる。

レポートの目的がちがえば、レポートの資料もちがってくる。社員のレポートは、たいていが実態調査である。レポートのテーマについての予備知識は、文献から得ることもあるだろう。しかし、あとはレポーターが足を使って、なまの資料を自分で集めてまわらなければならない。

〝何のために〟〝どんな資料を集めるか〟社員のレポートを書くレポーターは、この二点に慎重に心をくばって、レポートに取り組むようにしたい。企業体の社員だけでなく、官庁・公共団体の関係者がレポートを書く場合にも、社員のレポートに準じて〝何のために〟〝どんな資料を集めるか〟を考えてかかる必要があろう。

社員レポートの例

社員のレポートも、業種により問題によりさまざまだが、つぎに一例をあげておこう。

ある書籍販売会社が、ある地区に支店を開設するため、社員を派遣して調査させた結果のレポートだとでも考えていただく。

平和区での空店舗についての報告

調査期日・昭和四十一年六月一―三日

当社が支店開設を計画している平和区には、現在三軒の貸店舗が空いている。三店舗ともブロック耐火建築で、賃貸価格はどれも当社の予算以内である。

A店は東町一番地にあり、東町・西町の交叉点に位置する。二階建て建築の一階全部を占め、北向きで間口六メートル、奥行十二メートル、高さ三メートル。通りに面して、幅三メートル、高さ一・五メートルの板ガラスのウインドウがある。正面入口のほか、裏側に出入口があり、店舗持主所有の空地に通じている。空地には、自動車六台が駐車できる。当地区での路上駐車は許可されていない。天井と壁とは薄紫色だが、ところどころにシミがある。床は板ばり、店舗所有者のA氏は二階に住み、店舗改装の意志はないが、当方で費用を負担して改装する分には反対していない。賃貸は一年契約で、賃貸価格は月額十万円。水道は無料だが、電気・ガス代は当方負担。暖冷房設備はない。

店舗は東町公団アパートに近く、アパート居住者は、主として中小企業従業員。A氏および区当局者の話では、同町は今後住宅地として開発される予定だが、当社の支店開業には区当局および同町住民からの反対はあるまい、とのことだった。至近の同業者とは、約一キロの距離がある。

B店は南町二番地にあり、四階建て南町ビルの一階。一階には、別業種の四店、薬局・写真機商・美容院・喫茶店が開業中である。店は東向きで、間口四メートル、奥行十メートル、高さ三メートル。正面に

幅二メートル、高さ一・五メートルの板ガラスのウインドウがある。出入口は、南通りに面する正面入口のほか、裏の店舗専用廊下に通じるものがある。ビルには店舗専用駐車場がない。ただし、南通りは両側とも時間駐車ができる。

店は、ビル所有者によって現在改装中である。壁はクリーム色、天井はタイル張りで白。床には、茶色のラバー・タイルが最近敷かれた。九月一日までに営業可能の見通しである。

ビル支配人B氏によれば、賃貸は二カ年契約で賃貸料は月額九万円。水道料・暖房費以外の光熱費は当方負担。冬季営業時間中は暖房が通るが、冷房装置はない。

B店は、南町オフィス街の中心にあり、付近には、四・五家族程度を収容する小アパートが多い。アパートの居住者は、学校・病院のほか公共団体に勤務する知的職業人が過半数を占める。現在、同町内に同業種三軒が営業中で、どれもかなりな収益をあげている模様である。

C店は、北町三番地にあり、新築の二階建て北町ビル一階にある。同ビルは、敷地の関係で道路に対してタテ長に設計され、一階を六分して貸店舗、二階は貸事務所にあてている。一階の五店舗は、入口から順に理髪店・薬局・靴店・果物店・雑貨商で、C店は道路からいちばん奥にあたる。店は広さ六メートル平方、高さ二・五メートル、ウインドウはない。出入口は、ビル内廊下につながる正面入口と、ビル裏手に通じる専用出入口とがある。ビル裏手徒歩二分の距離に、同ビル駐車場がある。五十台の収容が可能で、ビル内業者および客が共用している。

C店の壁は薄ネズミ色、天井はタイル張り、床は黒いゴム・タイルになっている。

ビル社長C氏の話では、契約は一年更新で、賃貸料は月額八万円。営業時間中の暖冷房費は無料だが、他の水道料・光熱費は当方負担とのことである。

C店付近は居住人口少なく、現在建設中の公団北町アパートも独身者用のものである。付近の住民の多くは、同ビルから約五キロ離れた平和電鉄平和駅に勤務している。同ビルから平和駅までのあいだ、また同ビルから半径三キロ以内の地区には、同業者は一軒もない。

以上の三店を比較すると、A店は床面積が広く駐車の便があり、立地条件もさほど悪くない。が、賃貸料がやや高く、店内改装の費用も無視できない。

B店は外観と出入の便とにすぐれている。専用駐車場がないなどの欠点はあるが、契約および立地条件はかなりよい。

C店は暖冷房装置と駐車の便とがあり、賃貸料も安い。が、ビル自体およびビル内での同店の立地条件に難がある。

私見では、諸条件を総合した場合、三店の、当社支店としての適合性には、つぎのような段階ができると考える。

一、B店。二、A店。三、C店。

なお、参考までに、平和地区内各店附近の略図、各店店内見取図、および外観写真をつぎに加える。

略図など（省略）。

第二章　論文の書き方

1　論文とは何か

論文の種類

ひとくちに論文といっても、いろいろである。大学や研究機関が刊行する雑誌に発表する研究は、論文のかたちをとることが多いし、企業や公共団体が懸賞で募集する意見にも、論文形式で書くという条件がつくのがふつうである。

が、学生が書く論文のなかでは、三つの論文がいちばんおもだったものになる。ひとつは、学部によって卒業資格の一部となる学部卒業論文、つまり「学士論文」いわゆる〝卒論〟である。つぎは、大学院修士コースを終えて、修士の学位をとるために作成する「修士論文」。そ

のもう一段上に、大学院博士コースを経て、博士号を得るために書く「博士論文」がある。

英語では、学士・修士の二つの論文は thesis と呼び、博士論文は前二者とおなじに thesis ということもあれば、disertation と別の名でくべつするときもある。

学士論文・修士論文・博士論文が、研究論文としての共通性をもつことはいうまでもない。が、同時に、〝名は体をあらわす〟で、どれにもそれぞれほかの論文とはちがう性質がある。

早い話が、学士論文の作製期間はたいてい一年以内である。修士論文は二年以内に書き上げるのがたてまえになっている。そして、博士論文は、数年以上を費して作成するのがふつうである。

作成期間の長短が、そのまま論文自体の長短につながるとはいえないにせよ、それぞれの論文内容の深浅とは関係がある。つまり、学士論文では、研究の独創性はほかの二つの論文ほど強くは要求されない。ひらたくいえば、論者はまだ〝学生〟であって、〝学者〟でなくてもいい。しかし、修士論文は、学部卒業後の個人研究の出発点であり、〝学者〟としての能力を判定される第一の関門だといえる。春秋の筆法で、博士論文は、個人研究のいちおうの到達点になる。博士論文が審査をパスし、博士号を受けるということは、〝学者〟としての能力が保証され、その研究分野での専門家として公認された、という意味である。

日本では、アマチュアの囲碁初段の人口よりも、医学博士の数の方が多いという話だが、そ

れでもなんでも、学位の考え方はもともとは右のようなことである。

学士論文、修士論文、博士論文には、それぞれのあいだに以上のようなちがいがある。けれども、この三者間の相違よりは、学士論文とレポートとのちがいのほうがずっと大きい。三つの論文がさしずめ兄弟の関係にあるとすれば、末弟の学士論文、〝卒論〟のこどもが、ちょうどレポートということになる。

論文とレポート

大学四年になって卒論を書く学生は、そのまえの三年間に、たいていは何度かレポートを提出しているだろう。何回かレポートを書いた経験から、レポートを引き伸ばせば論文になる、そう早合点をする学生が少なくない。が、いくら図体が大きくてもこどもはこども、どんなにチビでも親は親、である。オタマジャクシがカエルでないように、レポートと論文とはちがう。

第一に、レポートは〝調査報告書〟のことである。しかし、論文は〝調査・論考の報告書〟でなければいけない。レポートに、レポーターの考えが入ってはダメというのではない。ムリのない推理や判断は、レポートでも多ければ多いほどよい。しかし、それがなくても、レポートは成立する。論文では、そうはいかない。論者独自の見解や態度がはっきりしていない論文

は、足のないオバケ論文だと言われてもしかたがない。
たとえば、論文のテーマは、ほとんど論者自身が選定する。教師がテーマを指定したり暗示したりする場合があれば、それまで十分に研究されていない問題に限られる。論者自身がテーマの選択権をほぼ完全にもつということは、そのまま、論文では論者自身の考えが大きな比重を占めるということである。
また、それほど独自な研究の成果を、レポートのように、論者自身と教師と何人かの友人とだけに読ませておわりにするのはもったいない。おなじテーマ、似たような問題に関心をもつすべての人々に研究を公開し、学問・文化の進展にいっそう役立てるのがほんとうである。
レポートは教師の検閲がすむと、レポーターに返えされるか、教師の手元で処分されるかして、二度と日の目を見る機会がめったにない。しかし、論文は保管・公表される場合が多い。
提出された論文は、大学なり学部なりの提出先に長く保管されるのがふつうである。ときには、ちゃんと製本して、図書館の蔵書に加えられる。いっぽう、大学・学部が発行する紀要・研究雑誌の類で、論文の題目ないし要旨が公開される。〝見たい人、読みたい方にはご覧にいれます〟そういう意志表示である。博士論文ともなると、たいていは本格的な書物として出版する条件がともなう。〝レポートは短く、論文は長し〟である。
いつまでも保管され、いつでも公開される論文は、いってみれば、論者の研究能力の消すこ

とのできない足跡である。論者が、将来も引き続いて研究者としての生活を送る人なら、古い失敗を新しい成功で埋め合わせることもできるだろう。卒論のできは悪かったが修士論文はなかなかよい、あるいは、卒論・修士論文は感心しないが、博士論文は堂々たるものだ――論者には、雪辱のチャンスがいろいろとある。

が、一生に一度しか論文を書く機会がない学生も少なくない。いや、大多数の学生は、むしろそういう人だろう。

将来、学者になるつもりがない人には、論文のできなんてどうでもいいことかも知れない。研究能力をどう判定されようが、痛くもかゆくもないかも知れない。要するに、卒業できればそれでオーケー。もし、そう思うお方がいたら、レポートの話のはじめに書いた〝レポートの意義〟を再考してほしい。

レポートで正しい調査能力を養うことは、あらゆる知識吸収にあたっての正しい態度を身につけることにつながる。学生時代の成績などというケチな問題ではおわらない。レポーターの家庭人・社会人としての幸福に結びつく、といってもひとつもオーバーな表現ではない。

論文の意義

論文には、さらに〝考える〟要素が加わってくる。正しい知識を獲得する方法を身につけた

上で、その知識にもとずいて自分の〝考え〟を発展させることが要求される。だとすれば、りっぱな論文は、学問や文化の発達に寄与する以上に、それ以前に、論者自身の人間としての成長に役立つはずである。論文で、自分の考えをスジを通して進めていく仕方を体得した人には、実生活でもムチャな考えはしようがない。ムチャな考えができなければ、ムチャな行動に走ることもないだろう。

すぐれた学者が尊敬されるのは、彼の深い学識のためばかりでなく、彼のりっぱな人格にもよることが多い。一見、えらい学者のようでありながら、人間的にくだらない人物は、〝学者〟ではなくて、ただの〝物知り〟にすぎない。

〝物知り〟は、知識を頭だけで取り扱う。けれど、ほんとうの〝学者〟とは、知識を人格化した人のことをいう。〝学者〟ということばを、〝インテリ〟と置きかえてみてもよい。ほんとうのインテリは、ムチャな考えやムチャな行動とは縁がない。ほんとうのインテリは、どんな問題でも、話し合いでスッキリと解決したいと考える。暴力に訴えようなどとは、思いつくはずもない。むろん、暴力がこわいのではない。論理のスジを乱し、たち切ることがいやなのである。むしろ、ほんとうのインテリは、暴力に対して論理をもって立ち向う強ささえもつだろう。

そういうインテリで構成した、おだやかな話し合いで営まれる家庭や社会が、みなさんの将

来の理想のなかに入ってはいないだろうか？　もし、入っているとしたら、その理想達成のためにも、論文に真剣に取り組んでいただきたい。

論文では、学問・文化の発展につながる独創性が重視される。しかし、その独創性を追求することで、論者自身の人間としての成長が促進される。一石二鳥か三鳥か、場合によっては、ひとつの論文で何羽もの鳥がいっぺんに落ちてくるかもわからない。

2　論文のテーマ

独創を生むテーマ

論文とレポートとは、親子ほどちがうとお話した。しかし〝親に似ぬ子は鬼っ子〟である。論文にもレポートにも、〝調査報告〟という共通の性格がある。テーマを小さく絞り、資料を精選収集し、ガッチリしたアウトラインを作り、スジの通ったわかりやすい文章で書く、ということは、論文でもレポートでもまったくおなじ作業である。

だから、これからお話する論文の書き方のなかで、レポートの場合とおなじに考えてよい問題は、いっさい省略させていただく。「あれ、この問題はどうなんだ？」という疑問が起きた

ら、そのことがらを扱っている、レポートの話の部分にあたっていただきたい。
まず、論文のテーマから取り上げていこう。テーマはできるだけ縮小したほうがよい、ということはレポートの場合とおなじである。が、レポートのテーマでは、レポーターの能力次第で、縮小する限界がきまった。
しかし、論文では、限界は客観的にきまってくる。ほかの人が考えたことを、おなじように考えただけでは、レポートにはなっても、論文としてはものたりない。ほかの人が考えたこと、言ったことを、もう一歩進んで考え、言うことが論文の独創性になる。だから、論文としての独創性が生まれるところを、テーマ限定のひとつの標準線と考えたらいい。
というと、テーマの選択範囲はかなりきゅうくつになりそうだが、そうでもない。シェイクスピアについての論文などというものは、古今東西、数えきれないほどたくさんある。それでも、シェイクスピアについての研究は、今後も無数に出てくるだろう。医学がいくら進歩しても、病気がなくならないのとおなじである。むしろ、医学が進めば進むほど、未知な病気が発見され、病気の数が増加するのが実際である。
知識の細分化・専門化が進むにつれて、ひとつの問題についても、いろいろな取り扱い方がどんどんふえる。これもレポートのテーマ選定で見たとおりのことである。論文のテーマを考えるときにも、あれこれと観点をずらしてみれば、ほかの人が試みたことのない新しい取り扱

い方が、ひとつの問題からたいていいくつかは出てくるだろう。
といっても、独創性を追うあまり、自分の能力を越えた深みにはまりこんでニッチもサッチもいかなくなってしまったり、問題の本質とはほどとおい小さなことがらの発見に、鼻をうごめかしてもつまらない。

独創のねらいすぎ たとえば、『ハムレット』を論文のテーマにとるとする。『ハムレット』の構成や展開についての研究、『ハムレット』の登場人物の性格分析、『ハムレット』の原話に関する考察……どれもこれも、たくさんの人のたくさんの研究があって、いまさら独創的な考察が入りこむすきはなさそうだ。考えあぐねて「現代イギリスにおける『ハムレット』上演について」。これなら、だいじょうぶ。〝現代〟と限定しておけば、〝過去〟の研究を出し抜く独自な論文になることは、たいこ判を押したみたいなものだ……。

このテーマでまとめた報告が、実態調査の〝レポート〟でなく、研究〝論文〟になるためには、つぎのような内容が必要だろう。

1. イギリスをはじめとする各国の『ハムレット』上演史への認識。
2. イギリス以外の各国の今日の『ハムレット』解釈と上演との実態。
3. 現代イギリス劇界での『ハムレット』解釈と上演との実態。
4. 将来において予測される、イギリスはじめ各国の『ハムレット』上演のありかた。

『ハムレット』研究に独創性を期するため、「現代の」「イギリス」とテーマを限定したことと自体は悪くない。しかし、「現代」は、過去と未来との認識の上に成立する。「イギリス」はほかのいろいろな国との相対関係に置かれて、はじめてイギリスとしての意味をもつ。

もちろん、〝過去〟の『ハムレット』上演史は文献で調べればすむだろう。が、文献としてまとまっていない〝現代〟の『ハムレット』上演の実態を知るためには、イギリスはじめ各国で上演される『ハムレット』を観劇して回わらなければならなくなる。

なまじ、論者が「現代の」「イギリス」に深入りし、論文にフレッシュな独自性を打ち出そうとガンばったばかりに、この論者の父親は退職金を食いつぶされることになりかねない。

また、『ハムレット』の芸術性をさしおいて、心理学プロパーの立場から『ハムレット』を分析したり、ナニ学的カニ学的に研究した『ハムレット』〝論文〟もないことはない。『ハムレット』のなかに〝青い〟がいくつあり、〝黄いろい〟〝赤い〟がいくつあるか、色彩学的に調べてみるのも、ひとつの研究方法であろう。だれも試みたことがない、独創的な研究への可能性を含む問題かもしれない。

が、『ハムレット』のなかの色彩をせっせとひろいだし、きちんと分類しただけでは、『『ハムレット』のなかの色彩』というレポートはできても、『『ハムレット』の色彩学的研究』という論文にはならない。『ハムレット』の本質は、詩劇である。詩劇を問題にする以上、詩劇全

体としての効果に、色彩がどう役立っているか、そこまで考えなければ、『ハムレット』についての「論文」とは呼べないだろう。

独創ということ

学生の論文を読むと、独創がほとんどない、レポートまがいの論文にちょくちょくお目にかかる。かと思うと、独創をねらいすぎて〝独走〟した論文も少なくない。しかし、独創とは何か? ここで、独創の問題をもういちど検討してみよう。

独創とは、ほかの人が考えたこと、言ったことを、もう一歩進んで考え、言うことだ、とお話した。が、「一歩進んで」ということは、なにも将棋の「歩兵」のように、ほかの人をのりこえのりこえ一直線に前進することだけを意味しない。「王将」のように、四方八方に一マスずつ動いても、敵を攻めている限り、「一歩進んで」という表現ができないことはない。

実際、あるテーマについて、これまでの総合的な学説にまさる独創的な意見を打ち出すには、たいへんな準備がいる。ガン征服についての研究論文は、いままでにもずいぶんたくさん発表されてきただろう。けれど、現在の段階では、どの研究論文も「ガンには早期療法がいちばん」という総合的な結論に落ちついている。結論がどれもおなじだからといって、これまでのガン治療の研究論文が、みんな独創性を欠いたヘッポコ論文だなどと考えたら、ガン研あた

りから、たいへんな苦情が来るだろう。

Aの研究員はAの研究方法をとった、B研究員はBの実験をおこなった。Aの研究方法とBの実験とが、それぞれガン研究でのはじめての試みであれば、結論はおなじでも、A・Bの論文には十分な独創性があることになる。

つまり、いちおう結論が出ている問題でも、とりあげ方では、けっこう独創的な論文のテーマになる。これまでの定説をひっくりかえそうと、ムキになったりする必要はない。これまでの定説が正しいかどうか、自分なりの方法でたしかめてみる——そういう態度でも、論文の独創性は保証される。

ひとつの問題について、Aはこう言い、Bはああ述べ、Cはそう考えた。A・B・Cの意見がまったくおなじでも、なおDという別の考えが成立しないかと疑うところに、独創がめばえる。A・B・Cの意見がそれぞれにちがえば、三者を検討するところに、独創が育つ。

「はたしてそのとおりか?」「別の考え方はないのか?」そういう疑問の余地があれば、いちおうの定説がある問題にも、独創の花が咲くスペースはまだ残っていることになる。論文のテーマをきめるときは、レポートの場合にならって、テーマを縮小しながら、そういう問題点が残るテーマをとりあげるようにしたらよい。

論文の題名

レポートの題名は、テーマと不即不離の関係にある限り、レポートの内容をはっきりあらわさなくてもかまわなかった。けれど、論文はレポートとはちがう。

レポートは、ある学年ないし学期の、クラス内部の報告書として処理される。しかし、論文は公表され、保管される。題名は、みなさんの名前とおなじようなものだ。家庭内でなら「太郎」「花子」で通用する。けれど、外出先で未知の人に出会ったときには「A大学の山野太郎」「B女子大の川原花子」ぐらいの紹介のしかた、されかたはするだろう。論文の題名でも、「何」についての「どういう種類」の論文か、内容と限界とは、ある程度明確にする必要がある。

論文の構成

できあがった論文の標準的な体裁は、つぎのようになる。

1. 表紙
2. 表題紙（タイトル・ページ）表題紙には、論文の題名・論者の氏名など、必要なことがらを明記する。
3. はしがき（序、まえがき）

4. 目次
5. 表のリスト
6. 図のリスト
7. 本文
8. 補遺
9. 参考文献目録
10. 裏表紙

むろん、場合によっては1と2とがいっしょになり、3・5・6・8が省略されることもあるだろう。

はしがき　たいていのレポートなら、「はしがき (Preface, Foreword)」はいらない。しかしかなり長い論文には、あったほうが好都合だろう。「はしがき」は、読者が論文を読むまえに、読者にもっていてもらいたい、テーマについての予備知識の提供所である。

他人に贈りものをするときに、包み紙のまま黙って差し出し、〃開けてビックリ玉手箱〃とすましていてもかまわないが、「中味はカンヅメでございます」「中味は果物でございます」とことわるほうがゆきとどいているだろう。おまけに、独創的な論文を見知らぬ他人が読むかもしれない。有名メーカーのラベルがないウイスキーを、第三者にふるまうようなものだろう。

「あまり知られてないウイスキーなんですがね。なかなか強くて、私にはグラスで二杯がせいぜいでした」こういう前口上を「はしがき」になおせば、さしずめ論文のテーマがもつ学問的な意味に触れ、自分が取り扱うことのできたテーマの範囲を読者に伝えることになろう。

「私の口には、ちょっとなじめないところがあって」と、論文中の未解決な点を正直に話すのもいい。「でも、すこし飲み慣れれば、ほんとの味がわかるようになりそうです」——継続研究をする価値があるテーマだと、示唆することもできるだろう。

そのほか、どういう動機でそのテーマをとりあげたかとか、論文作成にAさんB氏にとくに助言を受けたとか、個人的な問題でとりわけことわっておきたいことがらは、みんな「はしがき」にまとめてよい。

ついでながら、「はしがき」は論文の解説であって、論文の一部ではない。「はしがき」と「序論」(「序説」でもおなじ。Introduction)とは、はっきりとちがう。「はしがき」は水先案内船、「序論」は「はしがき」がひっぱる船のへさきである。「はしがき」と書くべき見出しを「序論」と書いたりすると、船のへさきだけをチョン切って、へさきがひとりで桟橋につかいたかっこうになる。

もちろん、「はしがき」は、なければいけないものではない。「はしがき」になりそうだが量的に少なすぎることがらは、むしろ本文のはじめの部分に送りこんでしまうほうがよい。ただ

し、そのときは、「はしがき」にあたる内容が、本論のスジにちゃんと収まるようでなければいけない。

本文の構成

論文の本文の構成を三分すると、序論・本論・結論になる。この名称をそのまま使って、三つの大きな見出しを作ってもいいが、かりに、章別区分をとるとすれば、第一章が序論にあたり、第二章以下最終章のまえまでが本論、最終章が結論になる。

第一章（序論）。論文では独創がたいせつである。けれども、独創が独断にならないためには、自分がとりあげた問題と直接間接に関係をもつ研究がこれまでどのくらいあったかについて、論者はかなりな知識をもっていなければいけない。第一章では、これをはっきりさせる。といっても、古今東西の研究目録をズラズラ並べ立ててもしかたがない。定説があれば定説を、定説がなければ代表的な学説を、いくつかかいつまんで述べればよい。

また、自分の論文が、まったく未開拓な分野での研究だとムリなく考えられるときは、気負わず卒直にそう書いておいてよい。ともかく、第一章は、テーマについてのこれまでの研究に対し、自分の論文がどういう意味をもつかを明確にする場所だと考える。

第二章から最終章のまえまで（本論）。第一章で、自分の研究の独創的な意味をはっきりとさせておいて、第二章から問題に切り込む。むろん、この部分が論文の主体である。それだけに、それぞれの章はそれぞれに明確な論点をもち、前後する章のあいだでしっかりと論理のバ

トン・タッチがおこなわれるよう、十分な配慮が必要である。
二章を読めば、しぜんに三章に移り、三章のあとには、ムリなく四章がくる。ハシゴを作りハシゴをのぼるようなものだ。ハシゴを据えた場所が第一章である。ハシゴがグラグラしないことをたしかめて、一章また一章と着実に横木をのぼっていく。横木を結ぶ縦のテーマはガッチリとにぎって放してはいけない。章のなかの節、節のなかの項にあたることがらについてもおなじ考え方ができるだろう。
最終章（結論）。ついに、ハシゴのてっぺんにのぼりついた。これまでの論理を総合して、ムリのない結論を出すことにしよう。自然科学のテーマならともかく、人文科学の問題では、はっきりした結論が出にくい場合もちょくちょくあろう。
が、「はて、それでいったいどうだというのだ？」論文の最後に、こんな疑問を読者に抱かせては、それまでの苦労が水の泡になってしまう。問題が未解決なら未解決でいい。ともかく自分の考察はこれで一段落した、と読者に告げるのが結論のエチケットである。
ひとつご注意願いたいのは、結論は〝むすび〟であって〝まとめ〟ではない。結論では、序論・本論から到達した結果だけを述べればすむ。序論・本論で述べたことがらをまたぞろ結論でムシ返したり、論文全体を要約して花道をにぎにぎしく飾ろうなどとはしないことだ。そうしなければどうにも結論が落ちつかない、というのであれば、それは序論・本論でのルースな

論理のせいだ、と考えていい。

なお、「はしがき」がない論文ならば、はっきり欠点と自認できることがらは、結論で卒直にそう述べておく。

要約

論文本文の「要約」は、卒論ではそれほど必要がない。しかし、修士・博士論文になると、たいていは論文にそえて「要約」を提出する。ふつうは、題名といっしょに公表して、論文の内容を簡潔に明示するためである。

論文を要約するコツは、文章の要約のときとひとつも変わらない。各章ごとに要約を作ってまとめればいい。ガッシリした論文ならば、いっぺんに序論・本論・結論(または、それにあたる章)の三つの要約を作り、それを総合すれば、そのまま論文全体の要約になるだろう。

3 論文の文章

文章を書く姿勢

論文の文章は、本質的には、レポートの文章とおなじでいい。しかし、論文とレポートとがちがうように、論文の文章だということで、とくべつに起こりやすい問題がある。

レポートのときとおなじように、論文の文章も、やはり論者の論文に対する姿勢からきまってくる。それを考えながら、論文の文章を検討してみよう。

謙虚と厳正

論文では独創がたいせつである。テーマを選定するときばかりでなく、論文のなかで取り扱うひとつひとつのことがらについても、できるだけ論者独自の考察をほどこすようにしたほうがよい。とうぜん、これまでのいろいろな人の意見を比較して、自分の考えを打ち出す機会が多くなる。

そうした場合、どれもこれもがもっともな説ならば問題はない。しかし、りっぱな学者の定評ある文献にも、案外なまちがいがあるかもわからない。それを見つけて、してやったりとこおどりし、おおげさな表現で批判したりはしないことだ。他人のエラーを摘発して得意になるのは、趣味としてもよくないし、だいいち、自分の論文にだってどんなエラーがあるかわかりはしない。

むろん、エラーを見逃せ、と言うのではない。自分の論文とは無関係なエラーなら、見逃してもかまわない。が、関係があるエラーなら、とうぜん訂正しておくべきだろう。ただし、訂正のしかたに問題がある。「これはペケ。こうでなきゃダメ」といったラフな調子では、スジのとおった訂正にはならない。なぜエラーが起きたのか、なぜ自説のほうが妥当なのか、その理由を確認して、はじめて訂正が可能になる。

そして、確固たる根拠にもとづいて、他人の説を自説で訂正することができたということは、それまでよりもいっそう強く、自説の妥当性が立証された、ということにほかならない。

また、論文が独創的な研究をめざす限り、論文で取り扱うことがらに関しては、論者の知識が多くの読者の知識を上回る場合も少なくあるまい。が、だからといって、一段高いところから「話してあげよう」「教えてあげよう」といった調子で書くのはやめたい。たくさん知るということは、知らないことがもっとたくさんあるということを知ることだ。「いっしょに問題を考えましょう」という態度のほうが、ずっとおだやかだし、ほんとうだろう。

慎重　独創が独断にならないためには、どこまでも〝考える〟ことを第一にして、〝信じる〟ことは二のつぎ、三のつぎに回す。宗教では信じれば救われるかもわからないが、論文では、〝信ずるものは〟かえって救われない。

なるほど、独創がたいせつな論文では、仮定よりも結末のほうが、推測よりも断定のほうが、比重は大きい。しかし、だからこそ、結末や断定にはなおのこと用心がたいせつである。「あきらかに」「もちろん」「疑いもなく」「当然のこととして」「あらゆる点から考えて」……話をトントンとはこんだり、結論にスルリと追い込んだりする場合には、どれもこれもたいへんつごうのいいことばである。しかし、なにが「あきらか」だか、「もちろん」だか、しっかりした脈絡もないのにこういうことばを愛用すると、論文は自滅する。

「あきらかに」と書いた、「もちろん」ということばを使った――そういうときは、はたしてどこからもクレームは来ないか、再思三考してほしい。第三者の反撥を予想して、かならず自問自答するくらいの慎重さがあってもいい。

最大級のことば、あるいは、かなり限定的な意味のことばを使うときも、同様である。評価のきまらない現代作家のある作品をとらえて「もっともすぐれた作品」というのは、あぶなっかしい。「たいへんすぐれた作品のひとつ」といったほうが無難である。ある結果に対する原因を「唯一の要因」などと書いては、赤信号を無視するのに近い。「おもな要因のひとつ」という表現で、安全地帯に立つほうがいい。

入念

論文の文章は、ピシッとスジが通っていなければならない。くだいて言えば、理屈で組み立てた文章でなければいけない。センテンスとセンテンスとが、時計の歯車のように噛みあう必要がある。たとえば、こういう文章がある。

> 彼は自然を愛した。彼の愛する自然は、野や丘や川のような身辺の自然に限られていた。彼はよくロマン主義の先駆者といわれる。が、実際は古典主義のしんがりと考えるほうが正しい。

この叙述に事実とのまちがいがないとする。かんたんな解説書やレポートならば、こんなル

ースな文章でもまにあうだろう。

が、論文の文章としては、これではどうにも感心できない。「彼は自然を愛した」ということと「彼の愛する自然は……身辺の自然に限られていた」ということとは、言外に「しかし」か「そして」かがあって連絡しているみたいだが、けっしてきちんとつながってはいない。「自然を愛した」というからには、遠い雲、高い山、広い海にも彼の愛情はゆきわたるはずだ。「なぜ」それが、身辺の自然だけに限られたのか？　この「なぜ」が解決しなければ、「彼は自然を愛した。彼の愛する自然は……」と話がはこぶわけがない。きちんとスジが通るようにすきまを埋めてみよう。

彼は自然を愛した。しかし、彼の感覚は現実把握に働くのがせいぜいだった。そのために、彼の愛する自然は、野や丘や川のような身辺の自然に限られていた。

これで、どうにかつながったようだ。後半の文章もアナ埋めしてみる。

彼はよくロマン主義の先駆者といわれる。が、彼の自然に対する態度が示すように、奔放壮大な想像力に乏しく、実際は古典主義のしんがりと考えるほうが正しい。

例文は、なんとか論文の文章らしくなっただろう。

レポートなら、「何が」「どうであったか」を問題にすれば、それですむ。けれど、論文では、いつも「なぜか」という疑問をもつようでありたい。文章のはこびにも、かならず「なぜか」を考える。自分の文章でも、他人の文章でも、つじつまのあわないところがあれば、すぐに「ハテナ」と気がつくような入念さをもつように心がけたい。

明快

論文は、レポートにはない学問的な深みをもつ。しかし、論文の文章までが、それにつられて、妙にお高くなってはこまる。自分をえらい〝先生〟だと見せたい、たいしたことのない〝先生〟に限って、わかりきったことをもったいぶった表現で書き、わざわざわからなくして、これこそ学問だと思いこむ。みなさんは、そういうまねはしないことだ。

「筆者の見解によれば……のように考えられる」という言い方は、なんだか〝学問的〟みたいに聞こえる。しかし、「故に、筆者の見解によれば、この遺跡は平安末期のもののごとくに考えられる」などと書くよりも「だから、この遺跡は平安末期のものらしい」という文章のほうが、読んでずっとせいせいする。

彼が今日の研究者に知られているのは、経済学者としてではなく、多少は歴史家として、しかしむしろ

現代散文文体の父としてである。

妙な翻訳書に親しんだりすると、こういう文章に抵抗を感じなくなるからコワい。

今日の研究者のあいだでは、彼は経済学者あるいは歴史家としてよりも、現代散文文体の父ということで知られている。

謙虚に慎重に入念に構えて、そのうえスラスラと読め、トントンと頭のなかに入るような文章を書く。これを論文の文章の基本パターンと考えていいだろう。

もっとも、論文が独創で成り立つものである以上、論文が論者自身の個性的な文体で書かれることは、むしろ歓迎されることだろう。

また、論文の予想される読者層に応じて、表現の難易にもかなりな幅が生まれてくるだろう。実際、貿易学の論文をいくらやさしく書いてみたって、物理学を専攻する人には半分以上チンプンカンかもわからない。

しかし、それでもやはり、右に述べた論文の文章の基本パターンは、基本として身につけたほうがよさそうに思う。

そして、この基本を体得するのには、前に述べた要約練習が、やはりいちばん効果的な方法のようだ。

4 論文の例

論文の話がおわったところで、論文の一例をご紹介する。「ひとに論文の話をしながら、おまえはどんな論文を書いているんだ」そういう苦情に先手を打って、私自身がしばらくまえに書いた小論文に加筆したものを、ここで例に引くことにする。レポートの例がかなり一般的なテーマのものだったので、文学についての論文例も、バラエティがあっていいだろう、そう考えてのことでもある。可もなく不可もない論文だが、いちおうの標準例としてお目にかける。四百字詰原稿用紙、約四十枚の分量である。

とりあげた二人の文学者のうちで、シェイクスピアについてはいまさら解説の必要はあるまい。バァンズというのは十八世紀末のスコットランドの詩人で、『螢の光』や『故郷の空』の原歌の作詞者だといえば、多少の親しみはもっていただけるかも知れない。

バァンズとシェイクスピア

バァンズ Robert Burns の作品が発散する体質的な人間臭と、彼の制作態度および技巧の部分的特色とをシェイクスピアになぞらえる見解は、一七八六年の『キルマノック詩集』*Kilmarnock Poems* 公刊後約四ヵ月を経て、エディンバラの週刊紙に掲載されたH・マッケンズィの批評に始まったと思われる。[1]以後、感傷的なバァンズ偏愛の伝統がシェイクスピア再評価の時流にまんまと乗った一世紀ほどのあいだ、右の俗論が一般の嗜好に投じた事情は容易に推察がつく。むろん、シェイクスピア的バァンズのイメイジは両者間に偶発した二、三の類似現象に対する安易な着想に出たもので、精確な比較論理の篩で濾した結果ではない。だから、従来の俗見への反動として、今日のバァンズ研究の常識では、シェイクスピアからの影響を逆に否定視する立場がとられる。しかし、バァンズの胸中に作劇の野心が長くわだかまり、シェイクスピアについての彼の知識がいちがいに貧弱だったとも言い切れぬ以上、演劇の月を望んで失速したロケット・バァンズ号とシェイクスピア軌道との離合関係をあらためて考察することもあながち無意味な試みではあるまい。

バァンズがシェイクスピアから受けた第一印象は、ラヴィニアとの不幸な遭遇によって極度に悪いものになっていたようだ。というのは、詩人が十歳前後の頃、教育熱心な彼の父親が近隣の有志と語らって雇

傭した私塾教師J・マードックが少年バァンズらを前に『タイタス・アンドロニカス』を朗読して第二幕第四場に及んだとき、バァンズは加害者の言語道断な嗜虐性に耐えきれず、教師の手にする書を火中に投じたい、と憤激したという。多くの論者は、この少年期の経験が詩人生涯のシェイクスピア観を左右したと推定する。もとよりこの解釈にも多少の妥当性はあるが、幼少時の感受性が成人後の鑑賞力をもまるまる支配したと考えては、ほかならぬ詩人への礼を失し、さらにはバァンズ論としての正確さをも逸しかねない。

あるいは、青年期への成長過程に詩人が接したシェイクスピアの作品は、さきの『タイタス・アンドロニカス』を除くと、マードックが彼にあたえた教材『英国詩文選』*Mason's English Collection* のなかに当然採録されたと考え得る、抜萃の範囲に止まっていたかも知れない。バァンズは一七八七年八月ムーア博士宛書簡で、彼の少年時の広く浅い読書経験を回想し、そのなかに、「シェイクスピアの戯曲数篇」'some Plays of Shakespeare' をも含めたが、これがそのまま『詩文選』中の収録への言及であるかどうかはともかく、かならずしも戯曲数作「通読」の意味とは受け取りにくい。

けれど、バァンズのシェイクスピアへの関心は、彼の成長に応じて積極化する。一七八三年一月旧師への書簡で、彼は愛読する作家としてシェンストン、スターン、トムスンらを列挙するが、翌年八月の『備忘録』*Common Place Book* では、シェイクスピアの名がこれら一連の彼の言う「センチメンタルな作家」群に先立つ。実作では、これより早く七七年作の『悲劇的断想』*Tragic Fragment* にシェイクスピアを精読した影響を示唆するS・ダグラスの試論があり、八三年作『悲しむは人の宿命(さだめ)』*Man was made*

to Mourn 三九行に『お気に召すまま』二幕七場の一句からの余音を聞く研究者[2]もいる。もっとも、前者については、後述する詩人の言が作品解説の役割を果たすというW・ヘンリィらの異論もあり、後者に関しては、バァンズの類似の表現例を考えた場合、論者の思いつきが妥当だとは言い切れない。

しかし、八五年に生まれた傑作『陽気な乞食たち』*The Jolly Beggars* には、少なからぬ批評家が『冬の夜ばなし』に借りたか、と示唆する特異な二語がある。ひとつは、乞食どもの放歌高吟の先陣を承る義手義足の廃兵が、「腕には情婦を抱いていた」His doxy lay within his arm (l. 18) と述べる描写と、彼ら自由労働者？たちが昼はペテンを弄して放浪し、夜は厩・納屋を旅寝の宿に「乾草枕に情婦を抱くのよ」Hug our doxies on the hay (l. 303) とうそぶく第四合唱との両句に見られる doxy の語である。いまひとつは、たくましい鋳掛屋が彼の同僚を「前掛け垂らし／道具袋をもつ奴ら」those that bear／The budget and the apron(ll. 213〜4)と総称し、第四合唱で、「道具袋、袋物それに紙入れに乾杯！」Here's to budgets, bags and wallets！(l. 312) と一座が斉唱するときに再出する budget である。二語とも、バァンズの他の作品における用例が皆無な上、一作に限って再度使われていることからすると、両語に特異な語感が働いたことにはまちがいがない。しかも、二語はどちらも『冬の夜ばなし』四幕三場オウトリカスの唄にあらわれ、「水仙が顔を見せるとき、谷の向うの情婦（the doxy over the dale）が云々」(ll. 1〜2)「鋳掛屋が……雪ほど白い道具袋を持てば（If tinkers shall........ bear the snow-skin budget）云々」(l. 18) と使われる。がんらい doxy は両詩人の用法通り「乞食・浮浪者の愛人」の意味だが、シェイクスピアの右の句は十七世紀における代表用例の一つであり（NED）他方スコットランドでこの語が筆

舌にのぼることはほとんどなかったと言われる。[3] また、budget を「鋳掛屋」の携行品として扱う点でも両詩人はいっしょだが、鋳掛屋はバァンズがさほど好意や関心を寄せる職能ではなかったらしく、フランス革命の波及を恐れて「他国者の鋳掛屋に／釘を打たせてなるものか」But deil a foreign tinkler loom／Shall ever ca' a nail in't (*Does Haughty Gaul*, ll. 19～20) と目を剝いた例のように、詩人の露骨な疎外感をこめた比喩的表現に使われる場合の方がはるかに多い。結局、鋳掛屋がその職能本来の姿でバァンズの作中に登場するのは、オウトリカスの歌のとおりに「道具袋を持」って『陽気な乞食たち』の一員となったときだけなのである。H・ヘクトが、詩の気ままで楽しい歌声に『冬の夜ばなし』の背徳行商人の唱和を察したのは、[4] このへんの事理を直覚してのことだったかも知れない。

もっとも、バァンズが『陽気な乞食たち』制作当時『冬の夜ばなし』を読んでいたという記録が見あたらぬ限りは、右の考察も、それなりの推論を生むに止まる。そして『陽気な乞食たち』と同年の『J・ラプレイク宛第二書簡詩』*To the Same* 二十行「僕は言った〝良心よ、つつしみのない娘よ！〟」'Conscience,' says I, 'ye thoughtless jad!' 以下の十行と『ヴェニスの商人』でランスロットの胸中に起こる良心対悪魔の論争 (II, ii) とを比較するロバートスンの見解[5]も、前記と同様の理屈でヒットともファウルとも判定不能の難ゴロに近い。

しかし、書簡では八六年四月から死亡約二ヵ月前までの期間、詩では同じ八六年をかわきりに九四年の作品にいたるまで、バァンズの散文・詩中にシェイクスピアからの引用ないし影響を確認・推定できる語句は都合三十余回あらわれる。内訳は、書簡では二十二箇所、それにシェイクスピア劇総体に三度言及し

た回数を加えると計二十五。詩作では忠実な引用・影響を確認できるものそれぞれ四、影響の推定が可能な語句が最小限数例あるほか、シェイクスピアの名が三度、ハムレット・オセロ・フォルスタッフの作品名・人名がそれぞれ一度ずつ詠み込まれる。書簡中の他の著名文人への言及と対照しても、トムスンの三十三は別格として、シェイクスピアの頻度はポウプ、ラムゼイにまさり、ミルトン、グレイらはその半ばにも達していない。ある論者は、バァンズが自作の題辞にシェイクスピアからの引用をただ一度だけ選んだ(実際は二度)ことを指摘[6]して両者間の絶縁材に仕立てたが、この場合にもポオプからの四回が最高で、トムスン、グレイ、ゴールドスミスらがそれぞれ一回、総じてもともと比較論究のデータにはならぬ過小な数値群だが、シェイクスピアの二回は相対的にはかえって多い。つまり、遅くとも一七八六年内までにバァンズはある程度自発的にシェイクスピアに接していたものと考えられ、それ以後彼がシェイクスピアに払った関心も、数字ではじきだす限りでは、むしろ定説とはうらはらな結果になる。実際、引用例からごく内輪に見積っても、バァンズは、少なくとも『ハムレット』『オセロ』『マクベス』は通読し、『ヘンリィ四世』『同五世』『同八世』『ジュリアス・シーザー』『お気に召すまま』『リア王』の一部あるいは全体を読んでいたものと推定できる。

むろん、引用例の検討は量よりも質によらなければならない。たとえば、彼が書簡中に引いた「恐ろしい、恐ろしい、実に恐ろしい!」(*Hamlet*, I, v)「すべてこの世は芝居の舞台だ」(*ibid.*, II, ii)「フィリッピで君と会おう!」(*J. Caesar*, IV, iii)「心ならずも貧しさ故に」(*Romeo & Juliet*, V, i)「二番煎じの話」(*King John*, II, iii) などなどの句は、どれも当時のスコットランド知識人の間ではすでに文飾

の常識となっていた事情さえうかがわれるからだ。[7] あるいはダンロップ夫人にあてた八八年八月と九二年同月との二通の書面で、それぞれ自作の第一稿を披露して「聖体も受けず……聖油も塗らぬまま」(*Hamlet*, I, v) の作品と述べるときにも、引用は手ごろな潤色の絵具として彼の筆端を染めたに過ぎない。

けれど、彼が自認するとおり、バァンズにとって引用句はきびしい生活にさからうための「攻防両用のインスタント武具[8]」'ready armour, offensive or defensive' でもあった。あるいは、ストラットフォード製の甲冑はとりわけ堅牢優美な掘り出し物だったのかもしれない。八七年一月エディンバラの雑誌社社主にあてた彼の処女詩集紹介への礼状では『オセロ』一幕三場「私は口不調法なのです云々」の釈義が書面のほぼ半ばを占めてバァンズの謝意を代弁し、同年四月のダンロップ夫人宛書簡でも、短縮されながら同じ言葉が同一意図でくりかえされる。また、八八年一月税務署長あての就職依頼状では、ケント公がリアに対して忠誠を誓うときの「お顔には主人とお呼びしたいものが拝見されます」(*King Lear*, I, iv) を流用して配慮を乞い、同年三月某出版社社主宛書簡でも、同一引用が類似の目的に襲用されている。

しかし、興味と重要性とにいっそう富む引用例は、シェイクスピアがバァンズの知的甲冑ではなく、感情に密着する肌着となった機会だろう。たとえば「これぞ人間(ひと)の相(すがた)」と運命の転変を嘆く『ヘンリイ八世』(III, ii) のせりふに自分の傷心をよせた用例(八六年四月J・アーノット宛)エディンバラを目して「オセロとともに言いたい〝美しき恥知らずめ！〟」と叫ぶ場合(III, iii・八七年三月R・ブラウン宛)帰郷後、首都のにぎやかさを「うつせみのむなしき輝きとはなやかさよ」と見立てた『ヘンリイ八世』前出同

所からの引例(八九年三月ダンロップ夫人宛)などには、程度の差こそあれ、それぞれに作中人物への彼の感情移入が認められる。そして、この種の引用例での逸品は、八七年八月のムーア博士宛自伝的書簡と、九三年十月農夫R・クレグホウン宛消息との二通に見られる。自身の成長過程を実直に物語り、同業の農夫と談笑するような虚心な情感の活力は、シェイクスピアから移植した引用を皮膚化し癒合する。前者では、信念に殉じた亡父をローマの廉直な暗殺者にたとえて、「ブルータスとカシアスは立派な者たち」と『J・シーザー』(III, ii)を引き、後者では詩人が好きだった猥褻歌を紹介するときに「そこだて！さあ、エロ歌歌って楽しませてくれろ！」というフォルスタッフのことば(*Henry IV*, III, iii)が前置きになる。

こうして、シェイクスピアの章句は、ときとしてバァンズの純正な感情生活にまで入り込む。だから、書簡で見る限り、後者が素朴な意味での影響を前者からこうむったという表現さえ許される。詩人は、引用のときに働く「心の範囲は、音楽的表現(韻文)形式をとる場合、独創よりもはるかに狭い限界に止まる」[9]ことを自認した。しかも、死期近い闘病生活の中にあってさえ『ハムレット』の一句を文飾に借用した(九六年六月リドル夫人宛書簡)バァンズから、釈迦の掌で方向を見失った孫悟空を思い出しては、あまりに突飛な連想と笑われようか？

もちろん、芸術家の一人が他にあたえた影響は、本来後者の作品のなかにたどらなければならない。その意味で、八六年をひとくぎりに、シェイクスピアの波紋がバァンズの詩のなかに拡がり始めた事情はすでに述べたとおりである。同年作『御縁日』*The Holy Fair* の第二十一連、詩人は説教僧の言葉が銘刀

のように善男善女を切り刻むと皮肉ったあとで

His talk o' Hell where devils dwell,
  Our very 'sauls does harrow'
    Wi' fright that day! (ll. 187~9)

悪魔が住む地獄についての御法話が
  われらの心を「いたく悩ます」
    その日、怖さで！

と歌って、引用符中の句が『ハムレット』一幕五場によったものであることを自註した。同年作『夢』*A Dream* 第十一連では、英国帝政にさんざん悪態をついたあげく、ふざけきった調子で国王を慰めてこう詠む。

Yet aft a rag'ged cowt's been known
  To make a noble aiver ; (ll. 91~2)

・・・・・・

There, him at Agincourt wha shone,
  Few better were or braver ;
And yet, wi' funnny queer Sir John,
  He was an unco shaver
    For mony a day. (ll. 95~9)

それでも野育ちの仔馬が
　けだかい親馬になった話もございます。
　　　　・・・・・・
ほれ、アヂンコートで赫々(かくかく)たる
　勇気と美徳にぬきんでられたお方でも
愉快な変り者ジョン卿と
　それはおどけていらしったものです
　　長い間。

「アヂンコート云々」が『ヘンリィ五世』(四幕) から採ったものであり、フォルスタッフについては「シェイクスピア参照のこと」とは、これもまたバァンズ自身の解説である。

やはり同年の作である『冬の夜』*A Winter Night* の三十七行以降、彼の沈思を誘って「風吹けよ、吹け、いよよ烈しく!」Blow, blow, ye winds, heaving gust! と始まる〝天来の妙音〟が、グレイの詩風に似せながら『お気に召すまま』二幕七場のアミアンズの歌「吹けよ、吹け、冬の風云々」の自由な釈義であることは、ヘンリィ、ヘンダスン以来の定説になっている。そのほか、いちいちの吟味は省くが、八九年作『故グロース大佐のスコットランド遍歴に寄せて』*On the Late Captain Grose's Peregrinations thro' Scotland* の三行に『ヘンリィ五世』の士官フルエリンのせりふ「上着に穴があるのなら云々」(III, vi) の援用を見、九十年作の『シャンタのタム』*Tam o' Shanter* 百三十一行以下十行にわた

る妖怪寺での宴の描写に『マクベス』魔女の場との類似性をうかがっても、いっこうこじつけにはならないだろう。また、九四年作『イソウパスからマリアへの書簡詩』*Epistle from Esopus to Maria* 七八行の「女から生れた者すべてに戦を挑みましょう」And dare the war with all of woman born についても、典拠ははっきりと指摘できる。

こうして、右の確認可能な数例にその他の推定可能な引用を加え、さらにまえに触れた題辞の二例とを総計すると、バァンズの詩のなかでのシェイクスピアからの引用例は、ほかの作家からの場合とくらべてみても、書簡と同様相対的に過少ではない。むろん、引用例の多少がそれほど影響の軽重を計る目安にならぬことも書簡のときと同断である。そして詩中の引用は、やはり書簡中の引用第一例で述べたとおり、破綻こそ見せないが、ほとんどが寄せ木めいた文飾の範囲を出ていない。『御縁日』中の引用句はその適例であり、『ヘンリィ五世』は気ままなからかいのたねになり、フォリスの荒野の妖怪が詩人の超自然物への関心を促して、絶品制作に奉仕したわけでもない。その意味で、彼が濶達な亡友をしのぶ挽歌（*Elegy on Captain Matthew Henderson*）の題辞に、いちどはシェイクスピアからの引用を借りながら、あとで自分でこれをいまどおりの自作の四行にすりかえたことは象徴的な意味さえもっている。また、D・ダイチズについで近来出色のバァンズ研究書をあらわしたJ・クロフォードは、シェイクスピアからの少なからぬ引用例を論じ、歌謡の傑作『ダンカン・グレイ』*Duncan Gray* にさえ、[10]初期のシェイクスピア喜劇における恋愛心理の弁証法的発展との構成上の「類似」があることを指摘した。しかし、彼とてもこの考えを「影響」関係にまでひろげることは慎んだ。すなわちバァンズ自身の直喩を拡大解釈すれば、詩中の引用はさ

しずめ彼の籠手・脛当にでもあたったのだろう。シェイクスピアの壮大な人間観の広野に遊んで、詩人はわずかな表現のつみ草に満足したようにも思われる。この点、僕も今日の影響否定論に異を唱えるつもりはない。しかし問題はそのさきにある。つまり、ともかく少からぬ融通をシェイクスピアから受けながら、バァンズがかんじんの貸主にそれ相応の礼節を示さぬかに見える理由である。

『アバディーン年代記』によると、一六〇一年英女王直属の劇団が同市を訪問公演した記録(11)があり、その際、劇団マネージャーL・フレッチャーに関し、彼が、「高名な」・the celebrated・シェイクスピアとともに英国での公演を勅許されていたという記述がある。右の形容辞は、シェイクスピアが座付作者ないし劇界人として、当時のスコットランド知識人の間ですでにある程度著名であったことを暗示する。また、詩人の少年時代に、寒村の青年教師がシェイクスピアの二流戯曲を携えていた事実は、約一世紀半の後、この劇詩人の名声がスコットランドで相当広範囲に浸透していたことをほのめかす。一七六九年には、エディンバラの新築劇場の屋上に悲・喜劇両詩神を左右に擁するシェイクスピアの彫像が建てられたともいう(12)。

いっぽう、シェイクスピアを過少評価する風潮が、スコットランドで根強く共存していた現象も見逃すわけにはいかない。ひざもとのイングランドにあってさえ、十七世紀中葉からロマン主義勃興にいたるまでの期間、彼が総じて不当な冷遇を受けていた事実は批評史にあきらかだが、大学での演劇教養がラテン語による古典戯曲学習に終始していたスコットランドで、この傾向がいっそう強かったと考えてもまちが

ってはいまい。シェイクスピアが当時の同国知識人一般にあたえた印象は、T・ボールドウィン著の書名どおり、あるいは古典学識の貧困さだけだったかもしれない。もっとも、スコットランドはシェイクスピアひとりに強面だったわけではない。文化史上、スコットランドは十七世紀イングランド文化吸収に未曽有の輸入超過を記録するが、ロンドン劇界の活況にはほとんど関心を払ったようすがないからである。逆推すれば、シェイクスピアは単身〝黙殺〟の弾幕を冒し、同地に文名の橋頭堡を仮設したのだ、とも言えそうである。そして、スコットランドで創作戯曲のいくつかが淡く輝くのは、螢光灯なみに一世紀ずれる。この場合、作劇の試みが荒地に挑むような難事だったのはもとよりだが、小成した開拓者の手にする道具が伝統がきたえた鋤ではなく、当世風な修辞の鋳物に限られたことは、同国文学にとっての二重の不運だった。牧師J・ホウムの『ダグラス』*Douglas*はその意味での典型である。戯曲はC・モリスの譚謡にもとずき、スコットランドの高名な一族の悲劇をゴシック風とも批評できる措辞で描いたものだが、当時の同国人の国民感情と感傷性とに強く訴え、一七五六年の初演以来約半世紀を通じて、同地での好評をほしいままにした。エディンバラでの初演時には、桟敷席から「シェイクスピアはだしィ!」と声がかかったと伝えられ、一流の知識人D・ヒュームさえもが「ホウムはシェイクスピアの劇才をもち、しかも後者の粗放破格(barbarism)を免れている」[13]とほめそやした。

バァンズは右のように混沌とした十八世紀シェイクスピア観のただなかに生まれあわせる。彼のシェイクスピア鑑賞がまるまる戯曲に一辺倒し、ソネット・抒情詩に接した痕跡すら留めていないのも、あるいは当時のシェイクスピア評価の偏面性によるのかと思われる。ところで、『キルマノック詩集』公刊以前

のバァンズの観劇経験については、推測の手がかりさえまったく無い。寒村の生活では、農家の納屋などで上演される、ラムゼイの『やさしき羊飼い』*Gentle Shepherd* の類を観るくらいが精々だったかもしれない。しかし、エディンバラ出京後、彼が足しげく劇場に通ったことは伝記的事実である。連想の当否は別として、ある評家は、これを「少年シェイクスピアのような」熱意にかられて、と形容した。[14] が、一七九〇年十二月、ダンロップ夫人宛書簡によると、詩人が最初に観劇した「悲劇」は『ダグラス』だったという。逆に、書簡・詩を通じて、バァンズがシェイクスピア劇観劇の経験を直接語る場合は皆無である。むろん、シェイクスピア肯定の一半の時潮や『ダグラス』初演時の大向うの声やから推測しただけでも、シェイクスピア戯曲が当時でもしばしば舞台にかかり、そのいくつかを詩人が実見したと想定することは可能である。しかし、実際の戯曲上演に接する好機も、彼のシェイクスピア観をそうそうは手ぎわよく時代的混迷から救い出しはしなかったようだ。彼の知人が関係する、演劇慈善興行に寄せた二篇の前口上詩には、このへんの事情が如実に読みとられる。

そのひとつは一七八七年四月、エディンバラ、ローヤル劇場での『ウインザーの陽気な女房たち』慈善興行のときのもので、バァンズは祖国の文化を讃え、観衆の愛国心を励して

Here Douglas forms wild Shakespeare into plan (l. 21)

この地で『ダグラス』は

おどろしきシェイクスピアをととのえ

と歌い、続けて『心やさしき者』*A Man of Feeling* の主人公が「人間の良き性（さが）呼び起こす」と胸を張った。

ほとんどの研究家は、バァンズの空振りを即座に宣告した。いかにも、ホウムを過賞する勢いでシェイクスピアを‘wild’ときめつけた表現は「言わずもがなの迷句」[15]にはちがいなく、前記のとおり少年時の『T・アンドロニカス』ショックの後遺症だと診断する論者も少なくない。だが、詩の愛国的な主調音と前記の時代的風潮とを考慮すれば、むろん詩人の名誉にならぬ発言ではあるにせよ、頭からこれを奇矯な暴言だともかたづけられない。彼が敬愛するミルトンの『ラレグロ』中の一句「生来の野生の歌声」‘native woodnote *wild*’が、そのまま当時のシェイクスピア評価の一基準となっていたことも、ただの暗合ではないかもしれない。

ついで九〇年二月、ダムフリーズ劇場での慈善興行のおりに、詩人は悲劇の女王メアリィを描くのに

O for a Shakespeare or an Otway scene (l. 21)

シェイクスピア、オトウエイの筆力ありせば

と詠み、ふたたび、むぞうさに一・二流劇作家を混淆する。しかしこの場合にも、ヒュームが前出のホウム讃辞の中で彼と変らぬ誤謬を犯し、W・スコットが『ヴェニス安泰』のヒロインの薄倖がジュリエット、デスデモーナの悲劇よりもさらに多くの涙を誘っていた、と書く[16]環境では、バァンズひとりの不見識だけを責め立てるにもあたらない。むしろ、右の一行を詩のコンテクストに戻してみると、別解さえ成立する。すなわち、シェイクスピアの名は、口上前半における自国演劇作興へのバァンズの熱望がややその激しさを収めたときに現われはするが、詩人が自国の女王をしのぶ筆をあえてイングランド劇作家に托したことは、そのまま彼の一歩前進したシェクスピア認識の表明にほかならないとも言えるからだ。

実際、詩人が八九年四月シェイクスピア戯曲を書店に発注し、同年十二月「シェイクスピアを読み始めております」（E・カニンガム宛）と伝えるころから、彼のシェイクスピア観は、おそまきながら望ましい変化を示し出したかに見える。たとえば翌々年前後の作である『田園詩に寄せて』*On Pastral Poetry* で、バァンズはラムゼイをセオクリタスになぞらえて讃えるついでに、ミルトンとホーマー、ポオプとホラテッスとで別に二組のコンビを作り、四対目ではホーム、オトウエイを詩想からしめだしてシェイクスピアを

Eschylus' pen Will Shakespeare drives; (l. 14)

とイースキラスにたとえる。古典偏重のスコットランド演劇思潮が彼に及ぼしたと推定される感化を割引くと、詩人のギリシャ悲劇への造詣（ぞうけい）ははなはだ疑わしい。しかし、先行する三対の類比がかなり妥当である以上は、彼は言及した古典詩人についての一応の知識はもっていたものと考えられる。そして、他の三セットがそれぞれに共通の美点で連結していることからすると、『蛙』の作者が嘲弄した、イースキラスの粗放と冗漫とをバァンズがシェイクスピアにも見て取ったとひねっては、曲解の勇み足になろう。すなわち、詩人がシェイクスピアをギリシャ悲劇初演の功績者になぞらえたとき、彼は、このイングランド劇作家をすなおに英国「悲劇」の創始者として評価したものと解釈できる。バァンズのシェイクスピア認識は、ようやくこの時期に味得の公道に乗り出したように思われる。ダムフリーズで詩人の子弟の教育にあたったJ・グレイが、後年の書簡で、バァンズが長男の文学教養をシェイクスピアから始めるよう依頼したと述べている[17]のは、たいへん示唆に富むことばである。

もともと詩・歌謡を問わず、バァンズの本領は生身の人間を歌うところにある。一七八三―五年の『備忘録』を「観察の記録」*Observations* と総称した詩人は、早くから「人間性の観察者」であることを望み、後年収税吏の多忙な生活にあってさえ、職務上「人間性の種々相」に接し得る奇貨を喜んだ。これに類する心情は、書簡中折りに触れて続発する。だから、人間をもっとも写実・多角かつは具象的に表現できる文学形態としての戯曲が、彼の強い関心を誘ったのにも無理はなかっただろう。前出『断想』の自序で、バァンズは彼の少年時に悲劇ほど心を捉えたものはなかったと回顧し、十七・八歳のころ一篇の悲劇を構想したが、日常の繁忙にまぎれて果さなかったとも述べている。さらに、同所で『断想』に触れ、それが彼の想定する戯曲の一登場人物のせりふであることをあきらかにし、該当する場面設定にまで言及した。もっとも『断想』自体は、シェイクスピアが駆使した無韻詩技巧への貧しい実験例でしかなく、S・ダグラスが、バァンズのシェイクスピアへの追随を仮説したのは、まえに述べたとおりである。

とまれ、詩人の作劇意欲は活潑な胎動を続ける。一七八八年九月R・グレイアム宛書簡で、バァンズは田園を背景とする戯曲の計画をあたためていると語り、同時に、作劇の主眼は性格創造にあるという見解を述べてもいる。やがて『断想』について、彼が自認する性格表現の第二試作『素描――書籍商クリーチの横顔』*Sketch—Portrait of Creech the Bookseller* が生まれる。ただし、この作も文字どおり十四行の「素描」であり、彼が含むところのある虚飾に満ちた一商人の生態を、皮相的に捉えた小品にすぎない。叙述の筆法は浅い諷刺の行書にくずれて、むしろ、それまでの悲劇制作の計画が、すでに一頓座を来たしたかとあやしまれるくらいである。八九年一月、D・ステュアート宛書簡で、バァンズは『素描』が将来の構想の

一部を成すことを期待し、首尾よく行けば、これを「さまざまな光（a variety of lights）にあてたい」とも望んだ。「さまざまな光」とは、登場人物の多彩な性格群のことであろう。翌月のゲディス主教宛書簡では、右の文面を追うように「いままでよりも大きな計画」が「一部実際化している」ということばが見られる。約三ヵ月後、バァンズは書籍商ヒルあてにシェイクスピアを発注する。そして同年十二月、シェイクスピアを読み始めたと報告するカニンガム宛書簡で、詩人の意識の中に道化が正面切ってまかり出る。すなわち、バァンズはこの書簡で、スコットランドの観衆に「国産の誇張・奇想・滑稽」（the Affectation, Whim, and Folly of their own native growth）をあたえる「新奇」（Novelty）なもくろみを立てていると言い、あわせて人間研究と読書とに数年の準備を予定したとも告げている。とんで翌年三月、彼はふたたびヒルあてにドライデン、コングリーヴ、シェリダン、モリエール、ヴォルテールら十余人の英仏劇作家の作品を注文、主として「喜劇」の手配を求めた。

　伝記によれば、この時期に詩人の知己J・ラムゼイが高地に伝わる貴族・農民間の報恩譚の劇化を示唆し、またマッケンジィが（おそらくは感傷的な）田園劇の制作を促したともいうが、いずれも実現に至っていない。さらにカリィ作の伝記が引くラムゼイの談話では、一七九〇年バァンズは彼に当時の作劇計画を明示したという。もっとも、物語の骨組みはブルース伝説に取材したたわいないもので、王が敗走中、彼の靴の踵（かかと）がゆるみ、修繕にあたった靴屋の錐（きり）が王の足の踵まで刺した、という筋である。詩人はこの腹案に題目まで用意したと伝えられるが、これに関する試作も断片さえ現存していない。

　結局、不十分な「性格表現」の習作例を除けば、バァンズの作劇意図はまったくかけ声倒れにおわり、

彼のファンに空しい望蜀の嘆をのこすに止まった。だが、少年時の抱負が成人後何年かの準備を経てなお結実を見なかったことからすれば、彼による戯曲創作の可能性は本来どの程度まであったのだろうか？シェイクスピアからの影響如何はしょせんこの疑問に帰着する。

D・リンゼイ以来J・バリに至る約三世紀半のあいだ、スコットランド文学の一特色となった戯曲不毛の現象は、ふつう清教主義の演劇禁圧によるものとされるが、G・G・スミスの説[18]に準じて、同地の文学がもつ回顧・親近の両傾向に内因を探るほうがはるかに妥当だろう。この場合、回顧性とは史実の忠実な復元が劇的進行を阻害する意味を含み、親近性とは作者と読者との親近感が素材の劇的客観化を妨げる弱点を指す。そして、バァンズの詩風の特徴は、とりわけ後者に該当する。これまで『ウイリィ上人の祈り』*Holy Willie's Prayer* 等を頂点とする彼の諷刺詩の攻撃性は、しばしばシェイクスピアの同種の辛辣さにくらべられてきた。しかし、諷刺が個人的感情経験の普遍化に成功した逸品にあっても、なおバァンズは作中にはっきりと残像する。もともと、諷刺詩とは作者の批判意識が対象を客観視の距離にへだてたリモ・コン装置のことで、叙事詩とならんで劇詩のとなりに据えられるものだが、その例でさえ、バァンズは操縦者の椅子におさまっていることができなかったように思われる。というのは、バァンズは単純明快な自身の映像を読者にあたえることに徹底し、かわりに隣人としての好意を広く期待する詩人だからである。逆に、劇作家がバァンズ流の自己顕現を作中に試みることは、まずありえない。劇作家は自他を分析提示した登場人物に、エリオット[19]の言う、作者「第三の声」をあたえ、むしろ畏敬を受ける芸術家であろうし、ほかな

らぬシェイクスピアは、この結晶作業の比類なき熟練者として、その心に「無辺際」の敬称を贈られた。あるいは、バァンズが人性の諸相に関心をもち、性格創造に作劇の力点を定めたとき、彼はシェイクスピアの後塵を拝して、作劇コースのスタートに身をかがめるポーズをとったかもしれない。しかし、性格創造即劇作という彼の判断が、一箇の浅慮に過ぎなかったこともあきらかである。詩人の十九世紀同国人スコットは、散文叙述本来の静的要素を克服した「動」の感覚の所有者として、R・L・スティヴンスンと双璧を成す作家だが、彼の劇詩論[20]は自明のことながらあらためて参照するに足る知見を含む。すなわち、彼は「劇詩の筋は一行ごとに前進する」ていのものでなければならず、詩としての傑作が劇的展開と構成とをなおざりにして戯曲の本質にもとる場合が少なくないことを指摘した。彼が物語詩と歴史小説との分野に主力を注いだのは、こうした認識を基盤として自身の劇才を否定したためでもあるようだ。

バァンズの作品中、劇化への可能性をもっとも多く内蔵する詩は、ほかならぬ前出の『陽気な乞食たち』である。J・ロックハアトはこの傑作について「シェイクスピアとても（同様の素材では）これを凌駕することはなかったであろう」と評した。[21] しかし、その逸品の解釈にさえスコットの劇作原理は応用できる。つまり、廃兵・その情婦・鋳掛屋らの独唱は、ト書風の連結句と合唱とにつながれてつぎつぎにめいめいの紹介を進めていく。が、彼らの独吟が劇的対話や性格葛藤に移行する気配はまったくなく、おのおのの一度の総括的自己表現に安んじて、詩は立体的な展開を示さないままで終る。詩のなかで、鋳掛屋対バイオリン奏者の女をめぐる争奪戦（ll. 187～202）が叙述表現に甘んじた事象は、そのまま右の事情の裏書きになる。結局『陽気な乞食たち』の演劇性は、シュプレヒコールの限度に止まる。スコットランドでは

十年ほど前、この詩が歌手・室内楽団の編成でなんどか演奏・放送されたというが、加筆して上演された話を聞かない。むろん、バァンズが戯曲の構成・展開について所見をもらした例は皆無である。

一七八九年冬、バァンズの興味がはっきりと悲劇から喜劇に転換したいきさつについても、多少論及の必要があろう。彼が悲劇制作に早くから心を傾けた理由は、推測しにくいことではない。実際、生活苦と自身の性格の弱さとに悩み、同時代のセンチメンタル文学になずんだ詩人は、書簡中最初のシェイクスピアからの引用例でも、進んで自分を悲劇の主人公に仕立てている。そのほかの引用句への感情移入の例から推すと、悲劇的人物は彼のおりおりの感傷をすりかえる人形でさえあっただろう。ここで意識の方向を逆転させるのに、それほどめんどうな操作はいるまい。のみならず、自分の傷心に採るにせよ「回顧」して自国の貴人の悲運に拠るにもせよ、バァンズにとって悲劇の素材は身辺に遍在していたかもしれない。そして、前出の第二ロ上詩の中で、スコットランドの史実にもとずく悲劇を、だれか「雄々しき詩人よ、出でて詠まずや?」'Is no daring Bard will rise, and tell ....?' (l. 13) と訴えるときにも、バァンズは内心悲劇制作の自身の抱負を、なお励していたように思われる。しかし、詩人の感性は自分個人を悲劇的人物に見立てるか、偏狭な愛国的感傷かに耽るのがせいいっぱいで、悲劇を冷徹に客観視し、普遍的な悲劇人物を創造するまではとても手が回りかねたにちがいない。たとえば、一七八七年晩夏から半月余を楽しんだ第三次高地旅行で、彼が『マクベス』の旧蹟を訪れたときにも、バァンズは原罪に似た人間の業にはいっこう想到したようすもなく、意外な無感動を示す。おそらく、彼の心情は梟雄の宿命と自身の生活意識とをへだてる深いクレヴァスに落ち込んで、当然の感銘にはいあがることがなかったのであろう。

この推測が妥当ならば、詩人の創造する悲劇的人物も、あるいは狭い地方性を舞台にあぶなっかしく歩きまわる程度のものだったかもしれない。まして悲劇は作者の直接的感動をおさえる点で、バァンズの詩の本質とはまっこうから背離したはずである。しかし、喜劇はもともと感性の関与の当否を第一義の問題とせず、対象からの知的疎隔を前提とすれば十分である。そして、バァンズの喜劇的観照の態度は、時代的感傷性に対する制毒効果さえしばしば誘発して、彼の少なからぬ傑作を生んだ。とすれば、詩人は当然自己の詩風に親しい、喜劇の美神を追い始めたのだろう。あるいは、バァンズが正当な作劇技法に導かれぬまま悲劇に座礁したとき、彼は喜劇の大波にあらためて劇作の意図を托そうとしたのだ、ともたとえられようか。

もっとも、バァンズが果断に悲劇を喜劇に乗りかえたかには疑問が残る。たとえば、まえに引いた「雄々しき詩人よ云々」も、既述のとおり九〇年作の口上詩中の一句である。カリィが引くブルース劇化案の逸話も、またこの時期にあてはまる。スコットは、王の「賤しい者のなかでの冒険」劇化をバァンズが実際に企画したものと推量し、その実現を仮定した場合「正規の悲劇でも喜劇でもない、両者の性質をもつ作品」(neither, perhaps, a reguler tragedy nor comedy, but something partaking of the nature of both)が生まれただろうと所感を述べた。[23] しかし勘ぐりようでは、スコットが'tragi-comedy'の語を避けたところに、彼の言う本来の劇才を、スコットがバァンズにも期待できなかったための逡巡がうかがえぬではない。また、もしバァンズが喜劇制作にたずさわったと考え、彼の詩の「親近性」を好意的にたなあげしても、なお「彼が知り得ぬ無数の秘密をもつ英語」[24]を自由に駆使して、シェイクスピア喜劇の万人の

笑いに迫ることはむずかしかったであろう。なるほど詩人の言うとおり、彼の喜劇の主要人物となる「愚者や悪漢」[25]の類は、スコットランドでもことかくことはなかったにちがいない。しかし、詩人のねらいが「国産の誇張・奇想・滑稽」の舞台化にある以上は、方言以外にその適切な伝達手段がないこともたしかだからである。つまり、バァンズ作喜劇ないし悲喜劇の類を仮定しても、十八世紀以降スコットランド演劇の主流が指向した地方劇、いわゆる'Kitchen Comedy'の範囲を脱し切ることはなかったと思われる。

むろん、バァンズの作劇の可能性をこのように否定するのも、現存する彼の書簡と作品とにもとずく類推の域を出てはいない。彼に長い余命が残されたならば、彼の言うように「やって見るまでは自分の適性はわかりません」[26](No man knows what Nature has fitted him for until he try.) 万に一つも戯曲の傑作が成らなかったとは断言できない。しかし、現実の作品の検討をはみだし、仮定をもてあそんでは好事家流の道草になる。ともかく、バァンズは彼の作劇意図を満たすことがなく、彼が劇作家としてだけ接したシェイクスピアは、しょせんバァンズとは無縁な分野の先輩でおわったようだ。詩人は、とある知人の書斉で紙魚に食われた美装のシェイクスピアを見たとき、こう詠んだ。

Through and through the inspired leaves,
　Ye maggots, make your windings;

(*The Book-Worms*, ll. 1~2)

天啓を受けたページの中を
　虫どもよ、ぐるぐる回れ。

けれど、シェイクスピアの章句をかじりまわる紙魚の姿に、おなじ劇詩人の片言隻句をしきりと借用した彼自身を、バァンズがふと連想したと考えては酔興な皮肉に過ぎるだろうか？　そして、バァンズ自身が一巻の美本を成すのには、シェイクスピアはもとより、多くのイングランド作家の影響を脱した造本の過程が必要だった。つまり、彼がスコットランド文学の伝統に生きたときにこそ、それまでのイングランド戯曲を集大成したシェイクスピアとの逆説的な類似性さえ成立するように思われるのである。

1. J. D. Ross, *Henry Mackenzie and the First Review of Burns's Poms.*
2. J. D. Robertson, ed., *The Poetical Works of R. Burns*, NOTES, p. 576.
3. *Ibid.*, p. 559.
4. H. Hecht, *Robert Burns*, p. 62.
5. J. L. Robertson, *op. cit.*, p. 582.
6. J. Crichton-Browne, *Burns from a New Point of View*, p. 95.
7. *Ibid.*, p. 96.
8. Burns' Letter to Mrs. Dunlop, Dec. 6, 1792.
9. *Ibid.*
10. T. Crawford, *Burns, A Study of the Poems and Songs*, pp. 303~4.
11. D. Irving, *Hisory of Scottish Poetry*, p. 456.
12. A. Angellier, *R. Burns*, p. 179.

13. J. Crichton-Browne, *op. cit.*, p. 98.
14. J. Lindsey, *R. Burns, Rantin' Dog*, p. 330.
15. W. E. Henley, *Centenary Edition*, II, NOTES, p. 383.
16. J. Crichton-Browne, *op. cit.*, p. 95.
17. H. Hecht, *op. cit.*, p. 227.
18. G. G. Smith, *Scottish Literature*, pp. 102~112.
19. cf. T. S. Eliot, *Three Voices of Poetry*.
20. J. G. Lockhart, *Life of W. Scott*, X, P. 195
21. J. G. Lockhart, *Life of Robert Burns*, pp. 232~3.
22. M. Lindsay, *The Burns Encyclopaedia*, p. 74.
23. J. G. Lockhart, *Life of R. Burns*, NOTES, p. 231.
24. E. H. Henley, *op. cit.*, IV, p. 268.
25. *Prologue for Mr. Sutherland's Benefit-Night*, l. 8.
26. Burns' Letter to E. Cunningham, Dec. 23, 1789.

Bibliograply (略)

5　就職試験論文の書き方

ミニアチュア論文

みなさんが学校を卒業して社会人となる場合、多くのひとがくぐる関門に就職試験というものがある。やれやれまた試験かと、渋い顔をなさるみなさんには同情するが、なんとか上手にやりくりしてこの試験にもパスしていただかなければしょうがない。

就職試験の筆記テストの課目としては、語学・一般教養・専門学科、それにクレペリン検査などの職業適性テストが、おもなものと考えられる。が、これに「論文」や「作文」が一枚加わる例が少なくない。

もっとも、就職試験の「論文」は、〃卒論〃や学位論文など、これまでお話してきた論文とは、形式や内容がかなりちがう。だいいち、ほとんどが、あたえられたテーマで、一時間か一時間半くらいの短時間内にせいぜい千字から二千字程度にまとめるミニアチュア論文である。が、「これも論文でございい」と言われるからには、知らん顔の半べェをきめこんでも、義理がわるい。だから、本書でも「補遺」ぐらいの意味で、就職試験「論文」をとりあげておくこと

業種＼課目	論文	専門論文	時事論文	作文	専門論文・作文	時事論文・作文	専門論文・時事論文	専門論文・時事論文・作文	論文作文として出題しない	不明	累計会社数
金融保険	9	10	2	23	6	1	1	4	17	14	87
商事	8	7	5	22	10	2	1	9	18	4	86
繊維紙	6	8	1	15	6	2	1	4	14	8	65
食料品水産	8	0	4	5	8	1	1	3	9	10	49
鉄鋼	5	1	2	11	4	1	1	1	11	5	42
電気機器	16	2	2	21	8	4	1	4	14	7	79
機械	8	0	2	10	11	6	0	5	21	7	70
化学	16	2	3	18	7	3	4	10	33	11	107
建設	4	1	3	14	8	4	6	4	9	5	58
課目累計	80	31	24	139	68	24	16	44	146	71	643

にする。

現在、どれくらいの会社で「論文」それに「作文」を入社試験に出題しているか、ダイヤモンド社編・刊の『一九六九年版会社就職案内・大学篇』で調べてみた。そして、同書のなかから、調査会社数四十以上の業種九つを選び、計六四三社について統計をとると、上のような表ができる。

課目欄に「専門論文」とあるのは、論文・作文関係の試験に専門論文だけを出す会社で、「専門論文・作文」というのは、専門論文と作文との両方の試験をする企業、という意味である。

上の表で、作文だけを出題する企業、とりたてて論文・作文としての試験をおこなわない企業、あるいは筆記試験をぜんぜんしなか

ったり、筆記試験課目を公表しない企業、それに新規採用を見合わせた企業などは、ぜんぶで三五六社になる。つまり、六四三社のなかで、六八年度に論文試験をおこなった企業は、半数をちょっと下回る。

が、就職試験での「作文」と「論文」とのくべつは、あいまいな場合が少なくない。また、六八年度に筆記試験をしなかったりした会社が、今後の筆記試験で論文を加える可能性は十分考えられる。とにかく、半数近い企業が、六八年度の入社試験に論文をとりあげている以上は、論文が入社試験でそうとう重要視されていることはたしかである。そういう実情からすれば、入社試験がきびしくなり（むろん、そうならないことを願うが！）人材を精選する傾向が強まれば強まるほど、入社試験での論文の出題率は、ふえこそすれ減ることはないだろう。

試験論文の種類

右の表では、試験論文を「論文」「専門論文」「時事論文」と三つにくべつしてある。この分類は、もともと企業がおこなったもので、「専門論文」というのは、企業あるいは受験者の専攻に関係をもつ、専門知識をテーマにした論文のことらしい。「時事論文」は、むろん、時事的な問題についての論文だろう。

「論文」とだけ書いてあるのは、テーマの性質がはっきりしないが、専門論文・時事論文あ

るいは作文的論文のどれかにあたるのだろう。〝らしい〟とか〝だろう〟とかいうのは、三者のくべつも、そうそう厳密なものとは思えないからである。時事論文がかった専門論文もあれば、作文的論文めいた時事論文もある。

第一のジャンル　そこで、本書では、実際に出題された論文から、別の分類を考えてみよう。まず、あるテーマについて、受験者の〝考え〟を聞くよりも、受験者の〝知識〟をはかろうとする傾向の論文がある。専門論文というのは、たいがいこれである。

(例)

商法における株式と社債の接近について述べよ（千代田生命）

引当金と積立金の類似点および相違点について論ぜよ（日本不動産銀行）

管理会計と財務会計との関係（大日本印刷）

株式会社における債権者保護の諸制度について論ぜよ（日本鋼管）

資本主義的経済機構の特質を明らかにせよ（大阪セメント）

あとの二つには、受験者の〝考え〟が多少入りこむ余地があるが、まえの三つは完全に〝知識〟だけですむ。入社試験の「専門課目」テストで記述の量がふえた問題、とも考えられよう。企業によって、「専門科目」のなかにコミで扱うことも、独立して「専門論文」とすることもできる問題である。

まえの三つに関する限り、学校の教場試験やレポートのテーマとひとつも変わりがない。レポートを書く要領が、そのまま応用できるだろう。

第二のジャンル　つぎに、テーマについての受験者の〝知識〟の上に、受験者の〝考え〟も知りたい、と一石二鳥をねらった論文。「専門論文」の一部と「時事論文」のほとんどが、このジャンルに入る。

（例）

資本と経営の分離（九州電力）
利子率決定に関する主要学説（北海道拓殖銀行）
争議行為の制限（東京計器）
日本国憲法第九条について述べよ（阪急百貨店）
低開発国の産業構造と世界貿易（東京ガス）
現代における大衆社会化と人間疎外について（東京電力）
最近の技術動向と企業に於ける技術者の心構え（豊田自動織機）

七つのテーマの配列には、あとにいくに従って、時事性と受験者の〝考え〟とを入れる量がだんだん多くなるように、いちおうの段階を考えてみた。

「主要学説を論ぜよ」といわれたからには、いくつかの主要学説についての〝知識〟を提示

した上で、それらを比較し判断する自分の〃考え〃を述べなければなるまい。「憲法第九条」を論ずるためには、第九条そのものと、第九条をめぐる〃現在までの〃解釈の対立とについての〃知識〃を踏まえて、研究者あるいは国民のひとりとしての〃考え〃を述べるべきだろう。最後の例では、〃最近の〃技術動向の実態に関する〃知識〃に立って、技術者としての〃考え〃を現在と未来とに対してあきらかにすることが、はっきりと要求されている。

七つの例では、まえのものほど「研究論文」の性格に近い。筆者の〃考え〃が聞かれてはいるが、その〃考え〃は〃知的な主観〃だけでまにあう。この種の問題には卒論を書くコツがそっくり通用するだろう。

しかし、例で見るとおり、問題の時事性が強まるのにともない、〃考え〃は、推定や判断だけではすまなくなる。つまり、やがてその企業の構成員になる人間としての、主張や態度を示さなければならなくなる。（右の例で、この傾向が、テーマの時事性が深まる角度と一致する理由は、みなさんが自分で考えてみるとよい）

とにかく、筆者の〃考え〃は頭だけのものでなく、身も心もいっしょになった全人格的な〃考え〃になる。ということは、〃論文〃が〃作文〃に近づいてきた、ということだ。

第三のジャンル

つまり、第三のジャンルの論文では、テーマにとりあげたことがらについての〃知識〃は、一般社会人の常識なみでもいい。それよりも、受験者がそのことがらに対

し、どう〝感じ〟どう〝考え〟ているかを聞き、受験者の〝人間〟を知りたい、あるいは受験者の〝文章力〟をはかりたい——出題者は、そういうねらいをもつと考えていいだろう。

(例)

自由民主党（読売新聞）
近代化について論ぜよ（日本冷蔵）
日本文化の特質（日本光学）
修身教育の復活について（日本化薬、その他）
核実験禁止とわが国の立場について所見を述べよ（東横）
政治・経済・法律、或いは社会問題等で最近特に感じていることをひとつとり上げて論ぜよ（三井倉庫）

「自由民主党」というテーマに対して、政治学を専攻し自由民主党を卒論にとりあげたような受験者は、オーソドックスな「自由民主党論」を書くかも知れない。むろん、それはそれでいい。しかし、出題者は、受験者がのこらず政治学専攻者だなどと思ってはいないだろう。また、自由民主党についての専門家ばかりを社員にそろえても、どうなるものでもない。

「近代化」「日本文化の特質」「修身教育の復活」「核実験禁止」どれも、社会人として関心をもっていてほしいし、常識としての幅と深さとをもつ〝知識〟はもっていてほしい一般的、

あるいは時事的な問題である。総合的な見方さえ失なわなければ、そのことがらの〝具体的な〟部分についての〝知識〟にもとずいて、筆者の〝感じ方、考え方〟を述べればよかろう。最後の問題例は、こういう論文での出題者の態度を正直にあらわしている。

第三のジャンルの〝論文〟は、かなり〝作文〟に近い。「私の尊敬する人物」「当社志望の動機と抱負」などというテーマは、ふつう作文の問題として扱われる。しかし、〝尊敬する人物〟についてのひととおりの〝知識〟がなくては、〝尊敬する〟もなにもあったものではない。〝当社〟に関するいちおうの〝知識〟もなくて〝動機や抱負〟だけで志望したのでは、ヒヤカシかヤジウマとしてあしらわれるのがせいぜいだろう。

しいて〝論文〟と〝作文〟とのちがいをあげれば、〝作文〟では、受験者個人の立場をまるだしにしてテーマを処理することが要求され、あるいは許されるということだろうか。「私の家庭」「私の人生観」「わが信条」などなど、ろこつに「私の」「わが」をつけたテーマはぞろぞろあるし、「最近の世相に思う」「学生生活の反省」「印象に残った書物」などというのも、やはり「私」が出ずっぱりになるテーマである。

〝作文〟では、受験者の〝私〟がいちばん問題になる。まえにあげた表でも、金融・商事など対人関係がなによりもたいせつな業種はむろんのこと、〝作文〟を〝論文〟に優先させ、「社員には、まずよい人物を」と考える企業が少なくないことがわかる。

第四のジャンル　が、話をもとに戻そう。〝試験論文〟のテーマには、これまでお話した三つのジャンルのどれにも属さない、といっても扱いようではどれにも属す、〝作文〟にもなるという、空気や水のように融通自在なテーマがある。そう、さしずめ「空気」。あるいは「水」。「船」「港」「丘」「アパート」「名前」……新聞社・雑誌社などジャーナリズムやマス・コミが、よくこの手を使う。が、「こんな題を出されて、どう書いたらいいのだろう」と受験者が頭を抱えて悩むのを見るのがたのしみで、こういう題を選ぶわけでもあるまい。

とりとめのないテーマなら、逆にどうにでもやりくりができる。そこで、百人百様の論文が集まるだろう。受験者ひとりひとりの個性が、よかれあしかれ、一篇一篇の論文にあらわれるだろう。テーマのジャンルがある程度きまっている、ほかの論文にはとてもできない芸当である。

ジャーナリズムやマス・コミは、業種の性質上、人材をできるだけ多角的に集める必要がある。試験論文のとりとめのないテーマも、そのための有効な、あるいは苦肉の策のように思われる。

ともあれ、こういうテーマが出ても、受験者はかくべつ驚くことはない。レポートや論文の絞り方にならって、テーマをまえにあげた三つのジャンルに絞ればよい。「空気」で専門論文を書くつもりで、空気を科学的に扱うのもよい。時事論文と考えて、都会の大気汚染にむすびつけて論じるのもよかろう。あるいは、作文的な要素を強くして、登山して味わった空気のうまさをたとえに、人生や社会について意見を述べるのもいいだろう。論文が、空気にはじまっ

て空気に終り、そのあいだの叙述がいつも空気の意識にむすびつくようなアウトラインで構成されていれば、あとは文章の上手下手という純粋に作文的な問題が残るだけである。
みなさんが学校を卒業して、どういう企業への就職を望むにしても、入社試験に論文が出る場合は、以上のような対策を講じてみたらどうだろうか。

入社試験で作文がかなり重視されるのは、まえにお話したとおりだが、論文の勢力もなかなかのものだ。時事論文が、単独で出題されるケースはわりあい少ないようだが、専門論文や作文とコンビやトリオを作ると、時事論文もけっこうタレントぶりを発揮する。企業が、一人の新入社員を受け入れるのには、企業の将来のためにも、そうとうな覚悟がいる。入社試験の論文の出し方についても、それぞれの企業がいろいろにチエをしぼり、受験者の「知識」と「人格」とをいっぺんに総合的にはかれるような形式を考え出していくのではないか?
もっともこの推論にはかくべつの根拠がない。これは私のカンである。
カン!?……いいかげんなカンはいけない。論文やレポートの基本的な作り方をお話しする本に、当否がすぐに立証できないカンを持ち出したりしては、底が割れたも同然である。これ以上書いていると、テレパシーだの、ご神託だのということばが出てくることにもなりかねない。私も、この辺で本書から〝雲隠れ〟したほうがよさそうである。

〈付〉 おもな基礎資料

レポートの「基礎資料」のところでお約束したように、おもな基礎資料をつぎにご紹介する。図書館の「参考室」には、どんな基礎資料があるか？ また、どんなものを使ったらよいか？ 基礎資料へのガイドという意味で、ご覧願いたい。

順序は、日本十進分類法に従うのをいちおうの原則とした。

表記の方法は、和書については、書名・発行所名を記し、洋書の場合は、これに発行所の所在地と発行年とを加える、という便法をとった。

なお、洋書は、中・高校を通じて、ほとんどの読者が親しんできたと考えられる、英語で書かれたものに限った。

〔総記〕

◇ 百科辞典

世界大百科辞典（平凡社）

世界名著大辞典（平凡社）

日本百科大辞典（小学館）

Encyclopaedia Britannica. 24 vols. London and New York : Encyclopaedia Britannica, 1955. 世界的にもいちばん有名な、権威がある百科辞典のひとつ。参考資料への言及も豊富である。

Encyclopedia Americana. 30 vols. New York and Chicago : Americana Corporation, 1955. 『ブリタニカ』といい勝負である。とくに、アメリカ関係のことがらについては貴重な文献。

Universal Jewish Encyclopedia. 10 vols. New York : Universal Jewish Encyclopedia Co., 1939—1944. もともとは宗教的意図で編まれたものだが、ユニークな百科辞典としても使える。

◇ 逐次刊行物

A. 学術雑誌・記事索引

学術雑誌綜合目録（日本学術振興会）自然科学和文篇・欧文篇、人文科学和文篇・欧文篇の区別がある。

雑誌記事索引（国立国会図書館）人文科学篇・自然科学篇の区別がある。

International Index to Periodicals. New York : H. W. Wilson Co., 1907 to date. 社会科学・人文科学の二つの分野を取り扱う。英語以外数カ国語による資料も収めている。

B. 新聞記事索引

朝日新聞縮刷版〔月刊〕（朝日新聞社）

毎日新聞縮刷版〔月刊〕（毎日新聞社）

New York Times Index. 1913 to date.〔隔週刊〕おなじ記事を扱った、ほかの新聞にも触れている。

C.　年鑑

朝日年鑑（朝日新聞社）

時事年鑑（時事通信社）

日本現勢（共同通信社）

わが国の年鑑には、ほかに大新聞社によるものをはじめとして、『出版年鑑』（出版ニュース社）『新中国年鑑』（中国研究所）『ソヴィエト年報』（雄建社）など、特殊なものがいくつかある。

Britannica Book of the Year. Chicago : Encyclopaedia Britannica, Inc., 1938 to date. ブリタニカ社の年鑑。アメリカーナ社でも、一九二三年以来、*Americana Annual* を発行している。

World Almanac. New York : The World-Telegram and the Sun, 1868 to date.

Information Please Almanac. New York : The Macmillan Company, 1947 to date.

前者はアメリカ重点。後者との併用が理想的と考えられる。

◇ 白書

白書もまた、一種の年鑑と考えられる場合が多い。ただ、白書は総合年鑑とちがって、社会事象のうちから特定の分野だけをとりあげて扱う。だから、総合総記のなかに入れるよりも、綱目別総記のなかで考えるほうが正しいかも知れない。しかし、民間団体・新聞社などが発行する少数の例外を除くと、政府・関係官庁の刊行物としての共通の特殊性をもつ。それで、ひ

とまとめにして、ここで扱っておくことにする。

政府の省・局・課がいろいろあるように、白書の種類にもいろいろあって、今日では百くらいの白書が出ているようだ。毎年、マスコミの経済欄をにぎわす『経済白書』（経済企画庁編）は読者にもおなじみだろうが、そのほか、『国鉄白書』（日本国有鉄道編）、『映画産業白書』（通産省企業局商務課編）、『就職白書——大学と就職・職種と学歴など』（文部省調査局調査課編）などなど、白書の山は花ざかり、といったながめがある。アメリカでも、政府刊行物をひとまとめの目録に収めた『政府刊行物月間目録』——*Monthly Catalog of United States Public Documents* が、一八九五年以来、政府印刷局から発行され、類書もいくつかあって、「白書」類へのガイドになっている。

時事性があるテーマでレポートを作るのには、年鑑・新聞記事索引は欠くことのできない資料であり、白書もまた大いに利用したほうがいいだろう。

つぎに、各綱目別の基礎資料からめぼしいものを紹介しよう。

〔哲学〕

◇ 哲学

岩波小辞典・哲学（岩波書店）

哲学事典（平凡社）

Dictionary of Philosophy and Psychology. New York : The Macmillan Company, 1901—1905. Reprinted by Peter Smith, Gloucester, 1949. 英語で書かれた唯一の哲学百科事典。現代哲学の問題を調べるのにはいささか古いが、中世以降近代までの欧米哲学については、いちばんしっかりした資料。

Encyclopedia of Philosophy. 8 vols. New York : The Macmillan Co., 1967.

The Dictionary of Philosophy. New York : Philosophical Library, Inc., 1952.

◇ 心理学

岩波小辞典・心理学（岩波書店）　心理学辞典（平凡社）

臨床心理事典（岩崎書店）

Encyclopedia of Psychology. New York :The Citadel Press, 1946. 解説がかなりていねいで、紹介文献も多い。

The New Dictionary of Psychology. New York : Philosophical Library, Inc., 1947. 項目は数千に及んでいる。

◇ 倫理学

新倫理辞典（創文社）

倫理学事典（弘文堂）

Encyclopaedia of Religion and Ethics. 7 vols. (cheap ed.) New York : Charles Scribner's Sons, 1951　宗教・倫理だけでなく、哲学・心理学も対象になっている。

◇ 宗教

宗教辞典（堀書店）　聖書辞典（日本基督教団出版部）
世界宗教辞典（創元社）
日本宗教辞典（創元社）
新仏教辞典（誠信書房）

Encyclopedia of Religion. New York : Philosophical Library, Inc., 1945. 主な宗教は総あたりしてあるが、お国がらとして、キリスト教に重点がおかれている。プロテスタント色が強い。

Catholic Encyclopedia. 18 vols. New York : the Gilmary Society, 1907—1954. 一九一四年までに十六巻が出、あと二巻は補遺。カソリック教的解釈が目立つが、項目の範囲はひろい。

New Catholic Encyclopedia. 15 vols. New York : McGraw-Hill, 1967.

New Shaff-Herzog Encyclopedia of Religious Knowledge. 13 vols. New York : Funk & Wagnalls Co., 1908—1912. 一九五五年、補遺二巻が出ている。十九世紀末にドイツで出版された辞典を底本にしたもので、プロテスタント保守派の傾向が見られる。

History of Christianity. New York : Harper & Brothers, 1953.

Dictionary of the Bible. 5 vols. New York : Charles Scribners' Sons, 1898—1904. 欽定訳聖書については、いちばん権威がある辞書。

〔歴史〕

〈附〉 おもな基礎資料

◇世界史

岩波小辞典・世界史（岩波書店）　年表世界史辞典（平凡社）

世界文化史大系（角川書店）

Encyclopedia of World History. Boston : Houghton Mifflin Co., 1952.

The Critical Method in Historical Research and Writing. New York : The Macmillan Co., 1955.

The Modern Researcher. New York : Harcourt, 1957.

◇日本史

岩波小辞典・日本史（岩波書店）

新日本史年表（中央公論社）

日本史研究辞典（創元社）

日本文化史辞典（朝倉書店）

日本文北史大系（小学館）

日本歴史事典（実業之日本社）

日本歴史大辞典（河出書房）

◇東洋史

アジア歴史事典（平凡社）

東洋史辞典（創元社）

◇ 西洋史

西洋史辞典（創元社）

A Survey of European Civilization. Boston : Houghton Mifflin Co., 1952. 西洋史についての、もっともすぐれた基礎文献のひとつ。

◇ 考古学

世界考古学大系（平凡社）

考古学辞典（創元社）

Encyclopedia of Social Siences（後出）を参照。

◇ 伝記

世界人名辞典・東洋篇、西洋篇（東京堂）

現代日本人名辞典（平凡社）

岩波西洋人名辞典（岩波書店）

Webster's Biographical Dictionary. Springfield, Mass. : G. & C. Merriam Co., 1959. 四万人以上を扱い、とくに知名人の家系を調べるのに便利。

Who's Who. London . A. & C. Black Ltd., 1849 to date.

Who's Who は、もともとはイギリス人名年鑑だったが、一八九九年にはアメリカ版 *Who's Who in America* が生まれ、現在では、二十カ国以上にわたる東西各国についての Who's Who がある。また、科

学からスポーツ、芸能にいたる諸分野についての Who's Who もあり、ぜんぶで百種類近くになる。

◇ 地理

A.　地理学

人文地理辞典（東京堂）

A Dictionary of Geography. Penguin 1963.

Aids to Geographical Research. New York : Columbia University Press, 1947.

B.　世界地理

世界地名事典（平凡社）　世界地理風俗大系（誠文堂新光社）　世界の文化地理（講談社）

Columbia Lippincott Gazetteer of the World. New York : Columbia University Press, 1961.

Times Atlas of the World. London : The Times Newspaper Ltd., 1967.

Webster's Geographical Dictionary. Springfield, Mass. : G. & C. Merriam Co., 1960.

C.　日本地理

日本地名事典（朝倉書店）　日本地理風俗大系（誠文堂新光社）

日本地理事典（誠文堂新光社）

〔社会科学〕

社会科学大事典（鹿島出版会）一―三巻既刊、以下続刊

Encyclopedia of the Social Sciences. 15 vols. New York : The Macmillan Co., 1948. 社会科学全分

野にわたる，画期的な事典。

International Encyclopedia of the Social Sciences. 17 vols. New York : Macmillan, 1968.

◇ 政治

岩波小辞典・政治（岩波書店）　岩波小辞典・国際問題（岩波書店）

政治学事典（平凡社）

A Dictionary of Politics. 3rd ed. Penguin 1961.

An Encyclopedia of Modern World Politics. New York : Rinehart & Co., 1950. 世界政治のトピックスとともに各国の政情を知るのに便利。

Statesman's Year-Book ; Statistical and Historical Annual of the States of the World, for the Year. London : Macmillan & Co., 1864 to date.

◇ 法律

岩波小辞典・法律（岩波書店）

岩波六法全書（岩波書店）

新訂・法学辞典（日本評論新社）

新法律学辞典（有斐閣）

Black's Law Dictionary. St. Paul, Minn. : West Publishing Co., 1957.

Concise Law Dictionary for Students and Practioners. London : Sweet & Maxwell, 1947.

Stroud's Judical Dictionary of Words and Phrases. 5 vols. London : Sweet & Maxwell, 1965.

このほか、特定の分野の法律辞典としては、『英米法辞典』（有斐閣）、『刑法事典』『商法事典』『民法事典』（どれも青林書院）、『労働法辞典』（一粒社）などがある。

◇ 経済

岩波小辞典・経済学（岩波書店）

経済学事典（平凡社）

体系・経済学辞典（東洋経済新報社）

人口大事典（平凡社）

経営学辞典（青林書院）

体系・経営学辞典（ダイヤモンド社）

会社要覧（ダイヤモンド社）

Dictionary of Economics. New York : Barnes and Noble, Inc., 1961.

Dictionary of Modern Economics. Washington, D. C. : Public Affairs Press, 1948.

Oxford Economic Altas of the World. New York : Oxford University Press, 1959.

◇ 財政

日本の財政（東洋経済新報社）

税法全書（中央経済社）

Crowell's Dictionary of Business and Finance. New York : Thomas Y. Crowell Co., 1930.

◇ 統計

統計学大辞典（東洋経済新報社）

Handbook of Probability and Statistics with Tables. Sandusky, Ohio : Handbook Publishers, 1953.

◇ 社会学

岩波小辞典・社会思想（岩波書店）

社会学辞典（有斐閣）

社会学辞典（創元社）

民俗学辞典（東京堂）

服飾事典（婦人画報社）

Dictionary of Sociology. New York : Philosophical Library, Inc., 1944.

Dictionary of Social Welfare. New York : Social Sciences Publications, 1948.

◇ 教育

岩波小辞典・教育（岩波書店）

教育科学辞典（朝倉書店）

教育学事典（平凡社）

教育心理学事典（金子書房）

学習指導資料事典（平凡社）

社会教育事典（岩崎書店）

このほか、『現代学校経営事典』（明治図書出版社）『英語教授法辞典』（三省堂）『国語教育辞典』（朝倉書店）『視聴覚教育事典』（明治図書出版社）などなど。

Cyclopedia of Education. 5 vols. New York : The Macmillan Co., 1911—1913. 国際的な視野をもつ良書だが、古いのが難。

Encyclopedia of Educational Researah. New York : The Macmillan Co., 1960. 主要な研究の要約集。

How to Locate Educational Information and Data. New York : Columbia University Teachers College, 1958. 教育関係資料へのガイドとして、たいへん評判が高い。

〔自然科学〕

岩波理化学辞典（岩波書店） 図説科学大系（平凡社）

科学技術史年表（平凡社） 理科事典（平凡社）

KAGAKU no ZITEN（岩波書店）

理学辞典（平凡社）

A Guide to the History of Science. Waltham, Mass. : Chronica Botanica, 1952. 国際的な視野で編まれた科学文献案内書。

Van Nostrand's Scientific Encyclopedia. New York : R. R. Bowker Co., 1958. 専門家にも初心者

にも有益。

◇ 数学

岩波数学辞典（岩波書店）

Mathematics Dictionary. Princeton, N. J. : Van Nostrand, 1959.

別に同社から *International Dictionary of Applied Mathematics*. 1960. 三十一分野への応用方法などが記載してある。

◇ 化学

化学大辞典（共立出版）

The Encyclopedia of Chemistry. New York : Reinhold, 1957.

Thorpe's Dictionary of Applied Chemistry. 12 vols. New York : Longmans, Green and Co., 1937—1956. 標準的応用化学辞典。

◇ 物理

現代物理学講座（岩波書店）

理論物理学新講座（弘文堂）

Handbook of Chemistry and Physics. Cleveland : The Chemical Rubber Co., 1964. とくに大学学生用に編まれたもので、毎年のように改訂されている。数学もかなり扱っている。

International Dictionary of Physics and Electronics. Princeton : Van Nostrand, 1961. 古今の物理学にわたり、独・仏・露・スペイン語の索引がある。

◇ 天文学

地球天文事典（平凡社）

現代天文学事典（恒星社）

The Amateur Astronomer's Handbook. New York : The Macmillan Co., 1955.

◇ 地学

海洋の事典（東京堂）

気象の事典（東京堂）

鉱物辞典（風間書房）

Guide to Geologic Literature. New York : McGraw-Hill Book Co., 1951.

Handbook of Meteology. New York : McGraw-Hill Book Co., 1945.

Minerals Yearbook. Washington, D. C. : U. S. Government Printing Office, 1933 to date.

◇ 生物学・博物学

生物科学辞典（みすず書房）

岩波生物学辞典（岩波書店）

Cambridge Natural History. 10 vols. London and New York : The Macmillan Co., 1891—1905.

The Encyclopedia of the Biological Sciences. New York : Reinhold, 1691.

◇ 植物学

植物の事典（東京堂）　原色植物検索図鑑（北隆館）

Gray's Manual of Botany. New York : American Book Co., 1950.

◇ 動物学

応用動物事典（北隆館）

原色動物大図鑑（北隆館）

昆虫学辞典（北隆館）

Guide to the Literature of the Zoological Sciences. Minneapolis : Burgess Publishing Co., 1962.

Zoological Record. London : Zoological Society of London, 1862 to date.

◇ 医学

医学大辞典（南山堂）

病院要覧（医学書院）

食品事典（同文書院）

American Illustrated Medical Dictionary. Philadelphia and London : W. B. Saunders Co., 1957.

英語で書かれた医学辞典としては最大のもの。

History of Medicine. New York : McGraw-Hill Book Co., 1947.

[工学・技術]

◇ 工学・工業

工業大事典（平凡社）

Engineering Encyclopedia. New York : Industrial Press, 1963.

Thesaurus of Engineering Terms. New York : Engineers Joint Council, 1964.

Engineering Materials Handbook. New York : McGraw-Hill, 1958.

土木工学ハンドブック（技報堂）

建築学辞典（共立出版）

機械工学辞典（日刊工業新聞社）

船舶辞典（天然社）

石油化学事典（ケミカルマーケッティングセンター）

計測事典（日刊工業新聞社）

◇ 家事

家庭科辞典（平凡社）

Complete Home Improvement Handbook. New York : McGraw-Hill Book Co., 1957.

〔産業〕

◇ 農業

農業小辞典（博文社）

Agricultural Index. New York : H. W. Wilson Co., 1916 to date.

◇園芸

園芸大辞典（誠文堂新光社）

Standard Cyclopedia of Horticulture. 3 vols. New York : The Macmillan Co., 1947.

◇林業

林業百科辞典（日本林業技術協会）

Forestry Handbook. New York : The Ronald Press Co., 1955.

◇商業

現代商学事典（新紀元社）

Commercial Dictionary. London : Sweet and Maxwell, 1953.

Encyclopedic Dictionary of Bussiness. New York : Prentice-Hall, 1952.

会計学辞典（同文館）

決算事典（同文館）

月賦販売事典（中央経済社）

販売事典（同文館）

現代金融事典（春秋社）

広告事典（同文館）

商品大辞典（東洋経済新報社）

世界貿易事典（日本経済新聞社）

貿易為替辞典（至誠堂）

貿易実務辞典（青林書院）

保険辞典（有斐閣）

◇ 交通

鉄道辞典（日本国有鉄道編）

海事六法（海事六法委員会編）

◇ 通信

テレビ・ラジオ事典（朝日新聞社）

〔芸術〕

Art through the Ages. New York: Harcourt, Brace and Co., 1959.

Encyclopedia of World Art. 14 vols. New York : McGraw-Hill, 1959—67.

Harper's Encyclopedia of Art. 2 vols. New York : Harper & Brothers, 1937. 伝記的解説に特色があり，フランス，イタリアの絵画彫刻を重点的に扱っている，リプリント版では，*New Standard Encyclopedia of Art* と書名が変わった。

◇ 美術

岩波小辞典・西洋美術（岩波書店）　西洋美術辞典（東京堂）

日本美術辞典（東京堂）

近代絵画事典（紀伊国屋書店）

Encyclopedia of Painting. New York : Crown Publishers, Inc., 1955.

The Harper History of Painting. New York : Harper and Brothers, 1951.

◇ 音楽

岩波小辞典・音楽（岩波書店） ジャズの事典（創元社）

音楽事典（平凡社） N響名曲事典（平凡社）

Grove's Dictionary of Music and Musicians. 9 vols., with Supplment. New York : St. Martin's Press, 1961. 音楽百科辞典といってよいもの。

New Oxford History of Music. 4 vols. London : Oxford University Press, 1957—(in progress)

Oxford Companion to Music. London : Oxford University Press, 1950.

◇ 演劇・映画

演劇百科大辞典（平凡社）

能楽鑑賞事典（河出書房新社）

映画百科辞典（白楊社）

World Drama : From Aeschylus to Anouilh. New York : Harcourt, Brace and Co., 1940.

International Motion Picture Almanac. New York : Quigley Publications, 1929 to date.

◇ 体育・スポーツ

体育科事典（岩崎書店）

The Encyclopedia of Sports. New York : A. S. Barnes and Co., 1953.

The Outdoor Encyclopedia. New York : A. S. Barnes and Co., 1956. とくに、スキー、スケートなどの個人スポーツを扱っている。

〔言語〕

世界言語概説（研究社）

Dictionary of Linguistics. New York : Philosophical Library, Inc., 1954.

◇ 日本語

岩波国語辞典（岩波書店）

広辞苑（岩波書店）

国語学辞典（東京堂）

全国アクセント辞典（東京堂）

全国方言辞典（東京堂）

日本文法辞典（明治書院）

明解古語辞典（三省堂）

詳解漢和大辞典（富山房）

◇ 英語

英和中辞典（岩波書店）　新英和大辞典（研究社）

新英和活用大辞典（研究社）　新和英大辞典（研究社）

New English Dictionary on Historical Principles. 10 vols. Oxford : Clarendon Press, 1888—1933. 一九三三年以来 *Oxford English Dictionary* と名を変え、現行版では十三冊になっている。学問的にいちばんすぐれた英語辞書。本書にならったアメリカ語辞書は、

Dictionary of American English on Historical Principles. 4 vols. Chicago : University of Chicago Press, 1938—1944. である。

Random House Dictionary of the English Language. New York : Random House, 1966.

Webster's 3rd New International Dictionary of English Language. Springfield : Merriam, 1966.

〔文学〕

◇ 世界文学

岩波講座・世界文学（岩波書店）

解説世界文学史年表（中央公論社）

世界文学講座（新潮社）

The Reader's Encyclopedia. New York : T. Y. Crowell Co., 1955.

日本文学

岩波小辞典・日本文学（岩波書店）
日本文学大辞典（新潮社）
現代日本文学辞典（河出書房）
随筆辞典（東京堂）
万葉集辞典（平凡社）
源氏物語事典（東京堂）
国歌大観（角川書店）
和歌文学大辞典（明治書院）
俳諧大辞典（明治書院）
芭蕉辞典（東京堂）
日本近代詩辞典（青蛙書房）

◇ 英米文学

Cambridge History of American Literature. 4 vols. New York : G. P. Putnam's Sons, 1961.
Cambridge History of English Literature. London : Cambridge University Press, 1907—1927.

ほかの文献は、本書から求めればよかろう。また、今世紀の文学については、*Twentieth Century Authors*. New York : H. W. Wilson Co. 1942. Supplement, 1955. を参照するとよい。

◇ 児童文学

世界児童文学事典（共同出版社）
現代児童文学辞典（宝文館）

もちろん、右のリストにあげた基礎資料は、たくさんあるすぐれた基礎資料のなかの一部にすぎない。もし、基礎資料をもっと求めたければ、和書のばあいは『日本の参考図書』（同書編集委員会編・刊）などで調べればよい。また、準基礎資料とでもいえるような文献は、出口一雄著『良書のえらび方』（現代教養文庫・社会思想社）にあたるとよい。同書の第二部「教養のための基本図書一〇〇〇選」には、日本語での代表的な準基礎資料がたくさん紹介されている。洋書ならば、

Murphey, Robert W. *How and Where to Look It up : A Guide to Standard Sources of Information*. New York : McGraw-Hill Book Co., 1958.

Winchell, Constance M. *Guide to Reference Books*. 8th ed. Chicago : American Library Association, 1967.

の両書で調べるとよい。後者には、一九六〇年までの「補遺」が出ている。

また、資料の求め方全体について、もっとつっこんで知りたければ、藤川正信『第二の知識の本』（新潮ポケット＝ライブラリィ・新潮社）がよい参考になろう。

著者略歴

1925年東京に生まれる。
1956年早稲田大学大学院英文学研究科修了。
1968年現在同教授。専攻スコットランド文学。
専攻に関する論文のほか，著書に『ヘンリー・フォード伝』（小峰書店），訳書にR.G.コリングウッド『芸術哲学概論』（紀伊国屋書店）などがある。

実日新書 43

論文・レポートの書き方　¥ 250

昭和40年7月5日　初版発行
昭和43年12月1日　12版発行

著者　三浦修

O. MIURA　© 1965

発行者　増田義彦

発行所　株式会社 実業之日本社

〒104　東京都中央区銀座1の3の9　電話(562)4311　振替東京 326
〒530　関西支局 大阪市北区真砂町53 書協ビル内　電話大阪(363)1706
編集人 佐々木 淳　担当 吉戒喜義　印刷 佐藤(本文) 小倉(表紙)　製本 共文堂

乱丁・落丁の場合は本社でお取り替えいたします　Printed in Japan

実業之日本社のペーパーバックス

No.	書名	著者	定価	内容
25	根づよく生きるぞ	加藤日出男	二〇〇円	「若い根っこ」のリーダーが若人激励
26	福沢先生の言葉	藤原銀次郎	二五〇円	福翁の名言訓話を平易に寸解の名著
27	昇進	小山八郎	二三〇円	会社は実力ある人材をもとめている
28	アメリカ留学の手引き	嘉治真三	二二〇円	アメリカ留学実現のための必読案内
29	巨富を築く13の条件	ナポレオンヒル 志賀政喜	二二〇円	富豪になるための手順をとく名著。
30	四十からの健康	杉靖三郎	二五〇円	若さを回復するための現代版養生訓
31	ワンマン経営のすすめ	大坪檀	二四〇円	会社繁栄のための統率力如何を説く
32	ヒット製品誕生の秘密	芝山栄二	二四〇円	新製品開発の成功例取材企業人必読
33	アメリカとアメリカ人	浜田容子	二三〇円	知られざるアメリカの全貌報道記録
34	成功する人間関係	三神良三	二四〇円	人間関係の上手下手が成功の決め手
35	スペシャリスト時代	森村稔	二二〇円	サラリーマン生き残りの条件は何か
36	明日への着眼	市村清	二四〇円	すぐれた着想の舞台裏を実例で公開
37	勝負根性	八田一朗	二二〇円	人生に勝つスパルタ式根性養成法。
38	アスパラ経営戦法	平林忠雄	二五〇円	新薬の拡販に成功した経営法の実体
39	楽しみながら出世する法	夏目通利	二二〇円	ビジネスマン出世街道の指針を明示
40	スピード会議術	天羽大平	二五〇円	スムーズで合理的な会議のすすめ方
41	商標とネーミング	豊沢豊雄	二五〇円	企業に役立つ商標と特許出願手引き
42	ビジネスに勝つ19の条件	戸川猪佐武	二四〇円	ビジネス生活の心構えと実際的手段
43	論文・レポートの書き方	三浦修	二五〇円	学生は勿論一般人必携の論文作法。
44	きみはどの会社を選ぶか	鈴木幸夫	二五〇円	ヨソの会社ウチの会社の社風と体質
45	肚づくり	山田無文	二五〇円	自我を超える世界に目覚めよと力説
46	長生き健康の秘密	近藤宏二	二五〇円	名士の診断から食生活健康法を説く
47	あなたも本が書ける	清水治郎	二四〇円	素人が本を書く狙い所とその手順。
48	三分間講話	花岡大学	二四〇円	東西古今の心にしみるエピソード集
49	安く手に入れ乗りこなすマイカー専科	宮本晃男	二五〇円	上手な買い方・維持の仕方と整備法
50	成功するアイデアのつかみ方	市橋立彦	二五〇円	アイデア発想の失敗例成功例を詳述

著者　三浦　修

学生のりっぱなレポートや論文を受けとったときは、とてもうれしい。ただ、こういう点に気をつけ、もう一歩すすんだまとめかたをしたら、完全なものになったであろうと、惜しまれることも少なくない。

三浦さんのこの本は、いままでの文章の作り方だけを重視したこの種の本と違って、レポートや論文の本質がはじめて究明されている。

本書は、レポートや論文の作り方の細部にまで気がくばってあり、全体としてもよくまとまり、読んでいておもしろい。学生だけでなく一般のひとにもよい参考になる本である。

東京工大教授　**八杉竜一**

実日新書43　¥250　実業之日本社